潜在的性役割的偏見の発現と
ジェンダー・ステレオタイプの受容における
心理過程の検討

研究課題番号：15530402

平成 15 年度～平成 17 年度

科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告書

平成 18 年 3 月

研究代表者　沼崎 誠

（首都大学東京 都市教養学部 助教授）

はしがき

本報告書は，平成 15-17 年度科学研究費補助金（基盤研究(c)）「潜在的性役割的偏見の発現とジェンダー・ステレオタイプの受容における心理過程の検討」の成果をまとめたものである．本研究における研究組織，交付決定額，既に発表済みの研究は以下のとおりである．

研究組織

研究代表者　：　沼崎　誠　　（首都大学東京 都市教養学部 助教授）

研究協力者　：　小野　滋　　（東京都立大学大学院 人文科学研究科・(株)日能研）
研究協力者　：　高林　久美子（一橋大学大学院 社会科学研究科）
研究協力者　：　天野　陽一　（東京都立大学大学院 人文科学研究科）
研究協力者　：　石井　国雄　（東京都立大学大学院 人文科学研究科）

交付決定額（配布額）

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
平成15年度	1,300.000	0	1,300,000
平成16年度	700,000	0	700,000
平成17年度	900,000	0	900,000
総　計	2,900,000	0	2,900,000

研究発表

(1) 学会誌等

沼崎誠・小野滋・高林久美子・石井国雄（2006）Sequential　Priming によるジェンダー・ステレオタイプの活性化の研究　東京都立大学人文学報, *369*, 21-52.

(2) 学会発表

沼崎誠（2003）．死の顕現性と平等主義的性役割態度が性役割的偏見に及ぼす効果 日本心理学会第 67 回大会発表論文集, 1319.

沼崎誠（2004）．能力の低い人は温かいか？　－死すべき運命の顕現化と平等主義的性役割信念が男性・女性の評価に及ぼす効果－　日本グループ・ダイナミックス学会第51回大会発表論文集, 186-187.

沼崎誠・小野滋・高林久美子・石井国雄（2005）．Sequential priming によるジェンダー・ステレオタイプの活性化の研究(1) －伝統的性役割人物と非伝統的性役割人物を含めた検討－　日本心理学会第69回大会発表論文集, 113.

石井国雄・小野滋・高林久美子・沼崎誠（2005）．Sequential priming によるジェンダー・ステレオタイプの活性化の研究(2) －特性語感情価評価を用いて－　日本心理学会第69回大会発表論文集, 114.

Numazaki, M., Takabayashi, K., & Amano, Y.（2006）. *The effects of priming of heterosexual romantic relationships on men's attitudes toward homeworkers and career women.* Presented paper at The 7th annual Society of Personality and Social Psychology conference, Palm Springs, USA.

Takabayashi, K., Numazaki, M., Ono, S., & Ishii, K.（2006）. *Women have a prejudice toward women? The effects of activated self-representation on stereotyping and evaluation toward women.* Presented paper at The 7th annual Society of Personality and Social Psychology conference, Palm Springs, USA.

目　次

概　要 ---------- 1

研 究 成 果

Ⅰ. Sequential Priming によるジェンダー・ステレオタイプの活性化の予備的検討 --- 7

Ⅱ. 男女間の競争状況がジェンダー・ステレオタイプの活性化に及ぼす効果 -------- 47

Ⅲ. 死すべき運命の顕現化が性役割的偏見に及ぼす効果 ---------- 63

Ⅳ. 無能な人は温かいか？ 冷たい人は有能か？
ー死すべき運命の顕現化と平等主義的性役割観が
同性/異性の評価に及ぼす効果ー ---------- 95

Ⅴ. 女性は女性に対して偏見を示すか？
ー活性化した自己表象が女性への評価とステレオタイプ化に及ぼす効果ー ----- 111

Ⅵ. 恋愛は女性に対するステレオタイプ化や偏見を強めるか？
ー異性愛プライムと平等主義的性役割観がキャリア女性と
家庭女性に対する印象や評価に及ぼす効果ー ---------- 125

概　要

平成 11 年に男女共同参画社会基本法の制定・施行，および，男女雇用機会均等法の改正が実施され，ジェンダーに基づいた性役割的偏見や差別を無くしていこうという社会情勢にある．このような中で「男女平等」ということに正面切って反対を唱えることは少なくなってきている．また，ジェンダーに左右されないと自分自身を捉えている若者も多い．しかし，現実には若者のあいだにも，ジェンダーに基づいた偏見や差別が見られることは否定できない．本研究では，最近のジェンダー・ステレオタイプや性役割的偏見に関わる理論的・実証的研究の進展を受け，単純な質問紙法では現れてこない性役割的偏見や差別が，特定の状況においては顕在化する心理的過程を，日本人男女若者を実験参加者とした実験手法を用いた研究から明らかにすることにより，ジェンダー・ステレオタイプやジェンダー秩序の再生産という大きな問題を解決する手がかりを得ることを目的とした．

最近の社会心理学においてステレオタイプや偏見の研究では，理論的にも実証的にも大きな進展が見られている（e.g., Dovidio, Glick, & Rudman, 2005）．

第 1 に，ジェンダー・ステレオタイプに関するものとしては，男性ステレオタイプや女性ステレオタイプといった単純なステレオタイプがあるのではなく，ジェンダーに関してはサブカテゴリー・ステレオタイプが広く，女性において特に顕著に，存在していることが示されてきている（e.g., Glick, Zion, & Nelson, 1988; Eagly, Mladinic, & Otto, 1991）．そして，サブカテゴリー・ステレオタイプは「作動性」と「共同性」という次元で理解でき，かつ，ポジティブな側面とネガティブな側面の双方を含むアンビバレントなものであることが指摘されている（e.g., Glick & Fiske, 2001）．最近のジェンダー・ステレオタイプの研究においては，サブカテゴリー・ステレオタイプを考慮に入れた研究が行われるようになってきている．

第 2 に，性役割的偏見に関するものとしては，ステレオタイプばかりではなく，男性が女性を評価する場合にも女性が男性を評価する場合にも，ネガティブな評価ばかりでなくポジティブな評価も存在するアンビバレントなものとなっていることが指摘されている．また，これらの評価の理解には，地位の格差・支配と家父長制・親密な関係と敵対的関係，といった社会構造の理解が不可欠であることが指摘されている（e.g., Glick & Fiske, 2001; Jost & Hunyady, 2002）．最近の性役割的偏見の研究においては，社会構造を踏まえた敵意的偏見と好意的偏見の双方を考慮に入れた研究がなされるようになってきている．

第 3 に，ステレオタイプ化と偏見が生じる心理過程を理解する上で，自動的過程と統制された過程を明確に区別して研究をする必要性が指摘されている（e.g., Chaiken & Trope, 1999）．自動的なステレオタイプの活性化や自動的偏見を測定するためのツール（e.g., Implicit Association Test, Sequential Priming Task）が開発されることにより，自動的過程

に関する研究が増大し，自動的過程と統制された過程がステレオタイプ化と偏見の発現にどのように寄与しているのかという問題に焦点が当てられるようになってきている．最近の研究においては，ステレオタイプの適用や偏見といった統制された過程が状況要因によって影響を受ける現象とともに，ステレオタイプの活性化といった自動的過程も状況要因に影響を受けることが注目されるようになってきている（e.g., Blair, 2002; Kunda & Spencer, 2003）.

本報告書で報告する一連研究では，このような理論的・実証的進展を受け，日本における潜在的なジェンダー・ステレオタイプと性役割的偏見について検討をおこなった．本研究では『潜在的』という言葉は 2 つの意味で用いている．1 つは，顕在的尺度だけでは明確にしづらいステレオタイプの自動的活性化や自動的偏見といた自動的過程を指す．日本においてはステレオタイプや偏見の研究で自動的過程を扱った研究が少ないことから，ジェンダー・ステレオタイプの自動的活性化を適切に測定できる手法の開発と，それを用いて現代の日本人大学生に持たれているジェンダー・ステレオタイプの内容の理解を目指した（Ⅰ，Ⅱ）．もう 1 つの意味としては，単純に質問紙に回答するといった方法を用いた研究では現れてこない偏見を指す．このような偏見も，ある種の状況においては，顕現化し表明されることがある．どのような状況において，このような潜在的偏見が顕現化されるようになるかを複数の状況を設定して検討をおこなった（Ⅱ，Ⅲ，Ⅳ，Ⅴ，Ⅵ）．また，これらの潜在的なジェンダー・ステレオタイプと性役割的偏見が，顕在的な尺度で測定される平等主義的性役割観（鈴木, 1991, 1994）によって調整されるかも検討した（Ⅲ，Ⅳ，Ⅵ）.

さらに，ジェンダー・ステレオタイプにはサブカテゴリーが重要である指摘を受けて，女性におけるサブカテゴリーを中心に取り上げ検討をおこなった（Ⅰ，Ⅲ，Ⅳ，Ⅴ，Ⅵ）．しかし，現代社会においては男性においてもサブカテゴリー・ステレオタイプが存在する可能性があり，男性のサブカテゴリーについても取り上げ検討をおこなった（Ⅰ，Ⅳ）．また，サブカテゴリー・ステレオタイプが存在するような現代社会においては，ジェンダー・ステレオタイプや性役割の再生産を理解するためには，先行研究で多く取り上げられている男性の女性に対するステレオタイプの適用や偏見ばかりでなく，両性の両性に対するステレオタイプの適用と偏見も検討する必要があろう．そこで，男性の女性に対するステレオタイプの適用と偏見（Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ，Ⅳ，Ⅵ），女性の女性に対するステレオタイプの適用と偏見（Ⅰ，Ⅲ，Ⅳ，Ⅴ，Ⅵ），女性の男性に対するステレオタイプの適用と偏見（Ⅰ，Ⅳ），そして，男性の男性に対するステレオタイプの適用と偏見（Ⅰ，Ⅳ）についても検討をおこなった.

研究Ⅰでは，男女大学生を実験参加者として，Sequential Priming Task を用いて，＜伝統的性役割 vs.非伝統的性役割＞×＜男性 vs.女性＞の 4 タイプの人物をプライムしたときのジェンダー・ステレオタイプの自動的活性化を，語彙判断課題と評価判断課題を用いて

検討した．女性ばかりではなく男性においてもサブカテゴリー・ステレオタイプがあること，伝統的男性次元においてステレオタイプの内容が相違していること，評価判断課題において男性の女性に対する偏見が見られやすいこと，などが示された．

研究Ⅱでは，男子大学生を実験参加者として，男女の個人的競争という脅威状況でのジェンダー・ステレオタイプの活性化について検討をおこなった．女性との競争群，男性との競争群，女性との競争無し群の 3 群を設け，＜男性名 vs. 女性名＞をプライム刺激，＜男性語 vs. 女性語＞×＜ポジティブ語 vs. ネガティブ語＞の 4 カテゴリーをターゲット語とした Sequential Priming Task を用いて自動的活性化を測定した．脅威状況となりうる女性との競争状況では，男性ポジティブ語と女性ネガティブ語の反応が速くなるという仮説とは異なり，女性との競争群では女性名がプライムされるとポジティブ語に対する反応が速くなるという結果が得られた．また，男性との競争群では女性名がプライムされるとネガティブ語に対する反応が速くなるという結果が得られた．仮説と異なった結果が得られた理由は明確には言えないが，男性が得意な課題であると教示したことが原因の 1 つとして考えられよう．

研究Ⅲでは，男女大学生を実験参加者として，脅威状況での女性に対するジェンダー・ステレオタイプの適用と偏見の検討をおこなった．死すべき運命の顕現化（MS）という文化的世界観防衛を引き起こしやすい脅威状況の有無を操作した上で，伝統的女性と非伝統的女性に対するステレオタイプの適用と評価を測定した．顕在的性役割観尺度で伝統的性役割観を持つと主張する男性では，MS 時では統制群に比べ，伝統的女性に個人的好意を向けるが仕事仲間としては排除するようになり，非伝統的女性に個人的好意を向けないが，仕事仲間としては認めるようになった．つまり，女性に対するサブカテゴリー・ステレオタイプの適用を強化する（伝統的女性をより伝統的な意味で女性的に非伝統的女性をより男性的に見る）ことが示された．一方，平等的性役割観を持つと主張する男性では，MS 時では統制群に比べ，伝統的女性に対して個人的好意を向けるようになった．顕在的性役割態度尺度で伝統的性役割観を持つと主張する女性では，MS 時では統制群に比べ，アンビバレント的な偏見（伝統的女性に好意を非伝統的女性に敵意を示す）が強化することが示された．しかし，平等的性役割観を持つと主張する女性では逆の傾向であることが示された．

研究Ⅳでは，男女大学生を実験参加者として，脅威状況での男性と女性双方に対するステレオタイプの適用と偏見の検討をおこなった．死すべき運命の顕現化（MS）の有無を操作した上で，「能力が低い人物」か「冷たい人物」か「ニュートラル人物」の印象評定をおこなわせた．能力が低い人物はニュートラルな人物に比べ温かいという印象を与え，冷たい人物はニュートラルな人物に比べ有能であるという印象を与えていた．異性に対する評定では MS 時と統制群に違いはほとんど見られなかったが，同性に対する評定において顕在的性役割観尺度で伝統的性役割観を持つと主張する人と平等的性役割観を持つと主

張する人で差が見られた．MS 時には統制群に比べ，伝統的性役割観が強い人のあいだで，同性でネガティブな属性を持つ人物の評価を低くするという黒い羊効果と解釈できる現象が見いだされた．

研究Ⅴでは，女子大学生を実験参加者として，活性化した自己表象が女性に対するステレオタイプの適用と偏見に及ぼす効果を検討した．現代の女性の多くが伝統的女性に関連する自己表象と非伝統的女性に関連する自己表象のどちらも保有していることを前提とし，伝統的女性に関連する自己表象か非伝統的女性に関連する自己表象を活性化させ，伝統的女性と非伝統的女性に対するステレオタイプの適用と評価を測定した．活性化した自己表象と一致する女性に対しては好意的になることが見いだされた．さらに，伝統的女性に関連する自己表象を活性化したときは，非伝統的女性に関連する自己表象を活性化したときに比べ，女性に対するサブカテゴリー・ステレオタイプの適用を強化する（伝統的女性をより伝統的な意味で女性的に非伝統的女性をより男性的に見る）ことが示された．ただし，これらの効果は活性化操作のための課題が適切にできた女性参加者においてのみ見られた．

研究Ⅵでは，男女大学生を実験参加者として，男女相補関係を示唆する異性愛に関わる概念が活性化したときの，女性に対するステレオタイプの適用と偏見に及ぼす効果を検討した．異性愛プライムの有無を操作した上で，伝統的女性と非伝統的女性に対するステレオタイプの適用と評価を測定した．男性参加者では，顕在的性役割観尺度で伝統的性役割観を持つと主張する男性では，異性愛が活性化したときには活性化していないときに比べ，女性に対するサブカテゴリー・ステレオタイプの適用を強化する（伝統的女性をより伝統的な意味で女性的に非伝統的女性をより男性的に見る）ことが示され，非伝統的女性を上司としては高く評価するようになった．一方，平等主義的性役割観を持つと主張する男性では，異性愛が活性化したときには活性化していないときに比べ，アンビバレントな偏見（伝統的女性に対して好意的になり非伝統的女性に対して非好意的になる）が強化されることが見られた．女性参加者では，顕在的性役割観尺度で伝統的性役割観を持つと主張する女性では，異性愛が活性化したときには活性化していないときに比べ，上司としての評価においてアンビバンレントな偏見（伝統的女性に対して好意的になり非伝統的女性に対して非好意的になる）が強化されることが示された．しかし，平等主義的性役割観を持つと主張する女性では逆の傾向であることが示された．

一連の研究は，通常の顕在的な質問紙では測定できない，潜在的なジェンダー・ステレオタイプや潜在的性役割的偏見を，男性女性の双方に対して男性女性の双方が持っていることを示唆する．そして，これらの発現が，男女集団間競争（沼崎・工藤，1995）や死すべき運命の顕現化といった脅威状況ばかりではなく，男女の相互依存的な友好関係を示す状況においても発現しやすくなることが示唆された．また，潜在的なジェンダー・ステレオタイプや潜在的性役割的偏見が，顕在的尺度で測定される性役割観によって調整される

ことも多くの研究で示唆された．さらに，これらの発現の仕方は，サブグループに対するサブカテゴリー・ステレオタイプの利用や好意・非好意を使い分ける非常に複雑なものであることも示唆された（本報告書Ⅲの考察を参照）．

これらの実証的研究の結果を受けて，各章においては，このような心理メカニズムが現代日本の社会におけるジェンダー・ステレオタイプやジェンダー秩序の再生産にどのように寄与しているかについて考察を加えた．

本報告書で報告する実験という手法によって得られた知見は最終的なものと言えないものも多くある．今後も現代日本におけるジェンダーに関わる問題の解決の示唆を与えるような実証的研究を進めていきたいと考えている．

引用文献

Blair, I. V.（2002）. The malleability of automatic stereotypes and prejudice. *Personality and Social Psychology Review, 6*, 242-261.

Chaiken, S., & Trope, Y.（1999）. *Dual-process theories in social psychology.* New York: Gilford Press.

Dovidio, J. F., Glick, P. & Rudman, L. A.（Eds.）（2005）. *On the nature of prejudice: Fifty years after Allport.* Malden, MA: Blackwell.

Glick, P., & Fiske, S. T.（2001）. Ambivalent sexism. In M. P. Zanna（Ed.）, *Advances in Experimental Social Psychology,*（Vol. 33, pp. 115-112）. San Diego, CA: Academic Press.

Jost, J. T., & Hunyady, O.（2002）. The psychology of system justification and the palliative function of ideology. *European Review of Social Psychology, 13,* 111-153.

Kunda, Z., & Spencer, S. J.（2003）. When do stereotypes come to mind and when do they color judgment? A goal-based theoretical framework for stereotype activation and application. *Psychological Review, 129*, 522-544.

沼崎誠・工藤恵理子（1995）. 女性との競争状況が男性の家庭志向型女性・キャリア志向型女性に対する好意に及ぼす効果　日本グループダイナミックス学会第 43 回大会発表論文集, 246-247.

鈴木淳子（1991）. 平等主義的性役割態度：SESRA（英語版）の信頼性と妥当性の検討および日米女性比較　社会心理学研究, *6*, 80-87.

鈴木淳子（1994）. 平等主義的性役割態度スケール短縮版（SESRA-S）の作成　心理学研究, *65*, 34-41.

Ⅰ．Sequential priming によるジェンダー・ステレオタイプの活性化の予備的検討

沼崎 誠　（首都大学東京）
小野 滋　（(株)日能研）
高林 久美子　（一橋大学大学院）
石井 国雄　（東京都立大学大学院）

1990 年代以降の偏見やステレオタイプの研究では，自動的過程と統制された過程を区別をして検討する必要性が指摘されている(e.g., Bargh, 1999; Devine, 1989; Devine & Monteith, 1999; Fiske, 1998)．本論文では，この指摘を受けて，日本におけるサブカテゴリー・ステレオタイプを含めたジェンダー・ステレオタイプの自動的活性化を研究するための予備的検討をおこなった．

本論文ではまずステレオタイプの自動的活性化の測定法を整理し，次に，ジェンダー・ステレオタイプの最近の研究をレビューした．これらレビューを受けて，日本においてジェンダー・ステレオタイプの活性化を測定するために考慮すべき問題点を整理した上で, 2 つの研究によって, 日本におけるジェンダー・ステレオタイプの自動的活性化を検討した．

ステレオタイプの自動的活性化の測定法

ステレオタイプが活性化しているかどうかを調べるためには，ステレオタイプの接近可能性が高まっているかどうかを測定する必要がある．ステレオタイプの接近可能性は，ステレオタイプ対象とステレオタイプ的特徴の連合が高まっている状態，または，ステレオタイプ的特徴の接近可能性が高まっている状態と考えられている．ステレオタイプの活性化は一時的な(temporal)接近可能性を測定するものであるが，慢性的な(chronic)記憶表象の接近可能性の高さを測定する潜在的態度の測定法と同様の手法が取られ，SPT (sequential priming task)と IAT(implict association test)が多く用いられている(Fazio & Olson, 2003)．SPT と IAT は，慢性的な記憶表象の接近可能性の高さを測定するものとして開発されたものであるが，状況要因によっても変化することが実証的に示されるようになり，一時的な活性化指標として使われるようになってきている(e.g., Blair, 2002; Kunda & Spencer, 2003)．最近では. 連合が高まった状態を測定する課題として, GNAT(Go/No-go Association Task)や誤武器知覚課題も用いられるようになってきている．ステレオタイプ的特徴の活性化としては，語彙判断課題，語彙完成課題が用いられることが多い(Blair, 2002)．以下にそれぞれの手法の特徴を整理しておく．

SPT プライム刺激が呈示された後にターゲット刺激が呈示され，ターゲット刺激に対する反応時間を測定する課題である(e.g., Fazio, Jackson, Dunton, & Williams, 1995)．プライム刺激呈示からターゲット刺激呈示までの SOA(stimulus onset asynchrony)が短い場合(Neely, 1977)，プライム刺激とターゲット刺激の関係がステレオタイプに一致していると

きに，一致していないときに比べて，速くなった場合には自動的にステレオタイプが活性化していると判断できる．この方法にはいくつかのバリエーションがある．プライム刺激とターゲット刺激の関係については，プライム刺激がステレオタイプ特徴でターゲット刺激がステレオタイプ対象にする方法と(e.g., Blair & Banaji, 1996)，プライム刺激がステレオタイプ対象でターゲット刺激がステレオタイプ特徴にする方法がある(e.g., Winttenbrink, Judd, & Park, 2001a)．ステレオタイプ対象としては，対象を直接文字で呈示する方法や（「男性」「女性」），対象を示唆する情報を文字で呈示する方法（男性名，女性名），対象を写真で呈示する方法がある．また，ステレオタイプ特徴に対する反応としても，語彙判断課題（有意味語か否か）をおこなわせる場合と感情価判断課題（ポジティブ語かネガティブ語か）をおこなわせる場合がある．語彙判断課題ではステレオタイプ的知識の自動的活性化を，感情価判断課題ではステレオタイプ的評価の自動的活性化を測定していることが実証的に示されている(Winttenbrink, Judd, & Park, 2001b)．この課題の特徴は一度に複数のステレオタイプ対象とステレオタイプ特徴を扱うことができる点にある．

IAT ステレオタイプ対象 2 カテゴリー(e.g., 「男 vs. 女」)とステレオタイプ特徴 2 カテゴリー(e.g., 「強 vs. 弱」)が含まれる一連の刺激を，2 つのキーを使って 4 つのカテゴリーに分ける課題である(Greenwald, McGhee, & Schwartz, 1998)．特定のステレオタイプ対象とその対象のステレオタイプ特徴が同一のキーに割り当てられたときの反応時間が，異なったキーに割り当てられたときの反応時間に比べて，速くなった場合には自動的にステレオタイプが活性化していると判断できる．この課題の特徴はステレオタイプ対象として対立したカテゴリーがあり，かつ，ステレオタイプ特徴に対立したカテゴリーがあることが前提となっているようなステレオタイプのみ扱うことができる点にある．

GNAT IAT に似た手法であるが，刺激が呈示され 2 つのカテゴリー（1 つのステレオタイプ対象と 1 つのステレオタイプ特徴）に刺激が含まれる場合にはキーを押し，それ以外の刺激が呈示されたときにはキーを押さないようにさせ，正解不正解かと反応時間を測定する課題である(Nosek & Banaji, 2001)．信号検出理論がデータに適用され，2 つのカテゴリーがステレオタイプに一致しているときの感受性 d' が高くなった場合には自動的にステレオタイプが活性化していると判断できる．この課題の特徴は，IAT とは異なり，対立するステレオタイプ対象やステレオタイプ特徴を必要としない点にある．

誤武器知覚課題 誤武器知覚課題は 2 つの写真を合成した写真（ステレオタイプ対象(黒人 vs. それ以外）＋ステレオタイプ的もの(武器 vs. それ以外)）を見せ，ステレオタイプ的なものが出た場合には反応させ，反応の正誤を測定する課題である(Payne, 2001; Payne, Jacoby, & Lambert, 2005)．ステレオタイプ対象とステレオタイプ的でないものを組み合わせたときの誤反応数が主な従属変数となるが，全ての反応を過程分離パラダイムを用いて分析をすることも可能である．この課題の特徴は反応時間ではなく誤反応を用いる点と，

過程分離パラダイムを用いて分析した場合には自動的過程と統制過程のそれぞれの貢献率を明確にできる点にある．この課題は黒人と武器の連合を測定する道具として開発されたものであるが，黒人以外のステレオタイプ対象にも適用できる可能性を秘めていると考えられる．

語彙判断課題 特定のステレオタイプ対象のステレオタイプ特徴に関連する単語とステレオタイプ特徴に無関連な単語と無意味語を呈示し，有意味語の場合にキーを押させる課題である（e.g., Marcae, Bodenhausen, Milne & Jetten, 1994）．無関連語に比べ関連語に対する反応が速くなった場合にはステレオタイプが活性化していると判断できる．

語彙完成課題 単語を一部のみを呈示して（e.g., こう＿き），単語を完成させる課題である（e.g., Gilbert & Hixon, 1991; Spencer, Fein, Wolfe, Fong, & Dunn, 1998）．特定のステレオタイプ対象のステレオタイプ特徴に関する単語（e.g., こうげき vs. こうしき）を作成した数が多いほど自動的活性化が生じていたと判断できる．

語彙判断課題や語彙完成課題といったステレオタイプ的特徴の活性化を測定する手法の特徴は，問題とするステレオタイプ対象が一つに限られているときにのみ扱うことができる点にある．

ここでは自動的活性化の測定のための手法を簡単に紹介したが，次に，最近の研究から見いだされたジェンダーステレオタイプの特徴をレビューし，その上で，日本においてジェンダー・ステレオタイプの自動的活性化を測定するのに適切な指標を考えていきたい．

ジェンダー・ステレオタイプの特徴

1990 年代以降の社会的認知研究でのステレオタイプに関する研究は，構造や過程を究明することに焦点が当てられていた．しかし，最近，古典的な問題であるステレオタイプや偏見の内容や機能が再度注目されるようになってきている（e.g., Alexander, Brewer, & Herrmann, 1999; Fiske, 1998; Jost & Banaji, 1994）．Bakan（1966）は基本的な生命のあり方として「作動性（agency）」と「共同性（communal）」を指摘し，これが男性的特性と女性的特性と対応しているとした．作動性とは一人の人間として個人の目指すべき特性をあらわしたもので，自己擁護・自己主張・自己拡張・積極性・攻撃性といった性質を意味する．それに対して，共同性とは他者との相互依存関係にある人間として目指すべき特性をあらわしたもので，他者と一緒にいる感覚・接触・統合・見返りのない協力・思いやり・温かさといった性質を意味する．

ジェンダー・ステレオタイプが他のステレオタイプと異なる特徴として，規範的な側面がより強いことが指摘されている．社会的認知研究で注目されていた「○○はこうである」という記述的ステレオタイプばかりでなく，「○○はこうあるべきだ」という規範的ステレオタイプがジェンダー・ステレオタイプにおいては重要であるという指摘である（e.g., Burgess & Borgida, 1999; Glick & Fiske, 2001; Rudman & Glick, 1999; Rudman & Goodwin, 2004）．記述的ステレオタイプが男性や女性を特徴づける属性や役割や行動に関する信念

であるのに対して，規範的ステレオタイプは男性や女性が従うように期待される属性や役割や行動に関する信念である．そして，記述的ステレオタイプの機能が日常生活における情報の構造化であるのに対して，規範的ステレオタイプの機能は社会における勢力の不平等の正当化にあることが指摘されている(Burgess & Borgida, 1999). このような集団間の機能の観点から多くのステレオタイプの内容を分析すると，ジェンダー・ステレオタイプを含む多くのステレオタイプが，先ほど指摘した「温かさ（共同性の高さ)」と「有能さ（作動性の高さ)」の次元で相関が負になることが主張され，実証的にも示されている(e.g., Fiske, Cuddy, Glick, & Xu, 2002; Glick & Fiske, 2001)．そのため，多くのステレオタイプが，「温かさ（共同性の高さ)」と「有能さ（作動性の高さ)」の次元で，一方がポジティブであれば，他方がネガティブなアンビバレントなものになる．例えば，黒人ステレオタイプは「温かいが無能である」というクラスターに，ユダヤ人ステレオタイプは「有能であるが冷たい」というたクラスターにはいる．ジェンダー・ステレオタイプでいえば，女性ステレオタイプは「温かいが無能である」というクラスターに，男性ステレオタイプは「有能であるが冷たい」というクラスターに入りやすい（ただし，上位集団でかつ内集団が持つステレオタイプの場合，例えば男性が男性に対して持つステレオタイプの場合には，両方の次元で高い「有能であり温かい」というステレオタイプにもなりうる)．

一般的な女性や男性は上記のようなステレオタイプ内容を持つと考えられているが，ジェンダー・ステレオタイプが他のステレオタイプと異なるもう一つの大きな特徴として，サブグループの存在があり，特に女性においてその傾向が顕著であることが指摘されている(e.g., Deau, Winton, Crowley & Lewis, 1985; Six & Eckes, 1991)．女性のサブグループとしては，伝統的な女性役割人物（e.g., 主婦，母親)，性の対象としての役割人物(e.g., 娼婦)，非伝統的な性役割人物(e.g., キャリアウーマン，フェミニスト)の 3 つが主に見いだされている．そして，これらサブグループは異なった内容のステレオタイプが持たれていることが指摘されている(Glick & Fiske, 2001)．先に指摘した「作動性」と「共同性」の次元で考えると，主婦といった伝統的性役割人物には「共同性は高い（温かい）が，作動性は低い（無能である)」といったステレオタイプが，キャリアウーマンといった非伝統的性役割人物は「作動性は高い（有能である）が，共同性は低い（冷たい)」という内容になる(Fiske, et al., 2002)．このようなサブカテゴリー・ステレオタイプが日本においても存在することが示されている(Takabayashi, Numazaki, Ono, & Ishii, 2006)．また，偏見の研究ではあるが，この 2 つのサブグループへの好意が，状況により異なった方向へ変化することが示されている（e..g., 沼崎・工藤, 1995, 2003; Rudman & Goodwin, 2004)．

ジェンダー・ステレオタイプの自動的活性化の測定

前節のような指摘がなされているジェンダー・ステレオタイプであるが，本節ではジェンダー・ステレオタイプの自動的活性化がどのように測定されているかについてレビューし，問題点を指摘したい．

SPT を用いた研究としては以下のような研究が代表的なものである．Blair and Banaji (1996)は，プライム刺激として予備実験で集めたジェンダー性（男性的 vs. 女性的 vs. ニュートラル）×感情価（ポジティブ vs. ネガティブ）×特性であるか否か(特性 vs. 非特性)の 12 タイプの語を呈示して，ターゲット刺激には名前（男性名 vs.女性名）を呈示し，性別を判断させている．結果として，プライムとターゲットがジェンダーに関して一致しているときは一致していないときに比べ反応が速くなっており，非特性語においてその効果が顕著であった．Karylowski, Motes, Wallace, Harckom, Hewlett, Maclean, Parretta, and Vaswani(2001)では，ターゲット刺激に無意味語を入れ，名前か否かを判断させても同様の結果を得ている．Banaji and Hardin(1996)はターゲット刺激を名前の代わりに代名詞(男性代名詞 vs. 女性代名詞)に変えて同様の結果を得ている．Macrae, Bodenhausen, Milne, Thorn, and Catelli(1997)ではプライム刺激に写真（女性の顔 vs. もの）を呈示し，ターゲット刺激にジェンダー関連語（ステレオタイプ的 vs. 反ステレオタイプ的 vs.非単語）を呈示して語彙判断をおこなわせている．結果として，プライムを意味処理した場合には女性写真をプライムされたときにステレオタイプ的語に対する反応が高くなっていた．Macrae, Hood, Milne, Rowe, and Manson(2002)では，プライムとして男性と女性の写真を呈示しターゲットにジェンダー関連語（ステレオタイプ的 vs. 反ステレオタイプ的 vs.非単語）を呈示して語彙判断課題をおこなわせている．結果として，写真の視線が正面を向いているときのみ，ステレオタイプが自動的に活性化していることが示された．日本においては，野寺・唐沢(2004)は，プライム刺激に男女の顔写真を用い，ターゲット刺激にジェンダー性（男性的 vs. 女性的）×感情価（ポジティブ vs. ネガティブ）の 4 タイプと無意味語を呈示して語彙判断課題をおこなわせている．結果として，男性写真がプライムされると男性ネガティブ語が，女性写真がプライムされると女性ネガティブ語の反応が促進していた．また，野寺・唐沢(2005)では，プライム刺激に「男性」「女性」「国民」を呈示し，ターゲット刺激に女性的ポジティブ語/女性的ネガティブ語/無関連語と無意味語を呈示して語彙判断課題をおこなわせている．結果として，通常では女性プライム時に女性的ネガティブ語の反応が促進したのに対して，女性と女性的ネガティブ語の関連に罰を与えた群では女性プライム時に女性的ポジティブ語の反応が促進するようになった．

IAT を用いた研究としては以下のような研究が代表的なものである．Blair, Ma and Lenton(2001)は，＜男性名 vs. 女性名＞と＜強さ関連語 vs.弱さ関連語＞の組み合わせを変えて IAT をおこなわせた．一致試行（男性-強さ＆女性-弱さ）は不一致試行（男性-弱さ＆女性-強さ）に比べ反応が速くなっていた．さらに，ステレオタイプに不一致な人物をイメージ化をさせると自動的活性化が抑制され，一致した人物をイメージ化させると促進されることが示された．Rudman, Greenwald, and McGhee(2001)は，＜男性名 vs.女性名＞と＜強さを示す特性語 vs. 弱さを示す特性語＞の組み合わせを変えた IAT と＜男性名 vs. 女性名＞と＜温かさを示す特性語 vs. 冷たさを示す特性語＞の組み合わせを変えた

IAT をおこなわせた．前者の IAT では男性参加者において一致試行（男性-強さ＆女性-弱さ）は不一致試行（男性-弱さ＆女性-強さ）に比べ反応が速くなっていたのに対して，後者の IAT では女性参加者において一致試行（女性-温かさ＆男性-冷たさ）は不一致試行（女性-冷たさ＆男性-温かさ）に比べ反応が速くなっていた．これは評価が関わるためであると考察し，実験 2 では，＜男性名 vs. 女性名＞と特性語の感情価をそろえた＜ potency high vs. potency low ＞の組み合わせを変えた IAT をおこなわせた．結果として，女性の劣位性を意味しないときには女性においてもステレオタイプの自動的活性化が生じることが示された．Dasgupta and Asgari（2004）は，＜男性名 vs. 女性名＞と＜指導関連語 vs. 支援関連語＞の組み合わせを変えた IAT をおこなわせた．結果として，統制群では一致試行（男性-指導&女性-支援）は不一致試行（男性-支援&女性-指導）に比べ反応が速くなったが，反ステレオタイプ的な女性リーダーを複数評定した後ではこの傾向は逆になっていた．日本においては，野寺・唐沢・沼崎・高林（2005）は，＜男性を示す語（彼氏・紳士）vs.女性を示す語（彼女・婦人）＞と＜家庭を示す語 vs. 仕事を示す語＞の組み合わせを変えた IAT をおこなわせた．結果として，一致試行（女性-家庭＆男性-仕事）は不一致試行（女性-仕事＆男性-家庭）に比べ反応が速くなっていた．さらに，死すべき運命の顕現化をおこなった群ではおこなわなかった群に比べその傾向が強まっていた．

GNAT を用いた研究では以下のような研究が代表的なものである．Blair et al.（2001）の実験 4 では，＜男性名 vs. 女性名＞と＜強さ関連語 vs.弱さ関連語＞の組み合わせを変えて GNAT をおこなわせた．結果として，不一致試行は一致試行に比べ d'が大きくなっていたが，反ステレオタイプ的な強い女性をメンタルイメージをさせるとその傾向が弱くなっていた．Mitchell, Nosek, and Banaji（2003）は，＜男性名 vs. 女性名＞と＜ポジティブ語 vs. ネガティブ語＞の組み合わせを変えて白人女性に GNAT をおこなわせた．結果として，＜女性&ポジティブ語＞に反応するときと＜男性&ネガティブ語＞に反応するときに成績が良く，＜女性&ネガティブ語＞に反応するときと＜男性&ポジティブ語＞に反応するときに成績が悪かった．この研究では，これに加え，ジェンダーと人種を組み合わせたステレオタイプを検討している．黒人女性と＜ポジティブ語 vs.ネガティブ語＞に反応させるときに，反応しない刺激として白人男性と白人女性を呈示すると，＜黒人女性&ネガティブ語＞に反応する方が＜黒人女性&ポジティブ語＞に反応するよりも成績が良かった．しかし，反応しない刺激として白人男性と黒人男性を呈示すると，＜黒人女性&ポジティブ語＞に反応する方が＜黒人女性&ネガティブ語＞に反応するよりも成績が良かった．この結果は，黒人女性が黒人としてカテゴリー化されるか，女性としてカテゴリー化されるかによって自動的ステレオタイプの活性化が異なってくることを示す結果である．日本においては GNAT を用いてジェンダー・ステレオタイプを検討した研究は見いだすことができなかった．

ジェンダー・ステレオタイプの自動的活性化に関する研究を紹介してきたが，ジェンダ

ー・ステレオタイプの特徴として指摘されているいくつかの点が検討されていないように思われる．

まず第 1 にステレオタイプの対象としてサブグループが考慮されていない点があげられる．ジェンダー・ステレオタイプでは，特に女性においては，サブグループが複数存在し，その内容についてもすでに意識的な判断においては検討されているが（e.g., Deau, et al., 1985; Six & Eckes, 1991; Takabayashi, et al., 2006），自動的活性化では検討されていない．状況によりサブグループが異なった方向に評価が変化されることが実証的に示されており（e.g., 沼崎, 2003; Rudman & Goodwin, 2004），それらがステレオタイプの自動的活性化に影響を受けているかを検討するためにもサブグループについての自動的活性化を検討しておく必要があろう．

第 2 にステレオタイプの特徴として，作動性と共同性といった次元が十分には考慮されていない点が上げられる．多くの研究では，＜女性関連語 vs. 男性関連語＞か＜ポジティブ語 vs. ネガティブ語＞の 2 タイプの特徴を取り上げ検討しているか，＜女性関連語 vs. 男性関連語＞×＜ポジティブ vs. ネガティブ＞の 4 タイプの特徴を取り上げ検討している．作動性と共同性を取り上げる場合でも，＜作動性高（強さ）vs.作動性低（弱さ）＞や＜共同性高（温かさ）vs. 共同性低（冷たさ）＞をそれぞれ別々に検討しているのみである（Rudman et al., 2001）．Rudman et al.（2001）が指摘しているように，作動性が高い場合でも「有能な」「自信のある」といったポジティブな意味を持つ語もあれば，「傲慢な」「支配的」といったネガティブな意味を持つ語もある．また，共同性が高い場合でも同様に，「温かい」「親切な」といったポジティブな意味を持つ語もあれば，「おせっかい」「おしゃべり」といったネガティブな意味を持つ語もある．この指摘を考えると，ステレオタイプの特徴として，次元と次元の高低と感情価を考慮する必要があろう．つまり，＜作動性 vs. 共同性＞×＜高 vs. 低＞×＜ポジティブ vs.ネガティブ＞の 8 タイプの特徴を考慮する必要があろう．

上記問題点を踏まえて，本研究では，ステレオタイプ対象として，＜男性 vs. 女性＞×＜家庭的 vs. 職業的＞の 4 タイプのステレオタイプについて検討した．そして，これら人物のステレオタイプ特徴として，＜作動性 vs. 共同性＞×＜高 vs. 低＞×＜ポジティブ vs. ネガティブ＞の 8 タイプの性格特性について検討をおこなった．

本研究の目的と手法

本研究では，ジェンダー・ステレオタイプのサブグループを含めたステレオタイプを検討しようと試みるものである．そのためには，自動的活性化の指標のうちどの手法が適切であろうか．複数の（3 つ以上の）対象のステレオタイプと複数のステレオタイプ特徴を検討するためには，SPT か GNAT が有効であろう．しかし，今回取り上げる 4 タイプの対象と 8 タイプの特徴を GNAT で全てのパターンをするには 32 回の GNAT をおこなう必要があり，現実的ではないであろう．そこで SPT を用いることとした．プライム刺激

としてはステレオタイプ対象を呈示しターゲット刺激としてプライムタイプ特徴を呈示することとした．逆のパターンも可能であるが，ジェンダーを意識させないでターゲット刺激に対する判断をするよう設定することが困難であるため，このプライム刺激とターゲット刺激のパターンとした．プライム刺激としては，＜男性 vs. 女性＞×＜家庭的 vs. 職業的＞の 4 タイプ（家庭的女性/職業的女性/家庭的男性/職業的的男性）を区別するためには，言葉ではなく写真で操作をすることが容易であると考えられるため，写っている人物の性別と写っている人物の服装や行動により操作をした．ターゲット刺激としては，予備調査から＜作動性 vs. 共同性＞×＜高 vs. 低＞×＜ポジティブ vs.ネガティブ＞の 8 タイプの性格特性語を用意した．日本語の場合は，漢字仮名交じり，仮名，カタカナのいずれかの表記が考えられるが，本研究では漢字の感情価の影響が入るの避けるため，また，見慣れているかどうかを統制するため，カタカナ表記で刺激を呈示した（Appendix 1 参照）．ターゲットの判断としては，研究 1 ではステレオタイプ的知識の自動的活性化を測定していると考えられる語彙判断課題を，研究 2 ではステレオタイプ的評価の自動的活性化を測定していると考えられる感情価判断課題を用いた（Winttenbrink, et al., 2001b）．

本研究では上記のような手法を用いることにより，以下の点の検討を目指した．第 1 にサブカテゴリーを含むジェンダー・ステレオタイプでは，ジェンダーの方がステレオタイプをより強く規定するのか，役割の方がステレオタイプをより強く規定するのか，また，ジェンダーと役割に交互作用効果があるか，を検討した．第 2 に，ステレオタイプの特徴として，どのような次元が使われやすかを検討した．第 3 に，ステレオタイプ的知識の活性化とステレオタイプ的評価の活性化ではパターンに違いが見られるか，また，評価では参加者の性差が見られやすいことが指摘されており（Rudman et al., 2001），この点もあわせて検討を試みた．

研　究　1

研究 1 では，プライム刺激として＜男性 vs. 女性＞×＜家庭的 vs. 職業的＞の 4 タイプを呈示し，ターゲット刺激として＜作動性 vs. 共同性＞×＜高 vs. 低＞×＜ポジティブ vs. ネガティブ＞の 8 タイプの性格特性語の語彙判断課題をおこなわせることにより，ジェンダー・ステレオタイプ知識の自動的活性化を検討した．

方　法

実験参加者

東京都立大学大学生男女 74 名（男 52 名，女 22 名）．分析対象者は男性 36 名，女性 22 名．

実験計画

実験参加者性(男 vs. 女)×プライム性(男 vs. 女)×プライムタイプ(家庭的 vs. 職業的)×ターゲット属性(作動性 vs. 共同性)×ターゲット属性高低(高 vs.低)×ターゲット感情価(ポジティブ vs. ネガティブ)の混合要因計画.

実験材料

プライム実験項目刺激として，家庭的男性・家庭的女性・職業的男性・職業的女性の 4 条件に各 8 枚，計 32 枚の写真を用意した．家庭的か職業的かは写真人物の服装と行動(e.g., エプロンを着て料理 vs. スーツを着て PC 入力)を基準に選択した．さらに，プライム・フィラーとして，人物の写った写真を 64 枚用意した．

ターゲット実験刺激は仮名語または漢字仮名交じり語をカタカナで呈示した．分析の対象となるターゲット実験刺激語として，属性(作動性 vs.共同性)×属性高低(高 vs.低)×感情価(ポジティブ vs.ネガティブ)の 8 条件に各 8 語，計 64 語の特性語を予備調査から選択した(Appendix 1 参照)．ターゲット・フィラー項目として性格特性語のポジティブ語/ネガティブ語各 8 語，計 16 語を，性格特性語ではない形容詞/形容動詞を 80 語用意した．

装置

実験課題は富士通製 FMV-BIBLO NE/36E マイクロコンピュータを用い，刺激呈示には Super Lab を使用した．文字刺激は画面の中央に黒い背景に白字で呈示するようにした．回答にキーボード上の[F]と[J]のキーを用いたが，そこには予めシールを貼っておき，キーの位置がわかるようにしてあった．

手続き[*1]

実験は 1 名から 5 名の集団でおこなった．実験者は実験室に来た実験参加者を衝立で仕切られたブースに案内した．実験者は実験参加者に右利きか左利きかを尋ね，予め定められた利き腕用のプログラムを準備した．実験参加者にはカバー・ストリートして 2 つの課題をおこなった場合の情報処理のプロセスを明らかにする研究であると告げ，PC 上で出された刺激に対して，できるだけ速く正確に yes / no の判断をする課題をおこなうことを告げて同意書を取得した．

写真記銘セッション まず最初の課題として，写真記銘課題をおこなうと告げた．後ほど，写真がこのセッションで呈示されたかどうかを聞くので記憶するように画面と口頭で教示した上で．プライム実験刺激 32 枚とプライム・フィラー刺激の半分の 32 枚をランダムに 3 秒ずつ提示した．

ベース練習セッション 次の課題として地名判断課題をおこなった．これは，カタカナ表記とキー押しに慣らすためにおこなった．できるだけ速く正確に地名ならば[J]，地名でなければ[F]を押す（左利きの場合はキーを入れ替えた：以下同様）ことを画面と口頭

*1 実験プログラムの仕様に関しては Appendix 2 の実験 A を参照．

で教示した上で，地名 32 語と日常語 32 語をカタカナで提示し，地名か否かを判断させた．このセッションでは正解か不正解かのフィードバックを与えた．

ベースセッション　次の課題として性格特性語判断をおこなわせた．これはターゲット刺激のベースの反応時間を測定するためにおこなった．ターゲット実験刺激 64 語とターゲット・フィラー項目 96 語をカタカナで提示し，できるだけ速く正確に性格特性語ならば[J]，性格特性語でなければ[F]を押すように画面と口頭で教示した上で，性格特性語かどうかをを判断させた．このセッションからは正解か不正解かのフィードバックは与えなかった．反応時間を測定し各ターゲット語のベースレイトとした．

本セッション　2 つの課題をおこなわせた．人物写真(プライム)・単語(ターゲット)が順に提示され，できるだけ速く正確に最初に単語が性格特性語か否かを，性格特性語ならば[J]，なければ[F]を押すことにより判断させた．ターゲット提示から判断までの時間を測定した．次に，人物写真が写真記銘セッションにあった写真かどうかを，あった場合には[J]，なかった場合には[F]を押すことによって判断させた．提示刺激および提示時間は以下の通りであった．注視点として「＋」を画面の中央に 1000ms 呈示した．その後，プライム刺激を 300ms 呈示し，ブランク 50ms の後，ターゲット刺激を呈示した．そのため，SOA は 350ms であった．この SOA では統制された処理が困難であることが示されている(Blair & Banaji, 1996; Neely, 1977)．ターゲット刺激は実験参加者がキー入力とともに消失し，その後，画面に提示された写真が第 1 セッションで見た写真か，見ていない写真かを判断するよう画面に呈示した．この画面は参加者がキー入力とともに消失した．試行間は 1000ms であり，その間はブランクが呈示された．

本セッションの前に本セッションで用いないプライム写真/ターゲット語を用い 8 練習試行をおこなわせた．本セッションでは，練習試行と同じ 8 試行をおこなわせた後，320 試行おこなわせた．320 試行のうち，実験刺激試行は 128 試行であり，プライム刺激の家庭的男性・家庭的女性・職業的男性・職業的女性の 4 条件に対して，ターゲット語の属性(作動性 vs.共同性)×属性高低(高 vs.低)×感情価(ポジティブ vs.ネガティブ)の 8 種類の語を各 4 語ずつ呈示した．プライムとターゲットの組み合わせは右利き用左利き用各 8 方式をラテン方格によって作成し，方式間の数に偏りがないようにした以外はランダムに参加者に割り当てた．フィラー試行 192 試行あり，〈非性格特性語ターゲット／旧プライム〉が 128 試行，〈非性格特性語ターゲット／新プライム〉が 32 試行，〈性格特性語ターゲット／新プライム〉が 32 試行であった．本セッションの途中には 3 回の休憩を入れた．休憩時間は参加者が自由に設定できた．

全ての実験参加者が課題を終了した後，ディブリーフィングをおこない，参加者の質問に答えたあと，実験を終了した．

結　果

分析方法

ベースセッションと本セッションの実験刺激試行の反応時間を分析に用いた．500ms 以下と 3000ms 以上の反応時間を示した場合，および誤反応の場合には分析から除外した．反応時間を対数変換した上で，特性語ごとに，ベースセッションの反応時間からの差を算出した．よって，値が高いほど反応が促進することを意味するように指標化した．その後，参加者ごとに 4 プライム条件× 8 ターゲット条件の 32 条件ごとに上記算出した差の中央値（4 語）を求めた．この際に，1 つの条件でも欠損値がある参加者は分析から除外した．分析対象者における本実験刺激試行での誤答率は 13.2%，ハズレ値率は 2.0%であり，有効反応率は 85.1%であった．

全体の分析

上記中央値に対して全ての要因を含んだ分散分析をおこなった．プライムタイプの主効果（$F(1, 56)=6.13$, $p<.02$），ターゲット感情価の主効果（$F(1, 56)=20.50$, $p<.01$），ターゲット属性×ターゲット属性高低の交互作用効果（$F(1, 56)=6.09$, $p<.02$），ターゲットの属性高低×ターゲット感情価の交互作用効果（$F(1, 56)=9.59$, $p<.01$），ターゲット属性×ターゲット属性高低×ターゲット感情価（$F(1, 56)=26.58$, $p<.01$），参加者性×ターゲット感情価（$F(1, 56)=5.69$, $p<.02$）が有意であった．

それに加え，本研究にとり重要であるターゲットとプライムの双方の要因を含む効果として，プライムタイプ×プライム性×ターゲット属性（$F(1, 56)=5.37$, $p<.05$），プライムタイプ×ターゲット属性×ターゲット属性高低×ターゲット感情価（$F(1, 56)=5.89$, $p<.02$），プライム性×ターゲット属性×ターゲット属性高低×ターゲット感情価（$F(1, 56)=7.64$, $p<.01$）が有意であった．これらの効果を詳しく見るため，ターゲット条件ごとに参加者性×プライム性×プライムタイプの分散分析をおこなった．整理のため，先行研究で指摘されている，伝統的男性特性語（ポジティブ語&ネガティブ語）と伝統的女性特性語（ポジティブ語&ネガティブ語）にわけて結果を呈示した．

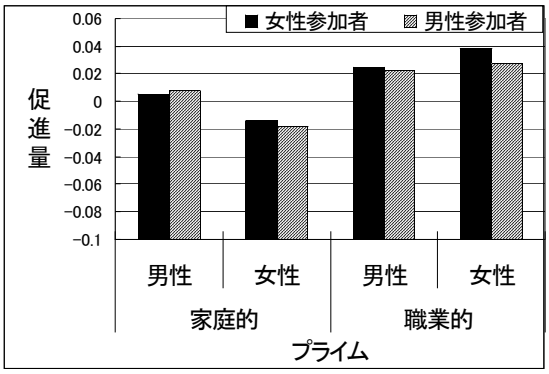

Figure 1 作動性高ポジティブ項目

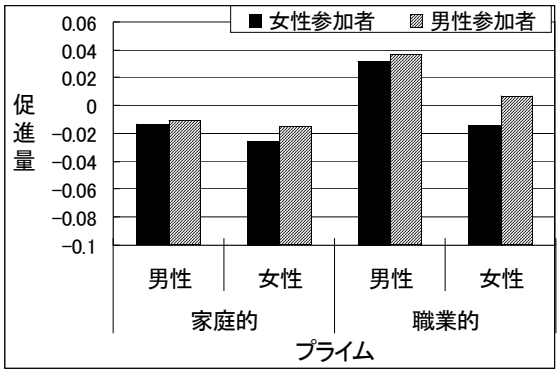

Figure 2 共同性低ポジティブ項目

伝統的男性ポジティブ特性語

作動性高ポジティブ項目（Figure 1） 参加者性×プライム性×プライムタイプの分散分析をおこなったところ，プライムタイプの主効果のみが有意であった（$F(1, 56)=7.73$, $p<.01$）．プライムが職業的なときに家庭的なときに比べ反応が速くなることによるものであった．

共同性低ポジティブ項目（Figure 2） 参加者性×プライム性×プライムタイプの分散分析をおこなったところ，プライムタイプの主効果が有意であった（$F(1, 56)=4.32$, $p<.05$）．プライムが職業的なときに家庭的なときに比べ反応が速くなることによるものであった．プライム性の主効果にも有意に近い効果が見られ（$F(1, 56)=2.92$, $p=.09$），プライムが男性のときに女性のときに比べ反応が速くなることによるものであった．

伝統的男性ネガティブ特性語

作動性高ネガティブ項目（Figure 3） 参加者性×プライム性×プライムタイプの分散分析をおこなったところ，3 要因の交互作用効果に有意に近い効果が見られた（$F(1, 56)=2.79$, $p=.10$）．女性参加者では，プライムが伝統的性役割人物（家庭的女性と職業的男性）のときに，非伝統的性役割人物（家庭的男性と職業的女性）のときに比べ速くなることによるる効果であった．男性参加者ではこのようなパターンは見られなかった．そして，男性参加者と女性参加者の違いが顕著なのは職業的女性に対する反応であり，参加者の性差が見られ（$F(1, 56)=4.71$, $p<.05$），男性参加者は女性参加者に比べ反応が速くなっていた．

共同性低ネガティブ項目（Figure 4） 参加者性×プライム性×プライムタイプの分散分析をおこなったところ，プライム性×プライムタイプの交互作用効果に有意に近い効果が見られた（$F(1, 56)=2.81$, $p=.09$）．プライムが伝統的性役割人物のときに非伝統的性役割人物のときに比べ速くなることによる効果であった．

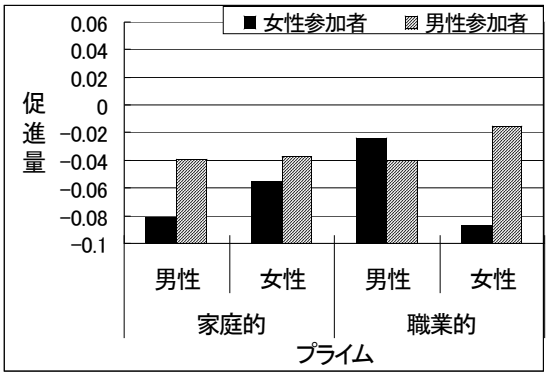

Figure 3 作動性高ネガティブ項目

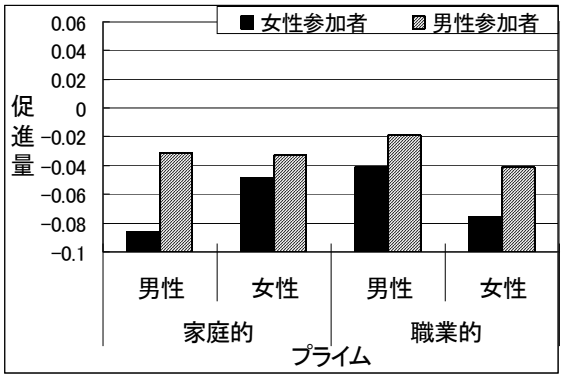

Figure 4 共同性低ネガティブ項目

伝統的女性ポジティブ特性語

共同性高ポジティブ項目（Figure 5） 参加者性×プライム性×プライムタイプの分散分析をおこなったところ，プライムタイプの主効果に有意に近い効果が見られた（$F(1, 56)=2.85$, $p=.09$）．プライムが家庭的なときに職業的なときに比べて速くなることによる効果であった．

作動性低ポジティブ項目(Figure　6)　参加者性×プライム性×プライムタイプの分散分析をおこなったところ，プライム性×プライムタイプの交互作用効果が有意であった($F(1, 56)=5.23$, $p<.05$)．プライムが非伝統的性役割人物（家庭的男性と職業的女性）のときに伝統的性役割人物(家庭的女性職業的男性)のときに比べ速くなることによる効果であった．

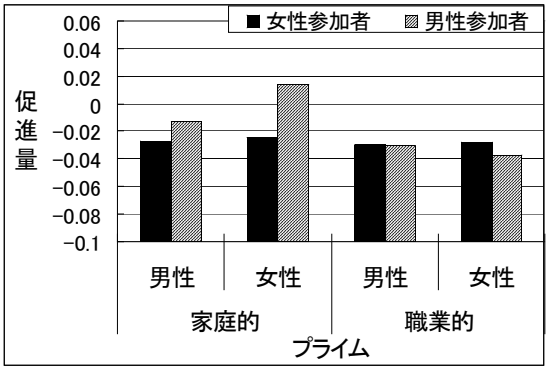

Figure 5 共同性高ポジティブ項目

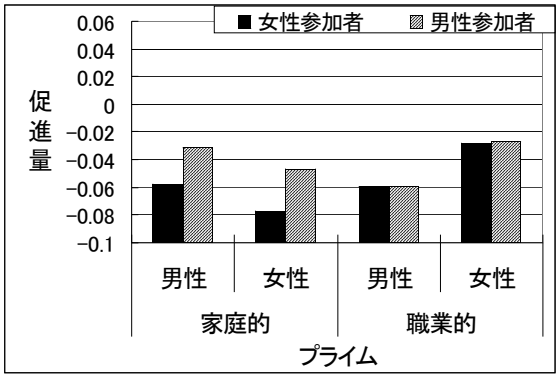

Figure 6 作動性低ポジティブ項目

伝統的女性ネガティブ特性語

共同性高ネガティブ項目(Figure　7)　参加者性×プライム性×プライムタイプの分散分析をおこなったところ，有意になった効果はなかった．

作動性低ネガティブ項目(Figure　8)　参加者性×プライム性×プライムタイプの分散分析をおこなったところ，参加者性の主効果が有意であった($F(1, 56)=5.05$, $p<.05$)．男性参加者は女性参加者に比べ反応が速くなることによる効果であった．また，プライム性の主効果に有意に近い効果が見られた($F(1, 56)=3.49$, $p=.07$)．この効果は，プライムが男性のときに女性のときに比べて速くなることによる効果であった．この効果は従来のジェンダーステレオタイプから想定される効果とは逆の方向であった．

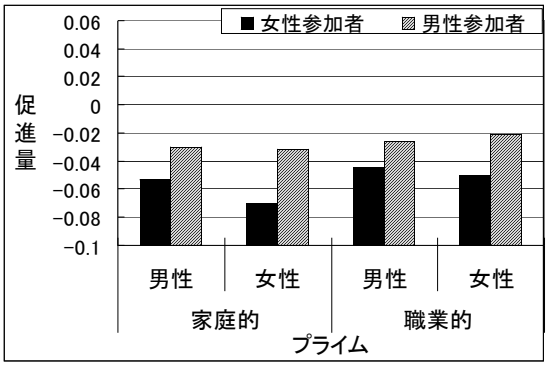

Figure 7 共同性高ネガティブ項目

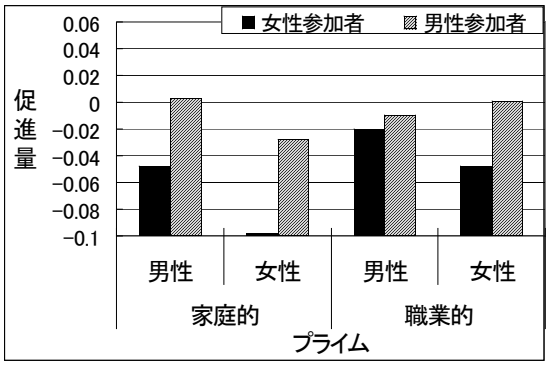

Figure 8 作動性低ネガティブ項目

考　察

伝統的な意味での男性ポジティブ特性語では，作動性高ポジティブ項目と共同性低ポジティブ項目双方でプライムが職業的なときに活性化していた．また，共同性低ポジティブ項目ではプライムが男性のときに活性化する傾向が見られた．また，伝統的な意味での女

性ポジティブ特性語である共同性高ポジティブ項目ではプライムが家庭的なときに活性化する傾向が見られた．これらの結果は従来の理論から予測できるものであるが，ジェンダーよりも役割の方が影響が大きいようである．

興味深い結果として，プライムのジェンダーと役割（タイプ）の交互作用効果が見られた項目がいくつか見られた．伝統的な意味での男性ネガティブ特性語である，作動性高ネガティブ項目では，女性参加者では職業的男性や家庭的女性といった伝統的性役割人物のときに活性化するのに対して，男性参加者ではあまり差が見られず，女性参加者では活性化が弱かった職業的女性において活性化が強かった．また，このような効果は共同性低ネガティブ項目でも見られ，職業的男性や家庭的女性といった伝統的性役割人物のときに活性化し，有意ではないものの女性参加者において強い傾向が見られた．類似した効果は，伝統的な意味での女性ポジティブ項目である作動性低ポジティブ項目でも見られ，非伝統的性役割人物は伝統的性役割人物に比べ活性化が生じていた．これらの結果は職業的男性や家庭的女性といった伝統的性役割人物は，特に女性参加者では，相対的にネガティブな特性と連合していることを示唆している．

伝統的な意味での女性ネガティブ特性語である作動性低ネガティブ項目ではプライムが男性のときに女性のときに比べ速くなるという従来の理論とは逆の結果が得られた．この結果を含めて，本研究全体に関わる考察は研究 2 の結果を踏まえて全体考察でおこなう．

研　究　2

研究 2 では，プライム刺激として＜男性 vs. 女性＞×＜家庭的 vs. 職業的＞の 4 タイプを呈示し，ターゲット刺激として＜作動性 vs. 共同性＞×＜高 vs. 低＞×＜ポジティブ vs. ネガティブ＞の 8 タイプの性格特性語の感情価判断をおこなわせることにより，ジェンダー・ステレオタイプ評価の自動的活性化を検討した．

方　法

実験参加者

東京都立大学大学生男女 87 名（男 35 名，女 52 名）．分析対象者は男性 29 名，女性 49 名．

実験計画

参加者性（男 vs. 女）×プライム性（男 vs. 女）×プライムタイプ（家庭 vs. 職業）×ターゲット属性（作動性 vs. 共同性）×ターゲット属性高低（高 vs.低）×ターゲット感情価（ポジティブ vs. ネガティブ）の混合要因計画．

実験材料

プライム刺激とターゲット刺激は研究 1 と同じものを用いた．ただし，性格特性語ではない 80 語は用いなかった．

装置

研究 1 と同じ装置を用いた．

手続き[*2]

実験は 1 名から 5 名の集団でおこなった．実験者は実験室に来た実験参加者を衝立で仕切られたブースに案内した．実験者は実験参加者に右利きか左利きかを尋ね，予め定められた利き腕用のプログラムを準備した．実験参加者にはカバー・ストリートして 2 つの課題をおこなった場合の情報処理のプロセスを明らかにする研究であると告げ，PC 上で出された刺激に対して，できるだけ速く正確に yes / no の判断をする課題をおこなうことを告げて同意書を取得した．

写真記銘セッション　まず最初の課題として，写真記銘課題をおこなうと告げた．後ほど，写真がこのセッションで呈示されたかどうかを聞くので記憶するように画面と口頭で教示した上で．プライム実験刺激 32 枚とプライム・フィラー刺激の半分の 32 枚をランダムに 3 秒ずつ提示した．

ベース練習セッション　次の課題として地名判断課題をおこなった．これは，カタカナ表記に慣らすためにおこなった．できるだけ速く正確に地名ならば[J]，地名でなければ[F]を押す（左利きの場合はキーを入れ替えた：以下同様）ことを画面と口頭で教示した上で，地名 16 語と日常語 16 語をカタカナで提示し，地名か否かを判断させた．このセッションでは正解か不正解かのフィードバックを与えた．

ベースセッション　次の課題として性格特性語判断をおこなわせた．これはターゲット刺激のベースの反応時間を測定するためにおこなった．ターゲット実験刺激 64 語とターゲット・フィラー項目 16 語をカタカナで提示し，できるだけ速く正確に望ましい言葉ならば[J]，望ましくない言葉ならば[F]を押すことを画面と口頭で教示した上で判断させた．このセッションからは正解か不正解かのフィードバックは与えなかった．反応時間を測定し各ターゲット語のベースレイトとした．

本セッション　2 つの課題をおこなわせた．人物写真（プライム）・単語（ターゲット）が順に提示され，最初に，できるだけ速く正確に，単語が望ましい語か否かを，望ましい語ならば[J]，望ましくない語ならば[F]を押すことにより判断させた．ターゲット提示から判断までの時間を測定し，主要な従属変数とした．次に，人物写真が写真記銘セッションにあった写真かどうかを，あった場合には[J]，なかった場合には[F]を押すことによって判断させた．提示刺激および提示時間は，研究 1 と全く同じであった．

本セッションの前に本セッションで用いないプライム写真/ターゲット語を用い 8 練習

---

*2　実験プログラムの仕様に関しては Appendix 2 の実験 B を参照．

試行をおこなわせた．本セッションでは，練習試行と同じ 8 試行をおこなわせた後，320 試行おこなわせた．320 試行のうち，実験刺激試行は 256 試行であり，プライム刺激の家庭的男性・家庭的女性・職業的男性・職業的女性の 4 条件に対して，ターゲット語の属性（作動性 vs.共同性）×属性高低（高 vs.低）×感情価（ポジティブ vs.ネガティブ）の 8 種類の語を各 8 語ずつ呈示した．プライムとターゲットの組み合わせは右利き用左利き用各 8 方式をラテン方格によって作成し，方式間の数に偏りがないようにした以外はランダムに参加者に割り当てた．フィラー試行 64 試行あり，〈望ましい性格特性語ターゲット／新プライム〉が 32 試行，〈望ましくない性格特性語ターゲット／新プライム〉が 32 試行であった．本セッションの途中には 3 回の休憩を入れた．休憩時間は参加者が自由に設定できた．

全ての実験参加者が課題を終了した後，ディブリーフィングをおこない，参加者の質問に答えたあと，実験を終了した．

結　果

分析方法

ベースセッションと本セッションの実験刺激試行を分析に用いた．500ms 以下と 3000ms 以上の反応時間を示した場合，および誤反応の場合に分析から除外した．反応時間を対数変換した上で，特性語ごとに，ベースセッションの反応時間からの差を算出した．よって，値が高いほど反応が促進することを意味するように指標化した．その後，参加者ごとに各プライム-ターゲット条件（32 条件）の上記算出した差の中央値（8 語）を求めた．1 つの条件でも欠損値がある参加者は分析から除外した．分析対象者における本実験刺激試行での誤答率は 8.7%，ハズレ値率は 2.5%であり，有効反応率は 89.4%であった．

全体の分析

上記中央値に対して全ての要因を含んだ分散分析をおこなった．ターゲット感情価の主効果（$F(1, 76)=30.06$, $p<.01$），ターゲット属性×ターゲット感情価（$F(1, 76)=4.45$, $p<.05$），ターゲット属性×ターゲット属性高低（$F(1, 76)=32.91$, $p<.01$），ターゲット属性高低×ターゲット感情価（$F(1, 76)=9.57$, $p<.01$），ターゲット属性×ターゲット属性高低×ターゲット感情価（$F(1, 76)=124.31$, $p<.01$），参加者性×ターゲット属性×ターゲット属性高低×ターゲット感情価（$F(1, 76)=8.32$, $p<.01$）が有意であった．

これに加え，本研究にとって重要であるプライムとターゲットの要因を含む交互作用効果として，プライムタイプ×ターゲット感情価（$F(1, 76)=4.15$, $p<.05$），プライムタイプ×ターゲット属性×ターゲット属性高低（$F(1, 76)=5.99$, $p<.05$），参加者性×プライム性×ターゲット属性×ターゲット属性高低（$F(1, 76)=5.36$, $p<.05$），参加者性×プライム性×プライムタイプ×ターゲット感情価（$F(1, 76)=3.91$, $p=.05$），プライムタイプ×ターゲット属性高低×ターゲット感情価（$F(1, 76)=4.17$, $p<.05$），プライムタイプ×プライム性×ターゲット属性×ターゲット感情価（$F(1, 76)=11.83$, $p<.01$），プライムタイプ×ターゲット属性×タ

ーゲット属性高低×ターゲット感情価（$F(1, 76)=7.93$, $p<.01$），参加者性×プライム性×ターゲット属性×ターゲット属性高低×ターゲット感情価（$F(1, 76)=3.17$, $p=.08$）に，有意または有意に近い効果が見られた．ここからわかるように，プライムとターゲットの要因の交互作用効果において，研究 1 の知識の活性化では見られなかった参加者性を含む交互作用効果が評価の活性化では見られた．これらの効果を詳しく見るため，ターゲット条件ごとに参加者性×プライム性×プライムタイプの分散分析をおこなった．

伝統的男性ポジティブ特性語

作動性高ポジティブ項目（Figure 9） 参加者性×プライム性×プライムタイプの分散分析をおこなったところ，プライムタイプの主効果が有意であった（$F(1, 76)=7.73$, $p<.01$）．プライムが職業的なときに家庭的なときに比べて速くなることによる効果であった．この効果に加え，参加者性×プライム性×プライムタイプが有意であった（$F(1, 76)=4.00$, $p<.05$）．これは，女性参加者ではプライムの性にかかわらず職業的なときに家庭的なときに比べて速くなるのに対して，男性参加者では職業的な男性のときには速くなるものの，職業的な女性の場合には速くならないことによるものであった．

共同性低ポジティブ項目（Figure 10） 参加者性×プライム性×プライムタイプの分散分析をおこなったところ，プライムタイプの主効果に有意に近い効果が見られた（$F(1, 76)=3.24$, $p=.08$）．プライムが職業的なときは家庭的なときに比べて速くなることによるものであった．さらに，参加者性×プライム性が有意であった（$F(1, 76)=7.10$, $p<.01$）．男性参加者でのみプライムが男性のときに速くなることによるものによるものであった．

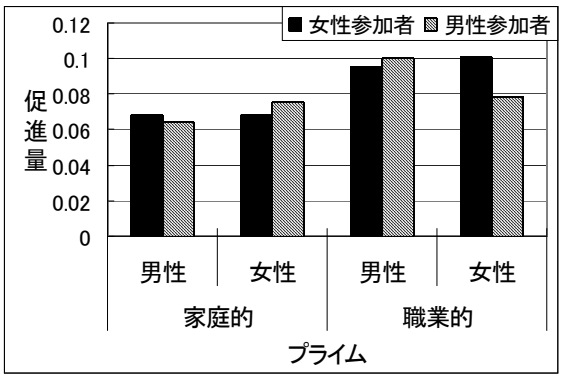

Figure 9 作動性高ポジティブ項目

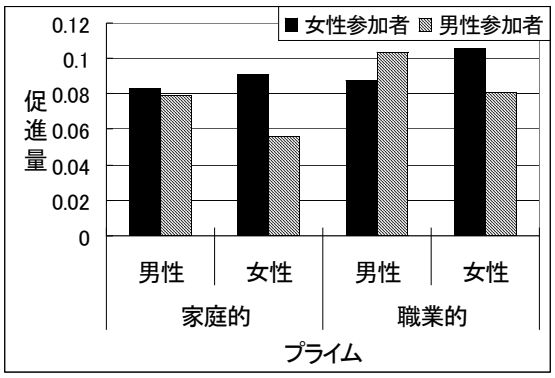

Figure 10 共同性低ポジティブ項目

伝統的男性ネガティブ特性語

作動性高ネガティブ項目（Figure 11） 参加者性×プライム性×プライムタイプの分散分析をおこなったが有意な効果は見られなかった．

共同性低ネガティブ項目（Figure 12） 参加者性×プライム性×プライムタイプの分散分析をおこなったところ，プライム性の主効果に有意に近い効果が見られたが（$F(1, 76)=2.90$, $p=.09$），参加者性×プライム性とプライム性×プライムタイプが有意であり制限を受ける（$F(1, 76)=4.61$, $p<.05$; $F(1, 76)=5.26$, $p<.05$）．前者の効果は，女性参加者ではプライムが女

性のときに速くなることによるものであった．後者の効果は，研究 1 でも見られた効果であり，プライムが伝統的性役割人物（家庭的女性と職業的男性）のときに，非伝統的性役割人物（家庭的男性と職業的女性）のときに比べ速くなることによるる効果であった．これら効果に加えて，参加者性×プライムタイプの交互作用効果にも有意に近い効果が見られた（$F(1, 76)=3.08$, $p=08$）．これは，男性参加者ではプライムが家庭的なときに速くなることによるものであった．

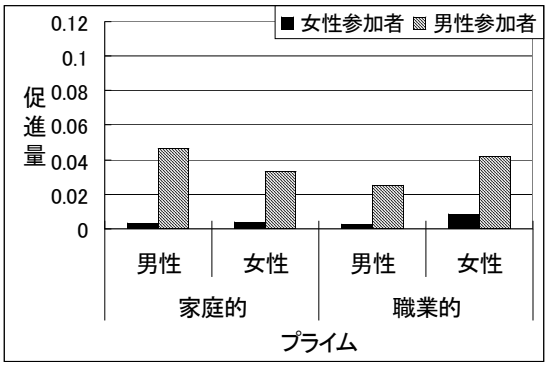

Figure 11 作動性高ネガティブ項目

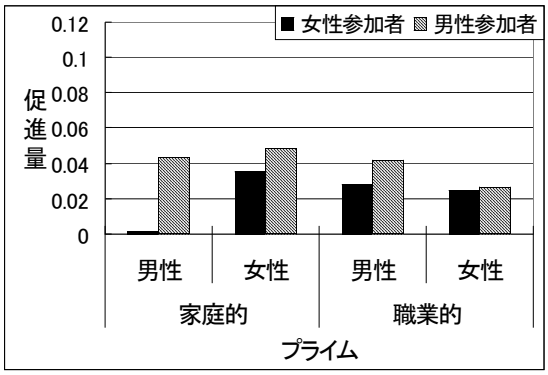

Figure 12 共同性低ネガティブ項目

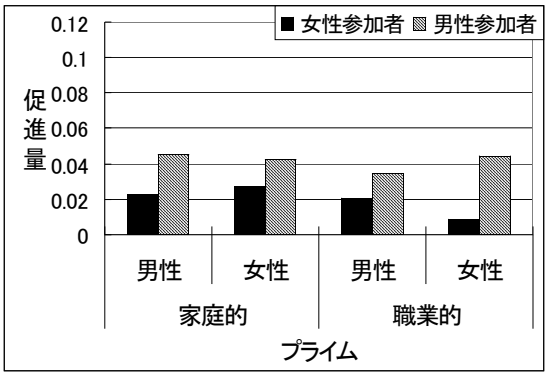

Figure 13 共同性高ネガティブ項目

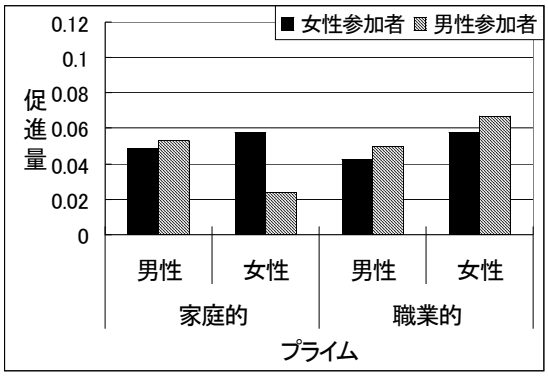

Figure 14 作動性低ネガティブ項目

伝統的女性ポジティブ特性語

共同性高ポジティブ項目でも作動性低ポジティブ項目でも有意になった効果はなかった．

伝統的女性ネガティブ特性語

共同性高ネガティブ項目（Figure 13）　参加者性×プライム性×プライムタイプの分散分析をおこなったところ，有意になった効果はなかった．

作動性低ネガティブ項目（Figure 14）　参加者性×プライム性×プライムタイプの分散分析をおこなったところ，参加者性×プライムタイプが有意であった（$F(1, 76)=4.05$, $p<.05$）．これは男性参加者ではプライムが職業的なときに家庭的なときに比べ速くなることによるものであった．これに加え，プライム性×プライムタイプに有意に近い効果が見られた（（$F(1, 76)=2.88$, $p=.09$）．この効果はプライムが家庭的なときには男性プライムの方が速くな

るのに対して，プライムが職業的なときには女性プライムの方が速くなることによるものであった．

考　察

伝統的な意味での男性ポジティブ特性語では，作動性高ポジティブ項目と共同性低ポジティブ項目双方でプライムが職業的なときに活性化していた．ただし，女性参加者では活性化が見られた職業的女性に対して，男性参加者では活性化が見られなかった．また，共同性低ポジティブ項目では，男性参加者でのみプライムが男性のときに活性化する傾向が見られていた．この結果は女性参加者では活性化が見られた職業的女性において，男性参加者では活性化が見られなかったことを意味する．これらの結果は，女性参加者では職業的であるとこれら概念が活性化するという意味で研究 1 と整合しながらも，男性参加者の場合には，男性参加者では職業的女性に対しては活性化せず，語彙判断課題では見られなかったジェンダーに基づく自動的偏見を示すことを示唆するものと考えられよう．これと対応する結果として，伝統的な意味での女性ネガティブ特性語である作動性低ネガティブ項目では，女性参加者では見られない，家庭的女性に比べ職業的女性に対して活性化するというパターンが男性参加者で見られた．これらの結果は従来のジェンダー理論から予測できるものであり，感情価判断では語彙判断課題よりも性差が見られやすいという指摘とも整合的なものであった．

伝統的な意味での男性ネガティブ特性語や伝統的女性ポジティブ特性語では活性化の違いが，または，一貫した活性化の効果は見られなかった．

総　合　考　察

本研究では，サブカテゴリーを含むジェンダー・ステレオタイプの活性化について，知識の活性化と評価の活性化の両方の観点から検討した．

知識の活性化においては，男性参加者でも女性参加者でも，職業的女性と職業的男性，および，家庭的男性と家庭的女性では活性化パターンが似ており，伝統的な意味での男性ポジティブ特性は職業的人物と連合し，伝統的な意味での女性ポジティブ特性は家庭的人物と連合していることを示唆する結果が得られた．女性参加者では，上記パターンに加え，ジェンダーと役割の交互作用の特異なパターンが見られた．伝統的性役割人物である職業的男性と家庭的女性は，非伝統的性役割人物である家庭的男性や職業的女性に比べ，伝統的な意味での男性ネガティブ特性と連合していることを示唆するものであった．

評価の活性化においては，参加者の性差が顕著に見られた，女性参加者では，知識の活性化と同様に，伝統的な意味での男性ポジティブ特性は職業人物と連合していることを示

唆する結果が得られた．しかし，男性参加者では，知識の活性化と異なり，伝統な意味での男性ポジティブ特性は職業的男性とは連合しているが，職業的女性とは連合しておらず，これら特性は女性が持っている場合には男性にはポジティブなものであるとは認識されていない可能性，つまり自動的偏見を示すことを示唆する結果が得られた．知識の活性化において女性参加者で見られた，伝統的役割人物と伝統的な意味での男性ネガティブ特性との連合は，評価の活性化では明確な形では再現されず，この部分に関してはさらなる検討が必要であろう．

上記の結果は，本研究で新たな視点として導入した，ステレオタイプ対象としてジェンダー・ステレオタイプのサブグループを考慮することの有効性を示唆するものである．職業的女性や家庭的男性といったサブグループは，従来のジェンダーステレオタイプの自動的活性化研究で扱われていた女性や男性といった単純なジェンダー・カテゴリーとは異なった活性化パターンを示し，異なった性格特性と連合していることを示唆している．今後のジェンダー・ステレオタイプの自動的活性化研究においては，ジェンダーに基づいた偏見や差別の近年の研究と同様に，サブグループも考慮に入れていく必要があろう．

本研究でもう一つ新たな視点として導入したのは，ステレオタイプの内容として，＜作動性 vs. 共同性＞×＜高 vs. 低＞×＜ポジティブ vs. ネガティブ＞の 8 タイプの特徴を設けた点にある．伝統的な意味での男性的特性と考えられる，作動性高特性や共同性低特性では相対的に一貫した結果が得られたが，伝統的な意味での女性的特性と考えられる，共同性高特性や作動性低特性では相対的に一貫した結果が得られなかった．この結果は，伝統的な意味での女性的特性が現代の日本人に持たれているジェンダー・ステレオタイプの内容を捉えられない可能性を示唆するとも考えられるが，特性語の選択に問題があった可能性もある．

上記した，特性語の選択の問題と関連するが，本研究の問題点として，実験参加者の誤反応が多いことがあげられる．本研究では漢字の感情価の影響が入らないように，また，見慣れているかどうかを統制するためにカタカナ表記にして特性刺激語を呈示したが，そのため，誤反応が増えてしまった可能性が高い．今後の研究では，通常の表記においても同様の結果が見られるか検討をする必要があろう．そのときには，どの程度，見慣れているかといった要因も統制する必要があろう．さらに．8 タイプの特性語を選択するために，各タイプに入る感情価も十分に統制ができておらず，また，語の長さも統制することができなかった．これら特性語の選択に関して問題があるため，多くの研究で用いられている平均値ではなく，中央値を使って分析をしたが，問題点を解決しているとは言い難い．今後は，特性語をさらに洗練させて，伝統的な意味での女性的特性が日本におけるジェンダー・ステレオタイプでは使われづらいかどうかなど，本研究で得られた知見が再現するか否かをさらなる研究で検討していく必要があるであろう．

このような研究を進めることにより，サブカテゴリーを含んだジェンダー・ステレオタ

イプの自動的活性化を明らかにすることができるであろう．その上で，ジェンダー・ステレオタイプの自動的活性化と適用との関係やジェンダーに基づいた偏見や差別との関係を明らかにすることは，現代日本におけるジェンダーに関わる諸問題の解決法を考える手がかりとなるであろう．

引 用 文 献

Alexander, M. G., Brewer, M. B., & Herrmann, R. K.（1999）. Images and affect: A functional analysis of out-group stereotypes. *Journal of Personality and Social Psychology, 77*, 78-93.

Bakan, D.（1966）. T*he duality of human existence: Isolation and communion in western man,* Boston: Beacon Press.

Banaji, M. R., & Hardin, C. D.（1996）. Automatic stereotyping. *Psychological Science, 7,* 136-141.

Bargh, J. A.（1999）. The cognitive monster: The case against the controllability of automatic stereotype effects. In S. Chaiken & Y. Trope（Eds.）, *Dual process theories in social psychology.* New York: Guilford. Pp. 361-382.

Blair, I. V.（2002）. The malleability of automatic stereotypes and prejudice. *Personality and Social Psychology Review, 6,* 242-261.

Blair, I. V., & Banaji, M. R.（1996）. Automatic and controlled processes in stereotype priming. *Journal of Personality and Social Psychology, 70,* 1142-1163.

Blair, I.V., Ma, J.E., Lenton, A.P.（2001）. Imagining stereotypes away: The moderation of implicit stereotypes through mental imagery. Journal of Personality and Social Psychology , 81, 828-841.

Burgess, D., & Borgida, E.（1999）. Who women are, who women should be: Descriptive and prescriptive gender stereotyping in sex discrimination. *Psychology, Public Policy, and Law, 5,* 665-692.

Dasgupta, N., & Asgari, S.（2004）. Seeing is believing: Exposure to counterstereotypic women leaders and its effect on the malleability of automatic gender stereotyping. *Journal of Experimental Social Psychology, 40,* 642-658.

Deaux, K., Winton, W., Crowley, M., & Lewis, L. L.（1985）. Level of categorization and content of gender stereotypes. *Social Cognition, 3,* 145-167.

Devine, P. G.（1989）. Stereotypes and prejudice: Their automatic and controlled components. *Journal of Personality and Social Psychology, 56*, 5-18.

Devine, P. G., & Monteith, M. J.,（1999）. Automaticity and control in stereotyping. In S. Chaiken & Y. Trope（Eds.）, *Dual process theories in social psychology.* New York: Guilford.

Pp. 339-360.

Fazio, R. H., Jackson, J. R., Dunton, B. C., & Willisms, C. J.（1995）. Variability in automatic activation as an unobstrusive measure of racial attitudes: A bona fide pipleline? *Journal of Personality and Social Psychology, 69*, 1013-1027.

Fazio, R. H., & Olson, M. A.（2003）. Implicit measures in social cognition research: Their meaning and use. *Annual Review of Psychology, 54*, 297-327.

Fein, S., & Spencer, S. J.（1997）. Prejudice as self-image maintenance: Affirming the self through derogating others. *Journal of Personality and Social Psychology, 73*, 31-44.

Fiske, S. T.（1998）. Stereotyping, prejudice, and discrimination. In D. T. Gilbert, S. T. Fiske, & G. Lidzey（Eds.）, *The handbook of social psychology, 4th ed.* Vol. 2. New York: McGraw-Hill. Pp. 357-411.

Fiske, S. T., Cuddy, A. J. C., Glick, P., & Xu, J.（2002）. A model of（often mixed）stereotype content: Competence and warmth respectively follow from perceived status and competition. *Journal of Personality and Social Psychology, 82*, 878-902.

Gilbert, D. T., & Hixon, J. G.（1991）. The trouble with thinking: Activation and application of stereotypic beliefs. *Journal of Personality and Social Psychology, 60*, 509-517.

Glick, P., & Fiske, S. T.（2001）. Ambivalent sexism. In M. Zanna（Ed.）*Advances in Experimental Social Psychology.* Vol. 33. San Diego, CA: Academic Press. Pp. 115-188.

Greenwald, A. G., McGhee, D. E., & Schwartz, J. L. K.（1998）. Measuring individual differences in implicit cognition: The Implicit Associaiton Test. *Journal of Personality and Social Psychology, 74*, 1464-1480.

Jost, J. T., & Banaji, M. R.（1994）. The role of stereotyping in system-justification and the production of false consciousness. *British Journal of Social Psychology, 33*, 1-27.

Kawakami, K., & Dovidio, J. F.（2001）. The reliability of implicit stereotyping. *Personality and Social Psychology Bulletin 27,* 212-225

Karylowski, J. J., Motes, M. A., Wallace, H. M., Harckom, H. A., Hewlett, E. M., Maclean, S. L., Parretta, J. L., & Vaswani, C. L.（2001）. Spontaneous gender-stereotypical categorization of trait labels and job labels. *Current Research in Social Psychology , 6,* 1-13.

Kunda, Z., & Spencer, S. J.（2003）. When do stereotypes come to mind and when do they color judgment? A goal-based theoretical framework for stereotype activation and application. *Psychological Review, 129,* 522-544.

Macrae, C. N., Bodenhausen, G. V., Milne, A. B., & Jetten, J.（1994）. Out of mind but back in sight: Stereotypes on the rebound. *Journal of Personality and Social Psychology, 67*, 808-817.

Macrae, C. N., Bodenhausen, G. V., Milne, A. B., Thorn, T. M. J., & Castelli, L.（1997）. On the activation of social stereotypes: The moderating role of processing objectives. *Journal of*

Experimental Social Psychology, 33, 471-489.

Macrae, C.N., Hood, B.M., Milne, A.B., Rowe, A.C., & Mason, M.F.（2002）. Are you looking at me? Eye gaze and person perception. *Psychological Science, 13,* 460-464.

Mitchell, J.P., Nosek, B.A., Banaji, M.R.（2003）. Contextual variations in implicit evaluation. *Journal of Experimental Psychology: General, 132,* 455-469.

Neely, J.（1977）. Semantic priming and retrieval from lexical memory: Roles of inhibitionless spreading activation and limited-capacity attention. *Journal of Experimental Psychology: General, 106,* 226-254.

Nosek, B. A., & Banaji, M. R.（2001）. The go/no-go association task. *Social Cognition, 19,* 625-666.

野寺綾・唐沢かおり（2004）. 性別と男女平等主義的態度がジェンダーステレオタイプ活性におよぼす影響. 人間環境学研究, 2. 9-14.

野寺綾・唐沢かおり（2005）. 罰がステレオタイプ活性に対してもつ抑制効果の検討 社会心理学研究, *20*, 181-190.

野寺綾・唐沢かおり・沼崎誠・高林久美子（2005）. 自己価値への脅威が性役割的支持傾向に及ぼす影響－ Implicit Association Test を用いて－ 日本社会心理学会第 46 回大会発表論文集, 124-125.

沼崎誠・工藤恵理子（1995）. 女性との競争状況が男性の家庭志向型女性・キャリア志向型女性に対する好意に及ぼす効果 日本グループダイナミックス学会第 43 回大会発表論文集, 246-247.

沼崎誠・工藤恵理子(2003). 脅威状況における性役割的偏見に関する研究 日本グループダイナミック学会第 50 回大会発表論文集, 32-35.

Payne, B. K.（2001）. Prejudice and perception: The role of automatic and controlled processes in misperceiving a weapon. *Journal of Personality and Social Psychology, 81*, 181-192.

Payne, B. K., Jacoby, L. L. & Lambert, A. J.（2005）. Attitudes as accessibility bias: Dissociating automatic and controlled processes. In J. S. Uleman, J. A. Bargh, & R. Hassin（Eds.）*The new unconscious.* New York: Oxford. Pp. 393-420.

Rudman, L.A., & Glick, P.（1999）. Feminized management and backlash toward agentic women: The hidden costs to women of a kinder, gentler image of middle managers. *Journal of Personality and Social Psychology, 77,* 1004-1010.

Rudman, L.A., & Goodwin, S.A.（2004）. Reactions to counterstereotypic behavior: The role of backlash in cultural stereotype maintenance. *Journal of Personality and Social Psychology 87*, 494-509.

Rudman, L.A., Greenwald, A.G., & McGhee, D.E.（2001）. Implicit self-concept and evaluative implicit gender stereotypes: Self and ingroup share desirable traits. *Personality and Social*

Psychology Bulletin, 27, 1164-1178.

Spencer, S. J., Fein, S., Wolfe, C. T., Fong, C., & Dunn, M. A.（1998）. Automatic activation of stereotypes: The role of self-image threat. *Personality and Social Psychology Bulletin, 24,* 1139-1152.

Six, B., & Eckes, T.（1991）. A closer look a the complex structure of gender stereotypes. *Sex Roles, 24,* 57-71.

Takabayashi, K., Numazaki, M., Ono, S., & Ishii, K.（2006）. *Women have a prejudice toward women? The effects of activated self-representation on stereotyping and evaluation toward women.* Presented paper at The 7th annual Society of Personality and Social Psychology conference, Palm Springs, USA.

Wittenbrink, B., Judd, C. M., & Park, B.（2001a）. Spontaneous prejudice in context: Variability in automatically activated attitudes. *Journal of Personality and Social Psychology, 81*, 815-827.

Wittenbrink, B., Judd, C. M., & Park, B.（2001b）. Evaluative versus conceptual judgments in automatic stereotyping and prejudice. *Journal of Experimental Social Psychology, 72*, 244-252.

Appendix 1　研究で用いたターゲット実験刺激語

作動性高

ポジティブ	ネガティブ
ユウノウ（有能）	ガンコ（頑固）
ユウカンナ(勇敢な)	ゴウイン（強引）
ハッキリシタ（はっきりした）	ゴウマン（傲慢）
イシノツヨイ（意志の強い）	シハイテキ（支配的）
ジシンノアル（自信のある）	イアツテキ（威圧的）
シドウリョクノアル（指導力のある）	コウアツテキ（高圧的）
ケツダンリョクノアル（決断力のある）	コウゲキテキ（攻撃的）
トウソツリョクノアル（統率力のある）	トウソウテキ（闘争的）

作動性低

ポジティブ	ネガティブ
ケンキョ（謙虚）	ウケミテキ（受け身的）
ユウガナ（優雅な）	イゾンテキ（依存的）
ヒカエメ（控えめな）	オクビョウ（臆病）
オシトヤカ（おしとやか）	タヨリナイ（頼りない）
モノシズカ（もの静か）	ヨワヨワシイ（弱々しい）
ジュンシンナ（純真な）	イシノヨワイ（意志の弱い）
カワイラシイ（可愛らしい）	イケンノナイ（意見のない）
オットリシタ（おっとりした）	ナガサレヤスイ（流されやすい）

共同性高

ポジティブ	ネガティブ
セワズキ（世話好き）	ウルサイ（うるさい）
ヤサシイ（優しい）	オシャベリ（おしゃべり）
アタタカイ（温かい）	デシャバリ（でしゃばり）
カテイテキ（家庭的）	ウワザズキ（うわさ好き）
キダテノヨイ（気立ての良い）	オセッカイ（おせっかい）
シタシミヤスイ（親しみやすい）	クチダシスル（口出しする）
メンドウミノヨイ（面倒見の良い）	カンショウテキ（干渉的）
キョウリョクテキ（協力的）	ハッポウビジンナ（八方美人な）

共同性低

ポジティブ	ネガティブ
セレイセイ（冷静）	コドクナ（孤独な）
ヤキママナ（気ままな）	ヒハンテキ（批判的）
アココウノ（孤高の）	ヒトリヨガリ（独りよがり）
カロンリテキ（論理的）	ソッケナイ（そっけない）
キドクリツシタ（独立した）	ジブンカッテ（自分勝手）
シブンセキテキ（分析的）	ブアイソウナ（無愛想な）
メドウドウトシタ（堂々とした）	ウチトケナイ（打ち解けない）
キソクバクサレナイ（束縛されない）	トッツキニクイ（とっつきにくい）

Appendix 2

実験手続き仕様

2004/07/24 版
作成者：小野　滋

1　概要

逐次プライミング・パラダイムによる試行をおこなう。 プライム刺激は画像，ターゲット刺激は単語である。

実験試行における要因は以下の 2 つである。
・プライム刺激種別。4 水準。
・ターゲット刺激種別。8 水準。
どちらも被験者内で操作される。

主課題の性質を変え，2 種類の実験を行う。
・実験 A ...ターゲット語が性格特性語かどうかの判断。
・実験 B ...ターゲット語の望ましさ判断。

実装

手続き制御に Superlab を使用する。手順は以下の通り。
・Superlab スクリプトを作成(以下「テンプレート」)。 ここですべてのスケジュールを定義する。 提示する画像ファイル名・ 文字列としては，仮の値を割り当てる(以下「置換前」)。 テンプレートのファイル名は以下の通り:
  o template_a1.xpt 実験 A 用，本セッション群は 4 セッション
  o template_a2.xpt 実験 A 用，本セッション群は 2 セッション
  o template_b1.xpt 実験 B 用
・置換前ファイル名・文字列と, 実ファイル名・文字列との 対応を記述した変換表(例：numa_dic-a.txt) を 作成する。その手順は numa.xls に記述する。
・Perl スクリプト numa.pl は， テンプレート を標準入力から読み，変換表に基づいて，置換前ファイル名・ 文字列を実際のファイル名・文字列に変換した Superlab スクリプトを標準出力する。使用方法は numa.pl の先頭部に記述する。
・numa.pl を呼び出すシェルスクリプト(例, numa.cmd)によって，以下の 16 個のスクリプトを作成する:
  o 実験 A 用
    ＊ g1-r.xpt ...群 1, 右利き用
    ＊ g1-l.xpt ...群 1, 左利き用
    ＊　:
    ＊ g8-l.xpt ...群 8, 左利き用
  o 実験 B 用
    ＊ gb1-r.xpt ...群 1, 右利き用
    ＊　:

２　被験者

8 群に分割する(G1-G8)。性別はカウンターバランスする。

３　刺激

実験 B.では使用しないものも含まれている。

３．１　プライム刺激

写真。 {仕事男/仕事女/家庭男/家庭女}の 4 条件。

実験項目[P]　各条件につき 8 枚，計 32 枚。

フィラー項目[PF]　実験項目に準じた写真を選ぶ。

[PFO] 再認において old 項目となる。各条件につき 8 枚，計 32 枚。 4 等分し，8 枚からなる 4 セットを作成([PFO1]-[PFO4])。

[PFN] 再認において new 項目となる。各条件につき 8 枚，計 32 枚。 4 等分し，8 枚からなる 4 セットを作成([PFN1]-[PFN4])。

３．２　ターゲット刺激

単語(ないし語句)。 カナ表記。

実験項目[T]　実験項目。人物の形容語。 {作動的/共同的}×{高/低}×{posi/nega}の 8 条件。 各条件につき 8 語，計 64 語。 各条件につき 1 語づつ，計 8 語からなるセットを 8 つ作成する([T1],[T2],...,[T8])。表 1 参照。

表 1: 実験項目[T] の記号表記

作高 p	作高 n	作低 p	作低 n	共高 p	共高 n	共低 p	共低 n
T1	T1	T1	T1	T1	T1	T1	T1
T2	T2	T2	T2	T2	T2	T2	T2
T3	T3	T3	T3	T3	T3	T3	T3
T4	T4	T4	T4	T4	T4	T4	T4
T5	T5	T5	T5	T5	T5	T5	T5
T6	T6	T6	T6	T6	T6	T6	T6
T7	T7	T7	T7	T7	T7	T7	T7
T8	T8	T8	T8	T8	T8	T8	T8

フィラー項目[TF]　**[TFY]** 人物の形容語。{posi/nega} の 2 条件。各条件につき 8 語，計 16 語。 折半し，8 語からなるセットを 2 つ作成する([TFY1],[TFY2])。

[TFN] 人物の形容語でない語。 [T](ならびに[TFY])と 末尾・長さをなるべく揃える。80 語。 10 等分し，8 語からなるセットを 10 個作成する([TFN1],[TFN2],...,[TFN10])。

ベース練習項目[TBE]　日本の地名 32 語，日常的なものをあらわす名詞 32 語。計 64 語。 折半し，32 語からなるセットを 2 つ作成する ([TBE1][TBE2])。

本練習項目[TE]　人物の形容語 4 語，人物の形容語でない語 4 語，計 8 語。

手続きの概要

４　手続きの概要

各被験者に対して，以下の 5 種類のセッション群を順におこなう。

I.	写真記銘セッション群	本セッション群におけるプライム刺激を含んだ 記銘リストを学習する
II.	ベース練習セッション群	ベースセッション群の練習
III.	ベースセッション群	本セッション群における主課題（ターゲット刺激に対する課題)のみをおこなう
IV.	本練習セッション群	本セッション群の練習
V.	本セッション群	

５　実験 A の手続き

５．１　写真記銘セッション群

［P］(32 枚)，［PFO］(32 枚)の 計 64 枚を，3 秒づつ逐次提示し，記銘させる。 提示順はランダム(全被験者で共通)。 1 セッション。見込み時間 3 分。

実装

block 名は"b", trial 名は"t", event 名は"e"からはじめる。

- b0
  - t0
    - ＊ e0: グループ名を表示する。スペースキー待ち。
      - ･･･　置換前文字列: group!
- b1
  - t1-start
    - ＊ e1_instruc: 教示パネル提示，スペースキー待ち。
    - ＊ 固定ファイル名: s1_instruc.bmp
    - ＊ e1_start1: 直前パネル提示，スペースキー待ち。
    - ＊ 固定ファイル名: s1_start.bmp
    - ＊ e1_start2: ブランク，1000ms
  - t1-0??（??=01 ～ 64）
    - ＊ e1_image0??: 画像提示，待ちなし。 ここで待たないこと（待ちのイベントをひとつにしておいたほうが 見通しがいいから)。
      - ･･･　置換前ファイル名: s1_image0??.bmp
    - ＊ e1_wait:　待ち。 ISI ではなく終了条件で計時する（ESC 割り込みができるように)。
  - t1-end
    - ＊ e1_ending: 終了パネル提示，スペースキー待ち。
      - ･･･　固定ファイル名: s1_ending.bmp

５．２　ベース練習セッション群

5.2.1　教示要旨

提示されることばが地名かどうかを判断し，地名の場合は[J]キーを，　そうでない場合には[F]キーを，なるべく早く正確にキーを押せ。　左利きに対してはキーを反転する。

5.2.2　刺激

［TBE］(64 語)。各語を 1 試行ずつ使用する。 前半で[TBE1]，後半で[TBE2]を使用する。3 提示順序はランダム(全被験者で共通)。

5.2.3　セッションのスケジュール

1 セッション，64 試行。　見込み時間 5 分。

5.2.4　試行のスケジュール

1. ブランク。500ms。
2. 注視点を提示。1000ms。
3. 刺激項目を提示。キー入力とともに消失。
   －誤反応の場合はエラーが表示され，一定時間後に 消失する。

実装

- b2
  - t2-start
    - ＊ e2_instruc1: 教示パネル提示，［F］キー待ち。
    - ＊ 置換前ファイル名: s2_instruc-r.bmp
    - ＊ e2_instruc2: ［J］キー待ち。
    - ＊ e2_start1: 直前パネル提示，3000ms。
      - ･･･　固定ファイル名: s2_start.bmp
    - ＊ e2_start2: ブランク，500ms
  - t2-0??（??=01 ～ 64）
    - ＊ e_beforepoint: ブランク，500ms。
    - ＊ e_point: 注視点表示，1000ms。面倒なので，終了条件で計時する。
    - ＊ e2_word0??:　単語提示，正解キー待ち。バッファリングする。記録する。不正解時は t2_error を実行。
    - ＊ 置換前文字列: s2_word0??!
    - ＊ 第 1 フィールドが「s2_word0??」，　第 2 フィールドが「text」である行の第 6 フィールドを，正解にあわせて置換する。［F］は「203」, [J]は「202」。
  - t2-end
    - ＊ e2_ending: 終了パネル提示，スペースキー待ち。
      - ･･･　固定ファイル名: s2_ending.bmp
- フィードバック
  - t2-error
    - ＊ e2_error: エラー文字列を提示，2000ms。前画面を消さないこと。
    - ＊ e2_errorwait: ブランク，1000ms。

５．３　ベースセッション群

5.3.1　教示要旨

「提示されることばが，人の特徴を形容するものかどうかを判断し...」 以下，練習セッション群と同様。

5.3.2　刺激

［T］［TF］の計 160 項目を使用。各語を 1 試行ずつ使用する。 セッションへの割り当ては下表。

	G1-4 群	G5-8 群
セッション 1	［T1-4］［TFY1］［TFN1-5］	［T5-8］［TFY2］［TFN6-10］
セッション 2	［T5-8］［TFY2］［TFN6-10］	［T1-4］［TFY1］［TFN1-5］

セッション内での提示順序はランダム（群内で共通）。

5.3.3　セッションのスケジュール

全 160 試行。 80 試行を 1 セッションとし，休憩を挟んで 2 セッションおこなう。 見込み時間 15 分。

5.3.4　試行のスケジュール

1. ブランク。500ms。
2. 注視点を提示。1000ms。
3. 刺激項目を提示。キー入力とともに消失。 エラーへのフィードバックはない。

実装

- b3-1, b3-2
  - b3-1 の先頭: t3-start
    - ＊ e3_instruc1: 教示パネル提示，［F］キー待ち。
    - ＊ 置換前ファイル名: s3_instruc-r.bmp
    - ＊ e3_instruc2: ［J］キー待ち。
    - ＊ e3_start1: 直前パネル提示，3000ms。
    - ＊ 固定ファイル名: s3_start.bmp
    - ＊ e3_start2: ブランク，500ms
  - b3-2 の先頭: t-interv
    - ＊ e_interv1: 休憩パネル提示，［F］キー待ち。
    - ＊ 固定ファイル名: s_interv1.bmp
    - ＊ e_interv2: 継続，［J］キー待ち。
    - ＊ e_interv3: 再開パネル提示，3000ms。
      - ･･･　固定ファイル名: s_interv2.bmp
    - ＊ e_interv4: ブランク，500ms。
  - t3-???（???=001 ～ 160）
    - ＊ e_beforepoint
    - ＊ e_point
    - ＊ e3_word???: 単語提示，キー待ち。 バッファリングする。記録する。
    - ＊ 置換前文字列: s3_word???!
  - b3-2 の末尾: t3-end
    - ＊ e3_ending: 終了パネル提示，スペースキー待ち。
      - ･･･　固定ファイル名: s3_ending.bmp

５．４　本練習セッション群

5.4.1　教示

「まず写真が提示されます。次にことばが提示されますので，　そのことばが，人の特徴を形容するものかどうかを判断し...。　次に，質問が表示されますので，先ほどの写真を記銘セッションで 見たかどうかを判断し...」

5.4.2　刺激

・　プライムとして，［PFO］から 4 枚, ［PFN］から 4 枚を適当に使用
・　ターゲットとして［TE］(8 項目)を使用

適当な順序で適当に組み合わせて用いる(全被験者で共通)。

5.4.3　セッションのスケジュール

全 8 試行。見込み時間 1 分。

5.4.3　試行のスケジュール

1. ブランク。1000ms。
2. 注視点を提示。1000ms。
3. プライム項目を提示。300ms,
4. ブランクを提示。50ms。
5. ターゲット項目を提示。キー入力とともに消失。フィードバックなし。
6. ブランク。1000ms。
7. 質問を提示。「写真はリストのなかにありましたか?」。キー入力とともに消失。

実装

● b4
- t4-start
  - ＊ e4_instruc1: 教示パネル提示，［F］キー待ち。
    - ･･･　置換前ファイル名: s4_instruc-r.bmp
  - ＊ e3_instruc2: 継続，［J］キー待ち。
  - ＊ e2_start1: 直前パネル提示，3000ms。
    - ･･･　固定ファイル名: s4_start.bmp
  - ＊ e3_start2: ブランク，500ms。要らないかも。
- t4-0??（??=01 ～ 08）
  - ＊ e45_wait1: ブランク，500ms。　試行が難しいので，間隔を増やしている
  - ＊ e_beforepoint
  - ＊ e_point
  - ＊ e4_image0??: 画像提示，待ちなし。前画面を消すこと。
    - ･･･　置換前ファイル名: s4_image0??.bmp
  - ＊ e45_isi1: 継続，300ms。ISI で計時する。
  - ＊ e45_isi2: ブランク，50ms。ISI で計時する(削除時間こみで)。
  - ＊ e45_beep1: 音声提示，待ちなし。非同期で。
    - ･･･　固定ファイル名: sin1000-100.bmp
  - ＊ e4_word0??: 単語提示。キー待ち。　バッファリングする。記録する。
    - ･･･　置換前文字列: s4_word0??!
  - ＊ e45_wait2: ブランク，1000ms。
  - ＊ e45_beep2: 音声提示，待ちなし。非同期で。
    - ･･･　固定ファイル名: sin1000-100.bmp
  - ＊ e45_recogn: 再認パネル提示，キー待ち。バッファリングしないことに注意(おそらくメモリが足りない)。　記録する。
    - ･･･　置換前ファイル名: s_recogn-r.bmp
- t4-end
  - ＊ e4_ending:　終了パネル提示。キー待ちしない。（ブロックのみ実行した場合には，わかりにくいので注意すること）
    - ･･･　固定ファイル名: s4_ending.bmp

５．５　本セッション群

5.5.1　構成[*1]

試行の構成は下表の通り。 なお，yn1-yn4 の区分は便宜的なもので， 同質の試行である。

<table>
<tr><td></td><td>実験試行</td><td colspan="7">フィラー試行</td></tr>
<tr><td>試行種別
試行数</td><td>yy
64</td><td>yn1
16</td><td>yn2
16</td><td>yn3
16</td><td>yn4
16</td><td>nn
16</td><td colspan="2">ny
16</td></tr>
<tr><td>プライム
（正反応）</td><td>［P］
（yes）
32 枚</td><td>［PFO1］</td><td colspan="3">［PFO2］
（yes）
32 枚</td><td>［PFO4］</td><td colspan="2">［PFN］
（no）
32 枚</td></tr>
<tr><td>ターゲット
（正反応）</td><td>［T］
（yes）
64 語</td><td colspan="6">［TFN］
（no）
80 語</td><td colspan="2">［TFY］
（yes）
16 語</td></tr>
</table>

この 160 試行を 1 ブロックと呼ぶことにする。 1 ブロックでは，各プライム項目が 2 度(ただし[PFN]は 1 度)， 各ターゲット項目が 1 度用いられる。

この 160 試行を 2 セッション(各 80 試行)にわけておこなう。 さらに，ターゲットと試行種別・プライム条件の 組み合わせを変えながら，これを 4 回繰り返す。 従って全 4 ブロック，8 セッション，640 試行となる。

以上のほかに，冒頭に本練習セッションと同一の試行(8 試行)が 繰り返される。従って計 648 試行となる。

■ 2 ブロック版

完成したスケジュールから， 後半 2 ブロックを削除したスケジュールも作成する（テンプレート template_a2.xpt)。 2 ブロック, 4 セッション, 320 試行， 冒頭の本練習試行を加えて 328 試行。

5.5.2　教示要旨

本練習セッション群と同じ。

*1　本実験においては 4 ブロック版ではなく 2 ブロック版を使用した.

5.5.3　刺激

■[T]セット

第 1 セッションでは，G1-G4 群が[T1-4]を， G5-G8 群が[T5-8]を使用する。 [T]セット，プライム条件, 被験者群をラテン方格に従って 組み合わせる。

第 1 セッション

	家庭男	家庭女	仕事男	仕事女
G1 群	[T1]	[T2]	[T3]	[T4]
G2 群	[T2]	[T1]	[T4]	[T3]
G3 群	[T3]	[T4]	[T1]	[T2]
G4 群	[T4]	[T3]	[T2]	[T1]
G5 群	[T5]	[T6]	[T7]	[T8]
G6 群	[T6]	[T5]	[T8]	[T7]
G7 群	[T7]	[T8]	[T5]	[T6]
G8 群	[T8]	[T7]	[T6]	[T5]

第 2 セッションでは[T1-4]と[T5-8]を反転する。

第 3 セッションでは，第 1 セッションでの割り当てを プライム条件間でシフトする。すなわち，

第 3 セッション

	家庭男	家庭女	仕事男	仕事女
G1 群	[T2]	[T1]	[T4]	[T3]
G2 群	[T3]	[T4]	[T1]	[T2]
G3 群	[T4]	[T3]	[T2]	[T1]
G4 群	[T1]	[T2]	[T3]	[T4]
G5 群	[T6]	[T5]	[T8]	[T7]
G6 群	[T7]	[T8]	[T5]	[T6]
G7 群	[T8]	[T7]	[T6]	[T5]
G8 群	[T5]	[T6]	[T7]	[T8]

以下同様。

従って，たとえば G1 群における割り当ては以下のようになる。

G1 群

	家庭男	家庭女	仕事男	仕事女
第 1 セッション	[T1]	[T2]	[T3]	[T4]
第 2 セッション	[T5]	[T6]	[T7]	[T8]
第 3 セッション	[T2]	[T3]	[T4]	[T5]
第 4 セッション	[T6]	[T7]	[T8]	[T1]
第 5 セッション	[T3]	[T4]	[T1]	[T2]
第 6 セッション	[T7]	[T8]	[T5]	[T6]
第 7 セッション	[T4]	[T1]	[T2]	[T3]
第 8 セッション	[T8]	[T5]	[T6]	[T7]

以下同様。

［TFN］セット

第 1 セッションでは以下のように割り当てる。

第 1 セッション

	yn1	yn2	yn3	yn4	nn
G1 群	［TFN1］	［TFN2］	［TFN3］	［TFN4］	［TFN5］
G2 群	［TFN2］	［TFN3］	［TFN4］	［TFN5］	［TFN1］
G3 群	［TFN3］	［TFN4］	［TFN5］	［TFN1］	［TFN2］
G4 群	［TFN4］	［TFN5］	［TFN1］	［TFN2］	［TFN3］
G5 群	［TFN6］	［TFN7］	［TFN8］	［TFN9］	［TFN10］
G6 群	［TFN7］	［TFN8］	［TFN9］	［TFN10］	［TFN6］
G7 群	［TFN8］	［TFN9］	TFN10］	［TFN6］	［TFN7］
G8 群	［TFN9］	TFN10］	［TFN6］	［TFN7］	［TFN8］

第 2 セッションでは，［TFN1-5］と［TFN6-10］を反転する。

第 3 セッションでは， 第 1 セッションの組み合わせをシフトする。すなわち，

第 3 セッション

	yn1	yn2	yn3	yn4	nn
G1 群	［TFN2］	［TFN3］	［TFN4］	［TFN5］	［TFN1］
G2 群	［TFN3］	［TFN4］	［TFN5］	［TFN1］	［TFN2］
G3 群	［TFN4］	［TFN5］	［TFN1］	［TFN2］	［TFN3］
G4 群	［TFN5］	［TFN1］	［TFN2］	［TFN3］	［TFN4］
G5 群	［TFN7］	［TFN8］	［TFN9］	［TFN10］	［TFN6］
G6 群	［TFN8］	［TFN9］	［TFN10］	［TFN6］	［TFN7］
G7 群	［TFN9］	［TFN10］	［TFN6］	［TFN7］	［TFN8］
G8 群	［TFN10］	［TFN6］	［TFN7］	［TFN8］	［TFN9］

以下同様。

■［TFY］セット

第 1 セッションでは，G1-G4 群が［TFY1］を，G6-G8 群が ［TFY2］を使用する。 第 2 セッションでは反転する。以下同様。

■[PFN]セット

以下のように使用する。

	nn	ny
セッション1	[PFN1]	[PFN2]
セッション2	[PFN3]	[PFN4]
セッション3	[PFN2]	[PFN1]
セッション4	[PFN4]	[PFN3]
セッション5	[PFN1]	[PFN2]
セッション6	[PFN3]	[PFN4]
セッション7	[PFN2]	[PFN1]
セッション8	[PFN4]	[PFN3]

■プライム項目とターゲット項目の組み合わせ

ターゲットの各セットに含まれる項目(8語)に，1-8の番号を振る([T]の場合，1が「作高p」に相当する)。 また，プライムの各条件ないしセットのなかに含まれる項目（8枚）に，i-viiiの番号を振る。 全被験者群で，以下の表を用いる。

ターゲット側項目番号

	プライム側項目番号							
	i	ii	iii	iv	v	vi	vii	viii
第1セッション	1	2	3	4	5	6	7	8
第2セッション	2	3	4	5	6	7	8	1
第3セッション	3	4	5	6	7	8	1	2
第4セッション	4	5	6	7	8	1	2	3
第5セッション	5	6	7	8	1	2	3	4
第6セッション	6	7	8	1	2	3	4	5
第7セッション	7	8	1	2	3	4	5	6
第8セッション	8	1	2	3	4	5	6	7

こうして，全被験者群を通じ，あるターゲット項目はあるプライム項目と1回組み合わされることになる。

5.5.4 試行の順序

各群の各セッションについてランダム（群内では共通)。

5.5.5 セッションのスケジュール

全160 × 4試行。 80試行を1セッションとし（第1セッションのみ88試行)， 休憩を挟んで8セッションおこなう。 見込み時間45分。

5.5.6 試行のスケジュール

本練習セッションと同じ。

実装

● b5-1 ～ b5-8

－ b5-1 の先頭: t5-start

＊ e5_instruc1: 継続，［F］キー待ち。 パネルを表示しない点に注意。

＊ e3_instruc2: 継続，［J］キー待ち。

＊ e2_start1: 直前パネル提示，3000ms。

・・・ 固定ファイル名: s5_start.bmp

＊ e3_start2: ブランク，500ms。要らないかも。

その後に，t4-0??を付け加える。

－ b5-2 ～ の先頭: t-interv

－ t5-???（???=000 ～ 640）

＊ e45_wait1

＊ e_beforepoint

＊ e_point

＊ e5_image???: 画像提示，待ちなし。前画面を消すこと。

・・・ 置換前ファイル名: s5_image???.bmp

＊ e45_isi1

＊ e45_isi2

＊ e45_beep1

＊ e5_word???: 単語提示。キー待ち。 バッファリングする。記録する。

・・・ 置換前文字列: s5_word???!

＊ e45_wait2

＊ e45_beep2

＊ e45_recogn

● b6

－ t6

＊ e5_ending: 教示パネルを提示，スペースキー待ち。 イベント名がちょっとまぎらわしいので 注意すること（本来 b5 の下におかれるもの なので，e5 とつけられている）。

・・・ 固定ファイル名: s5_ending.bmp

６　実験 B の手続き

６．１　写真記銘セッション群

実験 A と同一。

６．２　ベース練習セッション群

実験 A からの変更点は:

■刺激［TBE1］(32 語)。
■セッションのスケジュール　1 セッション, 32 試行。

実装変更点
● t2-0?? が 32 までになる

６．３　ベースセッション群

実験 A からの変更点は:

■教示要旨 「提示されることばが，望ましい性格特性かどうかを判断しろ」
■刺激［T］［TFY］の計 80 項目を使用。各語を 1 試行ずつ使用する。 セッションへの割り当ては下表。

	G1-4 群	G5-8 群
セッション 1	［T1-4］［TFY1］	［T5-8］［TFY2］
セッション 2	［T5-8］［TFY2］	［T1-4］［TFY1］

セッション内での提示順序はランダム(群内で共通)。

■セッションのスケジュール 全 80 試行。 見込み時間 7 分。

実装変更点
● block が b3 のみになる。その構成は 　－ 先頭 trial: t3-start 　－ 試行 trial: t3-???　(???=001 ～ 080) 　－ 末尾 trial: t3-end ● e3_instruc1 の置換後ファイルを差し替える

7　本練習セッション群

実験 A からの変更点は:

■教示 「まず写真が提示される。次にことばが提示されますので， そのことばが，性格特性語として望ましいものか どうか判断しろ。 次に，質問が表示されますので，先ほどの写真を記銘セッションで 見たかどうかを判断しろ」

■試行のスケジュール ターゲット刺激提示直前の 50ms に， ランダムドットで作成したマスクを提示する。

実装変更点
● e4_instruc1 の置換後ファイルを差し替える
● e45_isi2 を変更。マスクを提示する。終了条件計時で 50ms。
ー 固定ファイル名: s45b_mask.bmp
● e4_word???で erase する

7．1　本セッション群

7.1.1　構成

試行の構成は下表の通り。

	実験試行	フィラー試行
試行種別	yy	ny
試行数	64	32
プライム	［P］	［PFN］
（正反応）	（yes）	（no）
	32 枚	32 枚
ターゲット	［T］	［TFY］
（正反応）	（yes/no）	（yes/no）
	64 語	16 語

この 80 試行を 1 ブロックと呼ぶことにする。［P］の各項目は 1 ブロックに 2 度，［PFN］の各項目は 2 ブロックに 1 度, ［T］［TFN］の各項目は 1 ブロックに 1 度用いられる。

実験手続き上のセッション（休憩で区切られた試行系列）は，上のブロックと一致する。しかし，ここでは便宜的に， 1 ブロックを半分に分割した試行系列（40 試行）を 「セッション」と呼ぶ 4。

ターゲットとプライム条件の 組み合わせを変えながら，ブロックを 4 回繰り返す。 従って，全 4 ブロック，8 セッション, 320 試行となる。

以上のほかに，冒頭に本練習セッション群と同一の試行（8 試行）が 繰り返される。従って計 328 試行となる。

7.1.2　教示要旨

本練習セッション群と同じ。

7.1.3　刺激

■[T]セット, [TFY]セット 実験 A と同様。

■[PFN]セット 以下のように使用する。

	ny
セッション 1	[PFN1]
セッション 2	[PFN2]
セッション 3	[PFN3]
セッション 4	[PFN4]
セッション 5	[PFN1]
セッション 6	[PFN2]
セッション 7	[PFN3]
セッション 8	[PFN4]

■プライム項目とターゲット項目の組み合わせ 実験 A と同様。

7.1.4　試行の順序

各群の各セッションについてランダム（群内では共通)。

7.1.5　セッションのスケジュール

全 80 × 4 試行，80 試行ごとに休憩。 ただし，冒頭に 8 試行をつけくわえる。

7.1.6　試行のスケジュール

本練習セッション群と同じ。

実装変更点

- block は b5-1 ～ b5-4 となる
- 本試行の trial は t5-??? (???=000 ～ 320) となる
- e45_isi2 を変更
- e4_word???で erase する

Ⅱ．男女間の競争状況が
ジェンダー・ステレオタイプの活性化に及ぼす効果

石井　国雄　　**沼崎　誠**
(東京都立大学大学院)　　(首都大学東京)

偏見・ステレオタイプ研究において近年，無意識過程にますます注目がなされてきている．本研究は無意識的なステレオタイプの活性化への自己高揚動機の影響を取り上げ, ステレオタイプ活性化過程に対する状況要因の効果を検討した.

ステレオタイプとは

ステレオタイプとは特定の社会的集団の成員が持つ特徴に対する過度に一般化された共有知識のことをいう．ステレオタイプはさまざまな社会的行動や認知に影響するとされ，古くから社会心理学の分野で研究されてきた. ステレオタイプは人の基本的な認知プロセスであるカテゴリ化処理において用いられ，対象集団に対するさまざまな情報を提供し，すばやい認識を可能にする一方で，差別や偏見の原因であるともされている.

ステレオタイプの認知への影響は無意識的・自動的になされる．Devine(1989)は，ステレオタイプの影響過程を，活性化と適用の 2 つの過程に分けている．活性化とは，ステレオタイプ対象が存在すれば無意識的・自動的に生じる反応であり，急速で不可避な，意識的なコントロールがとりづらい過程である．一方，適用は意識的・統制的反応の過程であり，活性化されたステレオタイプを時間をかけて意識的にコントロールできるとされている. ステレオタイプ研究では主に適用過程が研究されてきたが, ステレオタイプ影響過程における自動的な活性化の役割が注目され，活性化研究はますます増えてきている(Fazio & Olson, 2003).

活性化の測定手法

活性化過程は無意識的な過程であるため，通常の質問紙などの技法ではなく，意識的なバイアスがかかりにくい手法によって測定される. ステレオタイプ活性化の測定には, IAT(Greenwald, McGhee, Schwartz, 1998)や Sequential Priming Task (Fazio, Jackson, Dunton, & Williams, 1995)などが用いられる(e.g., Blair, 2002; 本報告書 I も参照)．これらは実験の目的に気づかれにくく，意識的な統制が入りづらい課題である.

ステレオタイプ活性化パラダイムは，特定の概念の活性化が，関連する概念へのアクセシビリティを高めることを仮定している．たとえば黒人概念の活性化は,「黒人」に関連する「暴力的」へのアクセシビリティを高める. アクセシビリティが高まった概念は後の課題で用いられやすくなる．ステレオタイプ活性化測定法のひとつには Sequential Priming Task がある．Sequential Priming Task は，プライム刺激とターゲット刺激が連続して提示され，ターゲット刺激に対して語彙判断などを求める課題である(Fazio & Olson, 2003)．プライム刺激とターゲット刺激に意味的な関連がある場合，プライム刺激はターゲット刺激へのアクセシビリティを増加，すなわち

概念を活性化させ，判断を促進させる．たとえば，女性に関連する刺激がプライムとして提示された場合，「女性」概念が活性化し，女性に関連する「母性」や「やさしい」への反応に要する時間が短くなる．Sequential Priming Task ではターゲット刺激のカテゴリも複数設定できるため，プライム刺激の多面的な理解も可能である．さらに，自動的なステレオタイプ活性化に，ポジティブやネガティブなどの感情価のような内容を含めて検討することができる．多くの研究は，ステレオタイプはポジティブやネガティブな感情価を持つことを指摘しており(e.g., Gaertner & McLaughlin, 1983; Dovidio & Gaertner, 1986)，ステレオタイプ活性化研究においても，感情価を含めた検討がなされるようになってきている(e.g., Wittenbrink, Judd & Park, 2001).

自己高揚動機とステレオタイプ活性化

ステレオタイプ活性化過程は，刺激があれば必然的に生じる自動的な過程であり，その影響は統制不可能で不可避といわれてきた．しかし近年，ステレオタイプ活性化が状況要因によって変化しうるといわれるようになってきている(Blair, 2002; Kunda & Spencer, 2003)．特に Kunda and Spencer(2003)はステレオタイプ活性化に対する動機の役割を指摘し，ステレオタイプは，動機の存在で，たとえ刺激が存在したとしても自動的に活性化する場合やしない場合があるとしている．自動的なステレオタイプ活性化と状況要因との関連については批判もあるが(Bargh, 1999)，多くの研究はステレオタイプに及ぼす状況による影響を見出している．本研究では，ステレオタイプ活性化と状況要因との関連について検討するために，自己高揚動機を取り上げる．

自己高揚動機とステレオタイプ活性化はなぜ関連するのか．その理由として，人は自尊心を維持・高揚するよう行動するという自己高揚動機をもち，自尊心を高める目的で，自己の所属する集団の価値を高めようとすることが指摘されている(e.g., Fein & Spencer, 1997; Fein, Hoshino-Browne, Davies, & Spencer, 2002)．自集団がポジティブな価値を持てば，所属している自己もポジティブな価値を得ることができるし，他集団のネガティブ視によって相対的に自集団の価値を高めることもできる．そのような自集団にとって有利な社会的比較がステレオタイプに反映され，自集団にはポジティブな，他集団にはネガティブなステレオタイプ属性が付与されやすくなる．

自己高揚動機が顕著に現れるのは，自尊心が脅威にさらされたときである．脅威にさらされたとき，自分の価値を高揚させるために相手の評価を下げようと動機づけられることがある(e.g., Turner, Oakes, Haslam, & McGarty, 1994)．先述の自集団有利なステレオタイプ活性化はこのような状況で特に顕著に起きると考えられる．Spencer, Fein, Wolf, Fong, and Dunn (1998)は，ネガティブ・フィードバックをうけた白人参加者が黒人ステレオタイプを活性化させることを見いだしている．Spencer et al.(1998)が指摘しているように，この結果は他集団へのステレオタイプを活性化させ脅威に対処しようとする自己高揚動機の現われと考えることができよう．このように自己高揚動機は自動的なステレオタイプ活性化過程に影響を持つ．そして，その影響の方向性は，自集団をポジティブ，他集団をネガティブにという，自集団を有利とするようなものである．ステレオタイプの自動的活性化が動機の存在によって異なった生起をすることは，ステレオタイ

プの活性化は固定されたものではないこと，また，活性化される内容が変化しうることを示している(e.g., Sinclair & Kunda, 1999).

本研究の目的

ステレオタイプ活性化は自己高揚動機によって変化しうるという指摘を受け，本研究では，男女間の競争状況における男性参加者のジェンダー・ステレオタイプの自動的活性化を検討した．競争状況が偏見を強めるという指摘は古くからなされ, 競争状況のような集団間の利害の対立は, 対立する集団への敵意的感情や偏見・差別を生み出すと指摘されてきている(e.g., Allport, 1954/1974)．古典的な実験として，Sherif and Sherif(1969)は，集団間の競争状況を設定したところ，相手の集団への敵意的な行動が増加した．このように，他集団との競争状況は自集団の資源や価値への脅威を生み出すため偏見が生じるとされる．このような状況においては，他集団のネガティブな，自集団のポジティブなステレオタイプが活性化されると考えられる．

今回は実験参加者を男性として，男女間の競争状況を設定し，自尊心の脅威下において男性はジェンダー・ステレオタイプをより活性化させるかを検討した．男女間の競争状況で男性は脅威を感じ，ジェンダーに関するステレオタイプを活性化させるだろう．脅威状況においては他集団のネガティブな，自集団のポジティブなステレオタイプが活性化されるため，女性のネガティブなステレオタイプ，男性のポジティブなステレオタイプが活性化されるだろう．

状況要因の操作として，男女を 1 対 1 で対面させ，競争があることを予期させる場面を設定した．競争時や競争後ではなく，競争の予期としたのは，競争の勝敗などの結果を意識させないためである．この“男女間で競争を予期する状況(以下，女性競争あり群と表記)”と比較するために，“男性間で競争を予期する状況(以下，男性競争あり群と表記)”，“男女で対面しているが競争は予期しない状況(以下，女性競争なし群と表記)”も設定した．男性間の競争状況を設定したのは，競争自体が自尊心の脅威となる可能性を検討するためである．また，女性と対面しているだけでステレオタイプが活性化することもあるため, 男女で対面しているが競争は予期しない状況と比較した．

今回の実験では，ジェンダーをより意識させる目的で，予期させる競争の課題を男性が得意なものと教示した．Rudman and Fairchild(2004)は，自分の性別にとって得意な課題で負けた場合に相手の性別の人に攻撃的な行動が増えることを見いだしている．このことから，男性が得意な状況であると教示することにより, 男性は女性に負けたくないとより意識するようになると考えた．ただし，本実験はこの教示があるため，単純な男女間での競争状況とは異なっている可能性があろう．

本研究では，ステレオタイプ活性化手法として Sequential Priming Task を用いる．これは男性・女性それぞれに対して，活性化されるステレオタイプの内容を詳細に調べるためである．そこで，プライムとして男性名と女性名と無関連刺激を提示し，ターゲットとして男性関連語・女性関連語というカテゴリだけでなく，ポジティブ・ネガティブという感情価のカテゴリを含む語を提示した．女性との競争を予期した男性は，脅威下におかれるため，男性に関連したポジティ

ブなステレオタイプ, 女性に関連したネガティブなステレオタイプを活性化させると予測できる. このことから，女性と競争を予期した男性は，男性名がプライムとして提示された場合，男性関連ポジティブ語への反応時間が，女性プライムや無関連プライムの場合よりも速くなり，また，女性名がプライムとして提示された場合，女性関連ネガティブ語への反応時間が，男性プライムや無関連プライムの場合よりも速くなるだろう，という仮説を設けた.

上記仮説を検証する本実験に先立ち, ニュートラルな状態でのステレオタイプ活性化はどのような内容になっているかを確認するために，状況要因を入れない Sequential Priming Task によるステレオタイプ活性化を測定するための予備実験を行った.

予　備　実　験

方法

実験参加者

一般教養の「心理学」を受講している首都大学東京および東京都立大学男子大学生 12 名．実験に関するレポートを書くことにより，成績に得点が与えられることが予告されていた.

ステレオタイプ活性化の測定

ジェンダー・ステレオタイプの活性化の測定は Sequential Priming による語彙判断課題を用いた.

装置　実験に使用した装置は富士通製のノートパソコン FMV BIBLO 36NE/L であり, 刺激呈示には Superlab を用いた.

刺激　刺激に用いられた文字のフォント 50 ピクセルの白字で統一した．刺激は背景が黒のスクリーンの中心に提示された.

ターゲット刺激　語彙判断に用いられたターゲット刺激は 72 語の単語と 72 語の非単語だった. それぞれの単語・非単語は 1 人の参加者に対して 1 回ずつ提示された. 単語は野寺・唐澤(2004), 大瀬・滝川(2005)を参考に作成した.

単語のカテゴリは，性別(男性関連語 vs.女性関連語)と感情価(ポジティブ語 vs.ネガティブ語)の 2 つの次元をクロスさせた 4 種類のカテゴリに分かれていた．それぞれのカテゴリごとに 18 語あった. 使用した単語は，男性関連ポジティブ語は，しぶい，かっこいい，ダンディー，有能，筋肉質，頼りがい，まじめな，けじめをつける，ハンサム，責任感，勇敢な，寛大な，たくましい，スポーツ，冒険，行動力，力強い，雄々しい，の 18 語，男性関連ネガティブ語は，はげ頭，だらしない，カツラ，喫煙，毛深い，いい加減，しつこい，むさくるしい，オタク，無責任，横柄な，冷たい，ビール腹，セクハラ，暴力，遊び人，腹黒い，亭主関白，の 18 語，女性関連ポジティブ語は，きれい，おだやかな，ファッション，母性，献身的，世話好き，かわいい，おくゆかしい，ドレス，家庭的，美しい，従順な，おしとやか，グラマー，美人，魅力的，華やか，色気のある，の 18 語，女性関連ネガティブ語は，ずるい，たまのこし，ヒステリック，売春，

打算的，お茶くみ，ぶりっこ，おせっかい，ババア，感情的，泣き虫，嫁いびり，みだらな，ホステス，嫉妬，水商売，怖がり，こびを売る，の 18 語であった．

非単語には上記の単語に対応させた無意味つづりを作成した．対応させたのは語の長さ，語の最初の音，漢字仮名使い，漢字の使用頻度であった．漢字の使用頻度の調整は天野・近藤(1999)の NTT データベースを参考にした．

プライム刺激　ターゲット刺激の提示直前にプライム刺激，男性の名前，女性の名前，「****」を提示した．男性の名前と女性の名前はジェンダー関連プライム，「****」は無関連プライムである．名前は明治安田生命の年代別名前ランキングを参考に，昭和 57～63 年に生まれた人で多かった名前を選んだ. 名前を漢字にした場合には何らかの意味の混入があると考えられるので名前はひらがなで提示した．男性の名前は，だいすけ，たつや，けんた，たくや，かずや，とおる，すぐる，ゆうた，なおき，てつや，の 10 語，女性の名前は，さおり，まなみ，さちこ，めぐみ，かおり，あいこ，あゆみ，ともみ，ゆうこ，みほ，の 10 語であった．「****」はジェンダーに無関連な刺激であり，ジェンダー関連プライムの反応時間のベースラインとして用いた．プライム刺激は 1 人の参加者に対して繰り返して使用された．

語彙判断課題の実施　語彙判断課題は，スクリーン上に提示された文字列が現実にある単語か現実にある単語ではないかを判断し，対応するキー(「J」，「F」キー)を押し回答する課題であった．語彙判断課題の 1 試行は，まずスクリーン上に注視点(「+」)が 700ms 提示され，直後にプライム刺激が 250ms 提示され，100ms の間隔をおいて文字列が提示されるというものであった．参加者には，提示される人物の名前または「****」を注目し，直後に提示される文字列が単語かどうかをキー押しで回答させた．キー押しをすると次の試行に移行し，1000ms の試行間隔をおいて次の試行となった．

本試行セッションに入る前に練習セッションが 2 セッション行われた．まず語彙判断に慣れてもらう目的でプライムを用いない語彙判断課題が 8 試行行われ, 次に本試行セッションと同様の形式でプライム刺激を用いた語彙判断課題を行った. 練習セッションで用いられた単語は本試行セッションでは用いなかった．また本試行セッション開始から 6 試行は練習試行を行った．

本試行セッションは 144 試行であった．本試行セッションは 48 試行ごとに区切られた 3 つのブロックに分かれていて，それぞれのブロックの終了ごとに休憩が挿入されている．休憩時間はそれぞれで長さを調節してもらった．

それぞれのターゲット語は 1 人の参加者に対して 1 回ずつしか用いなかったため, それぞれの単語は 1 人の参加者ですべてのプライムに対応はしていなかったが, 下記の方法によりそれぞれのターゲット語はすべてのプライムと対応させた. ターゲット語へのプライム 3 カテゴリの組み合わせにはラテン方格を用い, プライムとターゲット語の組み合わせが異なる実験スクリプトを 3 パターン作成した．1 人の参加者に対して，各カテゴリのターゲット語 18 語は，各 6 語がそれぞれのプライムに割り当てられた. ターゲット語の提示は, 参加者ごとにランダムに提示された.

手続き

実験は実験参加者 2〜3 人ごとに行った．実験参加者はノートパソコンが置かれた机に着席した．机は仕切りによって区切られていた．実験のはじめに実験中に参加者が行うことを全て説明し，実験参加への承諾を取得した．

実験の目的として，単語判断に関連する思考プロセスの検討と告げ，Sequential Priming による語彙判断課題を行わせた．

課題が終わると実験参加者は本当の目的を告げられ，ディブリーフィングを受け，再度のデータの使用を承諾するかの確認を受けた．

結果

除外項目の扱いと分析方法

ジェンダー・ステレオタイプの活性化を検討するために，語彙判断課題の反応時間を用いた．誤反応が 20%を超えた項目「亭主関白」「嫁いびり」「たまのこし」の 3 項目は分析から除外した．誤反応も分析から除外した．除外語を除いた語の中での誤反応率は 3.4%であった．そのため，除外語を除いた語の中で，分析に使用した有効なデータの反応率は 96.6%であった．除外後の反応時間の最大値は 1202ms，最小値は 361ms であった．データの歪度を調整するために，反応時間に対して対数変換を施した．この値を使って参加者ごとに，プライム×ターゲット性別×ターゲット感情価の各 12 条件の平均値を算出した．

反応時間の分析

反応時間の平均値を従属変数として，3×2×2(プライム(男性 vs.女性 vs.無関連)×ターゲット性別(男性関連語 vs.女性関連語)×ターゲット感情価(ポジティブ語 vs.ネガティブ語))の分散分析を行った．要因はすべて参加者内要因である．プライムの主効果が有意であり($F(2, 22)=5.369$, $p<.05$)，男性プライム($M=2.746$)のときに無関連プライム($M=2.767$)よりも反応時間が速かった($p<.05$)． ターゲット性別の主効果が有意であり($F(1, 11)=11.084$, $p<.01$)，男性関連語($M=2.749$)のときに女性関連語($M=2.760$)よりも反応時間が速かった．ターゲット感情価の主効果が有意であり($F(1, 11)=31.206$, $p<.01$)，ポジティブ語($M=2.743$)のときにネガティブ語($M=2.767$)よりも反応時間が速かった．

本パラダイムにおいて，ステレオタイプの活性化測度として重要となるのはプライムとターゲット要因の交互作用である．しかし，プライム×ターゲット性別，プライム×ターゲット感情価，プライム×ターゲット性別×ターゲット感情価はいずれも有意とはならなかった($Fs<1.750$, *ns*)．ただし，予備実験は統制条件におけるデータのパターンを把握するために行われたものであるため，それぞれのターゲット語カテゴリごとにプライムによる影響パターンを詳細に分析した．

性別×感情価の関連　性別×感情価というターゲット語のカテゴリそれぞれに対して，プライム(男性 vs.女性 vs.無関連)による 1 要因の分散分析を行った．男性関連語ポジティブでは，プライムの主効果が有意であり($F(2, 22)=10.216$, $p<.01$)，男性プライム($M=2.723$) のときに無関連プラ

イムより(M=2.761)も反応時間が有意に速く(p<.01), 有意ではないが女性プライム(M=2.740)よりも速いパターンが見られた(Figure 1). 男性関連語ネガティブ・女性関連語ポジティブ・女性関連語ネガティブにおいてはいずれもプライムの主効果は有意とはならなかった(Fs<1.274, ns).

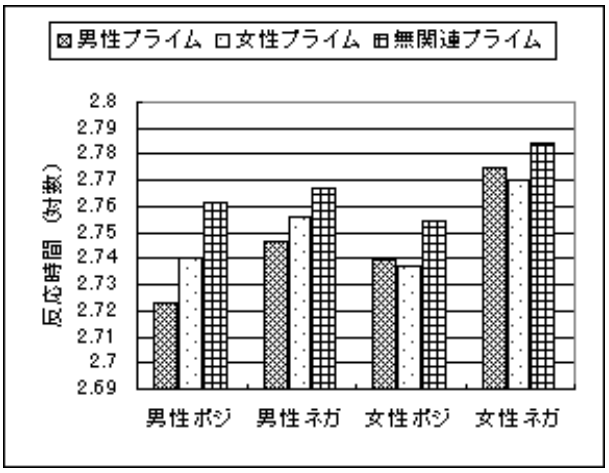

Figure 1 プライム性×ターゲット性×ターゲット感情価

考　察

男性関連語ポジティブ項目はプライムが男性のときに反応が速かった．この結果から，男性は女性が目の前におらず競争状況ではないニュートラルな状況では, 男性と男性に関連するポジティブな概念が結び付いていると考えられる．これらの傾向をニュートラルな状態として，状況要因を入れた場合と照らし合わせて見ることは重要だろう．

ただし，予備実験において，プライムとターゲット要因の交互作用効果に有意な効果が得られなかった点は考慮する必要がある．これは，サンプルの小ささの影響もあるが，プライムの操作が弱かったことが原因であった可能性もある．Sequential Priming Task ではプライムとして「男性」「女性」のような直接的なジェンダーラベルを提示することが多いが，今回は「男性・女性の名前」という，ある意味非直接的なプライムを用いていた．本実験では，状況要因によるジェンダー・ステレオタイプの活性化の差をみる目的があったため，状況間の差が検出されやすいように，プライムの効果があまり強くならないような刺激を用意した．そのため，ジェンダー概念の活性化は比較的小さく，プライムの効果量が小さかったのだろう．

この予備実験における結果を考慮し, 本実験においてそれぞれのターゲット語へのパターンが状況ごとにどのようになっているかを検討した．

本　実　験

男性が得意な課題において男女間での競争を予期した男性の，ジェンダー・ステレオタイプの活性化を検討した．実験計画は，3×2×2×3(プライム(男性 vs.女性 vs.無関連：参加者内要因)×ターゲット性別(男性関連語 vs.女性関連語：参加者内要因)×ターゲット感情価(ポジティブ語 vs.ネ

ガティブ語：参加者内要因)×状況(男性競争あり群 vs.女性競争あり群 vs.女性競争なし群：参加者間要因))の混合要因計画である．仮説としては，女性との競争を予期した男性は，男性がプライムとして提示されたときの男性ポジティブ語への反応時間が他のプライムよりも速くなり，また女性がプライムとして提示されたときに女性ネガティブ語への反応時間が他のプライムよりも速くなるだろう，を設けた．

方法

実験参加者

東京都内の男子大学生 36 名と女子大学生 24 名．レポートを提出することにより一般教養科目「心理学」の授業の加点されることが予告されていた．授業を履修していない学生には¥1,000 の報酬が与えられた．分析対象者は男性 36 人である．男性競争あり群・女性競争あり群・女性競争なし群に，それぞれの群にランダムに 12 名ずつ割り当てた．

手続き

2 名の実験参加者を同時に実験に参加させた．実験参加者の性別は実験前にチェックしており，男性と女性の組み合わせ 24 組，男性と男性の組み合わせ 6 組を作っていた．実験室では実験参加者 2 人は机を挟んで対面に座った．参加者の前にはノートパソコンが置かれていた．

カバーストーリーとして，実験の目的を思考能力テストの検討と説明した．実験には思考能力テストとパーソナリティ測定の 2 つの作業があり，1 番目にパーソナリティ測定，2 番目に思考能力テストがあると説明した．パーソナリティ測定はステレオタイプ活性化測定であるが，参加者には「思考能力テストに関連する性格の個人差を測定するもの」と説明した．思考能力テストは実験参加者にテストの存在を予期させるためのダミーであり，思考能力テストは実際には行われなかった．次に，思考能力テストの説明を行った．このテストはパソコン上で行われる文字回転課題であり，画面上に提示されるアルファベットが正しい文字か鏡映文字かを判断し，対応したキーを押すよう，実験参加者には教示した．テストが実際にあると参加者に信じさせるため，練習課題と称する文字回転課題を 4 試行行わせた．4 試行の練習が終わると，「思考能力テストの課題には図形認知がかかわっており，図形認知は男性が得意なものである」と教示した．

競争の操作　男性競争あり群は男性と男性の組み合わせ 6 組であり，「思考能力テストは対面している人との競争課題で，どちらが課題を速く終えることができるか，正確に回答できるかを競ってもらいます」と教示した．それぞれの参加者のデータは独立なものとして分析した．男性と女性の組み合わせ 24 組を，女性競争あり群と女性競争なし群各 12 組に割り振った．女性競争あり群では，男性競争あり群と同様の教示を行った．女性競争なし群に対しては競争に関しての教示を行わなかった．この教示が終わると，思考能力テストは後にあると説明してステレオタイプ活性化測定に移った．

ステレオタイプ活性化の測定　パーソナリティ測定と称してステレオタイプ活性化の測定を行った．方法は予備実験と同様であった．

ステレオタイプ活性化の測定後, 実験参加者にはいくつかの項目に回答させた(appendix 参照). その中には操作チェックの項目が含まれていた．操作チェックには質問項目の Q1「これから行う思考能力テストでは相手の人に勝ちたいと思う」が対応していた. これは競争の操作によって, 相手に勝ちたいという意識が変化するか確認するためである. 操作チェックを含む質問は質問紙で行われ，10 項目の質問に対して 7 段階(1:まったくそう思わない～7:非常にそう思う)で回答させた．そのうち 2 項目(Q5, Q6)は群ごとに質問を変えている項目であった.

質問紙の回答後, 実験参加者には本当の目的を告げ, ディブリーフィングを行った. その際に, 再度データの使用を承諾するかどうか確認を行った.

結果

操作チェック

Q1 の「これから行う思考能力テストでは相手の人に勝ちたいと思う」の回答に対して，状況の１要因の分散分析を行ったところ, 有意な効果は見られなかった ($F(2, 33)=1.429$, *ns*). このため, 操作は十分に成功したと言えないであろう．しかし，男性競争あり群(M=5.75)や女性競走あり群(M=5.83)が，女性競争なし群(M=5.08)よりも高いという方向性があることや，サンプルの小ささを考慮し，ある程度の操作の効果はあったと考えることはできるだろう.

ステレオタイプ活性化

除外項目の扱いと分析方法　ジェンダー・ステレオタイプの活性化を検討するために，語彙判断課題の反応時間を用いた．誤反応が 20%を超えた項目「亭主関白」「嫁いびり」「たまのこし」の 3 項目は分析から除外した．また，誤反応は分析から除外した．除外語を除いた語の中での誤反応率は 2.6%であった．そのため，除外語を除いた語の中で，分析に使用した有効なデータの反応率は 97.4%だった．除外後の反応時間の最大値は 1473ms，最小値は 340ms であった．データの歪度を調整するために, 反応時間に対して対数変換を施した．この値を使って参加者ごとにプライム×ターゲット性別×ターゲット感情価の各 12 条件の平均値を算出した.

反応時間の分析　反応時間の平均値を従属変数として，3×2×2×3(プライム(男性 vs.女性 vs.無関連)×ターゲット性別(男性関連語 vs.女性関連語)×ターゲット感情価(ポジティブ語 vs.ネガティブ語)×状況(男性競争あり群 vs.女性競争あり群 vs.女性競争なし群))の混合要因の分散分析を行った．状況要因のみが参加者間要因で，残りの要因は参加者内要因であった．プライム×ターゲット感情価においては球面性の仮定が支持されなかった($p<.05$)ため Huynh-Feldt で自由度の調整を行った．プライムの主効果が有意であり($F(2, 66)=6.497$, $p<.01$)，男性プライム($M=2.742$)と女性プライム($M=2.742$)のときに無関連プライム($M=2.754$)よりも反応時間が速かった(ともに $p<.01$)．ターゲット性別の主効果が有意であり($F(1, 33)=61.783$, $p<.01$)，男性関連語($M=2.737$)のときに女性関連語($M=2.754$)よりも反応時間が速かった．ターゲット感情価の主効果が有意であり($F(1, 33)=61.442$, $p<.01$)，ポジティブ語($M=2.735$)のときにネガティブ語($M=2.757$)よりも反応時間が速かった．ターゲット性別×ターゲット感情価の交互作用が有意であったため($F(1,$

33)=14.988, p<.01)，この効果を詳細に検定するために，ターゲット性別ごとにターゲット感情価による 1 要因分散分析を行ったところ, 感情価による主効果は, 男性関連語(F(1, 33)=7.770, p<.01)より女性関連語(F(1, 33)=82.889, p<.01)のときに大きかった．男性関連語の場合，ポジティブ語(M=2.728)のときにネガティブ語(M=2.739)よりも反応時間が速かったが，女性関連語の場合の，ポジティブ語(M=2.736)とネガティブ語(M=2.768)の同様の傾向の反応時間の差のほうが大きかった．また，プライム×ターゲット性別の交互作用(F(2, 66)=2.577, p<.10)，が有意傾向であったが, プライム×ターゲット性別×ターゲット感情価の交互作用(F(2, 66)=5.801, p<.01)が有意であることから制限を受ける．状況を含む交互作用効果では，プライム×ターゲット感情価×状況の交互作用のみが有意であった(F(3.731, 61.562)=2.860, p<.05).

プライム×ターゲット性別×ターゲット感情価の効果を検討するため, ターゲット性別×ターゲット感情価ごとに, プライムの効果を見る 1 要因の分散分析を行った. 結果を Figure 2 に示す. 男性ポジティブ語ではプライムの効果が有意で（F(2, 70)=12.166, p<.01）, 男性プライム(M=2.722)のときに無関連プライム(M=2.745)より反応時間が速かった．男性ネガティブ語ではプライムの効果が有意傾向で（F(2, 70)=2.449, p<.10），男性プライム(M=2.730)のときに無関連プライム(M=2.745)より反応時間が速いパターンが見られた．女性ポジティブ語ではプライムの効果は見られなかった（F(2, 70)=0.039, p<.01）. 女性ネガティブ語ではプライムの効果が有意傾向で（F(2, 70)=2.910, p<.10），女性プライム(M=2.758)のときに無関連プライム(M=2.772)より反応時間が速い傾向にあった(p<.10).

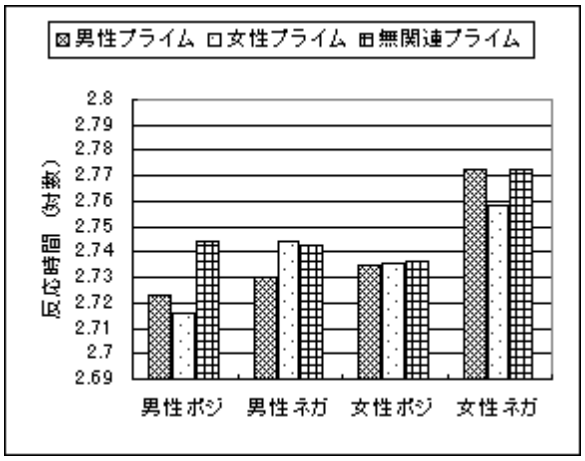

Figure 2 **プライム×ターゲット性×ターゲット感情価**

本実験は，状況とステレオタイプ活性化との関連を検討しているため，重要なのはプライムの要因とターゲットの要因と状況の要因を含む交互作用効果である．これに該当するのは，プライム×ターゲット感情価×状況の交互作用効果であり，この結果を詳細に検討するために，ターゲット感情価×状況ごとに，プライムの効果を見る 1 要因の分散分析を行った．結果を Figure 3, 4 に示す.

ポジティブ語では, 女性競争あり群においてプライムの効果が有意で（F(2, 22)=3.856, p<.05），

女性プライム(M=2.705)のときに無関連プライム(M=2.726)よりも反応が速かった(p<.05). 女性競争なし群においてプライムの単純主効果が有意であり（F(2, 22)=6.198, p<.01），男性プライム(M=2.717)のときと女性プライム(M=2.721)のときに無関連プライム(M=2.742)より反応が速かった(ps<.05). しかし，男性競争あり群では有意ではなくプライムに関連する効果は見られなかった（F(2, 22)=0.074, ns）. ネガティブ語では，男性競争あり群においてプライムの単純主効果は有意ではなかったが（F(2, 22)=2.520, p＝.10），女性プライム(M=2.762)が無関連プライム(M=2.778)よりも速くなる傾向(p<.10)があった. 女性競争あり群・女性競争なし群では，プライムの単純主効果は見られなかった(Fs<1.040, ns).

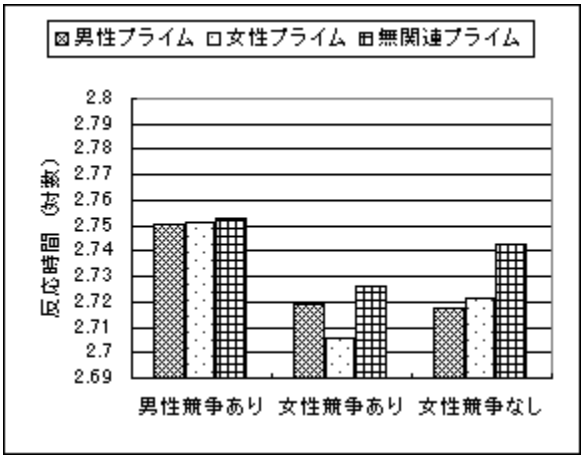

Figure 3 ポジティブ項目

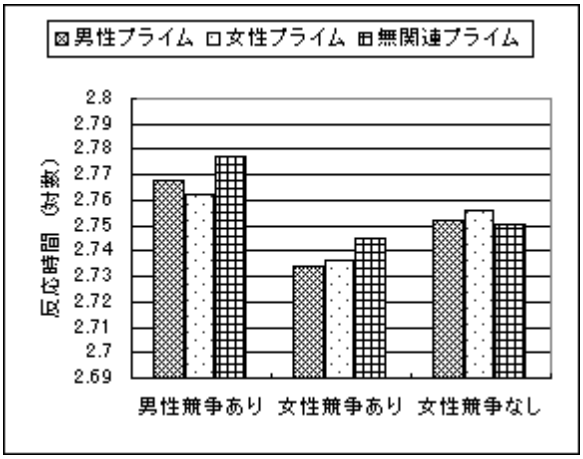

Figure 4 ネガティブ項目

質問項目の分析　質問項目の Q4「思考能力テストでは前にいる人より早く反応できると思う」について, 条件要因による 1 要因の分散分析を行ったところ, 主効果が有意であり(F(2, 33)=2.783, p<.05)，女性との競争を予期した場合(M=4.83)に，男性との競争を予期した場合(M=3.83)や，女性と対面して競争を予期しない場合(M=3.58)よりも, 対面者より速く反応できると思うという傾向があった.

考察

本実験では女性と競争を予期した男性は，自尊心への脅威が生じるために，女性のネガティブなステレオタイプや男性のポジティブなステレオタイプが活性化されるという仮説を持っていた．本実験の結果と予備実験のニュートラルな状態での結果を照らし合わせて考察を加えたい.

女性競争あり群の結果を見ると, 予備実験のニュートラルな状態で生じていた男性プライム時の男性的ポジティブ概念の活性化が消失していた．これは脅威がある場合に，自集団に対してポジティブ概念を活性化させるという仮説に反している．また，女性競争あり群においては，女性プライム時にポジティブな概念が活性化していた．これも脅威があるときに，他集団に対するネガティブな概念を活性化させるという仮説とは反している.

男性との競争状況では女性プライムはネガティブな概念を活性化させる傾向にあった．また，予備実験で見られた男性プライム時の男性的ポジティブ概念の活性化も消失していた．ネガティブ概念と女性との結びつきは，他集団へのネガティブステレオタイプ化と捉えることができるだろう．仮説とは異なるものではあるが，参加者にとって男性との競争が自尊心への脅威と捉えられたと考えればこの効果は説明できるであろう．また，男性との競争状況であるため，男性全体を自集団と捉えることができなくなったため，男性プライム時の男性的ポジティブ概念の活性化も消失したのであろう．

女性競争なし群の結果は予備実験の状況要因の操作のない場合の結果とほぼ一致したものであった．

女性との競争を予期した男性は，男性が優位となるようなジェンダー・ステレオタイプを活性化させるという仮説どおりの効果は現れなかった．女性競争あり群において，女性のネガティブなステレオタイプが活性化されるという効果はみられず，ポジティブな概念が活性化しており，さらに，統制群でみられていた男性に対するポジティブなステレオタイプの活性化が抑制されるという効果が見られた．これは男性とポジティブな概念との結びつきを弱めることになり，むしろ男性とっては不利な概念をもつことになってしまうだろう．なぜこのような活性化パターンになったのだろうか．ひとつの理由として考えられるのは，女性との競争状況が脅威とならなかった可能性である．今回はすべての状況で，課題は男性が得意なものと教示した．そのような教示を受けたため，男性は女性との競争を想像しても，自分が有利だから負けることはないと安心したのではないだろうか．負けないと安心していれば，脅威は感じないだろう．操作チェックにおいて，女性競争あり群は他の群より，対面相手より競争で速く反応できると回答していた．女性によって自分の優位が脅かされるとは感じなかったため，自尊心への脅威が生起せず，女性のネガティブなステレオタイプが活性化しなかったのではないだろうか．

そのような状況で，両面価値的な偏見・ステレオタイプ(Glick & Fiske, 1996, 2001)が生じた可能性がある．今回は男性が優位，女性が不利となるような状況を作っていた．自分が勝てると自信がある状況だったので，女性は下位にあることが自明と感じたのではないだろうか．システム正当化(Jost & Banaji, 1994)の考えでは，人は自分の所属するシステムを肯定するような概念を好む．有利な状況では，システム上の上位者はシステムを肯定するような下位の対象に好意的な偏見を向けることが指摘されている．本実験状況では，参加者は男性有利なシステムを支持するような好意的な対象として女性を捉えるようになったのではないだろうか．この結果として，女性に対してはネガティブというよりもむしろポジティブな概念が結び付けられ，女性をプライムするとポジティブ概念の反応が速くなったと解釈することができよう．男性をプライムしてもポジティブな男性ステレオタイプが活性化しなかったのは，女性をより好意的に評価するための対比的な概念の活性化と解釈することも可能であろう(Sinclar & Kunda, 1999)．これらの考えが正しければ，これらの効果は男性が得意な課題という教示をすべての実験群に用いたために生じと考えることができ，この解釈が妥当であるかどうかを判断するためには，課題の特徴に関して教示

を与えない状況や男性の方が不得意であると教示する状況と比較し, それぞれの条件で異なるステレオタイプ活性化が生じるかを検討する必要があるだろう.

本研究の結果は仮説を支持するものではなかったが，男女間の競争にかかわる状況によって，活性化するジェンダーにかかわるステレオタイプの内容が異なることは興味深い結果であり, 今後は上記指摘した点を踏まえ, 男女間の競争状況ではどのような心理プロセスが働くのか理論的に洗練させ，さらなる実証研究を行っていく必要であろう.

引 用 文 献

Allport, G. W. (1954/1974). *The nature of prejudice*. Cambridge, MA: Perseus Books.

天野成昭, 近藤公久　編 (1999).　NTT データベースシリーズ 日本語の語彙特性. 三省堂.

Bargh, J. A. (1999). The cognitive monster: The case against controllability of automatic stereotype effects. In S. Chaiken & Y. Trope (Eds.), *Dual process theories in social psychology*. New York: Guilford.

Blair, I. V. (2002). The malleability of automatic stereotypes and prejudice. *Personality and Social Psychology Review*, 6, 242-261.

Devine, P. G. (1989). Stereotypes and prejudice: Their automatic and controlled components. *Journal of Personality and Social Psychology*, *56*, 5-18.

Dovidio, J. F. & Gaertner, S. L. (1986). Prejudice, discrimination, and racism: Historical trends and contemporary approaches. In J. Dovidio & S. Gaertner (Eds.). *Prejudice, discrimination, and racism,* (pp. 1-34). New York: Academic Press

Fazio, R, H., Jackson, J. R., Dunton, B. C., & Williams, C. J. (1995). Variability in automatic activation as an unobtrusive measure of racial attitudes: A bona fide pipeline? *Journal of Personality and Social Psychology*, *69*, 1013-1027.

Fazio, R. H., & Olson, M. A. (2003). Implicit measures in social cognition research: Their meaning and use. *Annual Review of Psychology*, *54*, 297-327.

Fein, S., Hoshino-Browne, E., Davies, P. G., & Spencer, S. J. (2002). Self-image maintenance goals and sociocultural norms in motivated social perception In S. J. Spencer, S. Fein, M. Zanna, & J. M. Olson (Eds). *Motivated Social Perception*, pp21-44, Lawrence Erlbaum Associates, Inc.

Fein, S. & Spencer, S. J. (1997). Prejudice as self-image maintenance: Affirming the self through negative evaluation of others. *Journal of Personality and Social Psychology, 73*, 31-44.

Gaertner, S. L. & McLaughlin, J. P. (1983). Racial stereotypes: Associations and ascription of positive and negative characteristics. *Social Psychology Quarterly, 46*, 23-30.

Glick, P. & Fiske, S. T. (1996). The Ambivalent Sexism Inventory: Differentiating hostile and benevolent sexism. *Journal of Personality and Social Psychology*, *70*, 491-512.

Glick, P. & Fiske, S. T. (2001). An ambivalent alliance: Hostile and benevolent sexism as

complementary justifications for gender inequality. *American Psychologist*, *56*, 109-118.

Greenwald, A. G., McGhee, D. E., & Schwartz, J. L. K. (1998). Measuring individual differences in implicit cognition: The Implicit Association Test. *Journal of Personality and Social Psychology*, *74*, 1464-1480.

Jost, J. T., & Banaji, M. R. (1994). The role of stereotyping in system-justification and the production of false consciousness. *British Journal of Social Psychology*, *33*, 1-27.

Kunda, Z. & Spencer, S. J. (2003). When do stereotypes come to mind and when do they color judgment? A goal based theoretical framework for understanding stereotype activation and application. *Psychological Bulletin*, *129*, 522-544.

明治安田生命保険相互会社，明治安田生命　名前ランキング 2005, http://www.meijiyasuda.co.jp/profile/etc/ranking/

野寺綾・唐澤かおり (2004). 性別と男女平等主義的態度がジェンダー・ステレオタイプ活性化に及ぼす影響.　人文環境学研究, 2, 9-14.

大瀬幸則・瀧川哲夫 (2005). ステレオタイプ測定における DRM パラダイムの有効性の検討. 日本社会心理学会第 46 回大会論文集, 602-603.

Rudman, L. A., & Fairchild, K. (2004). Reactions to counterstereotypic behavior: The role of backlash in cultural stereotype maintenance. *Journal of Personality and Social Psychology*, *87*, 157-176.

Sherif, M., & Sherif, C. W. (1969). *Social Psychology*. Harper and Raw: New York.

Sinclar, L., & Kunda, Z. (1999). Reaction to a black professional: Motivated inhibition and activation of conflicting stereotypes. *Journal of Personality and Social Psychology*, 77, 885-904.

Spencer, S. J., Fein, S., Wolf, C., Fong, C., & Dunn, M. (1998). Stereotype activation under cognitive load: The moderating role of self-image threat. *Personality and Social Psychology Bulletin*, *24*, 1139-1152.

Turner, J.C., Oakes, P.J., Haslam, S.A. & McGarty, C.M. (1994). Self and collective: Cognition and social context. *Personality and Social Psychology Bulletin*, *20*, 454-463.

Wittenbrink, B., Judd, C.M., & Park, B.（2001). Evaluative versus conceptual judgments in automatic stereotyping and prejudice. *Journal of Experimental Social Psychology 37*, 244–252.

appendix　質問項目

Q1	これから行う思考能力テストでは相手の人に勝ちたいと思う
Q2	思考能力テストの課題は自分にとって得意なものだ
Q3	前にいる人はこれから行う思考能力テストの課題が苦手だ
Q4	思考能力テストでは前にいる人より早く反応できると思う
Q5	前にいる人は女性(男性)だから、思考能力テストではその人より早く反応したい
Q6	前にいる人が女性(男性)なのは気になる
Q7	思考能力テストの結果がどうなるか不安だ。
Q8	これから行う思考能力テストの課題は、男性が得意な課題といいましたが、本当にそうだと思いますか？
Q9	パーソナリティ測定のときに、前にいる人よりも速く課題をやろうと思っていた。
Q10	パーソナリティの測定中に、前の人がどれだけ速く課題をやっているか気にしていた。

Ⅲ．死すべき運命の顕現化が性役割的偏見に及ぼす効果

沼崎　誠

（首都大学東京）

現代の社会情勢は性役割的偏見や差別を無くしていこうとする方向にあり，平成 11 年には男女共同参画社会基本法も公布・施行されている．その中で「男女平等」ということに正面切って反対を唱えることは，少なくなってきている．しかし，現実にはジェンダーに基づいた偏見や差別が若い人の間にも存在することは否定できない．本研究は，世論調査のような単なる質問紙の回答には現れてこない性役割的偏見や差別が，脅威状況においては顕在化してしまうことを明らかにしようとするものである．本研究では，死すべき運命の顕現化（mortality salience: 以下略記するときは MS）が高まると文化的世界観の防衛が高まり，その結果として偏見が強くなるという「存在脅威管理理論（Terror Management Theory：以下略記するときは TMT）」に基づき（e.g., Greenberg, Solomon, & Pyszczynski, 1997; Pyszczynski, Greenberg, & Solomon, 2005; Solomon, Greenberg, & Pyszczynski, 1991），伝統的な意味でのジェンダー・ステレオタイプに一致した女性と不一致な女性に対する日本人男女大学生の脅威状況での偏見について検討した．

ここでは，まず最初に，ステレオタイプと偏見の新しい研究の流れを概観し，次に，存在脅威管理理論を紹介し，存在脅威管理理論に基づき行われた偏見に関わる研究をレビューする．

ステレオタイプと偏見の研究動向

1980 年代以降の社会的認知研究でのステレオタイプに関する研究は，構造や過程を究明することに焦点が当てられていた．しかし，最近，古典的な問題であるステレオタイプや偏見の内容や機能が再度注目されるようになってきている（e.g., Alexander, Brewer, & Herrmann, 1999; Fiske, 1998; Jost & Banaji, 1994）．その流れの中で，社会的認知研究で注目されていた「○○はこうである」という記述的ステレオタイプばかりでなく，「○○はこうあるべきだ」という規範的ステレオタイプにも関心が向けられるようになっている（e.g., Burgess & Borgida, 1999; Glick & Fiske, 2001）．ジェンダー・ステレオタイプに当てはめると，記述的ステレオタイプが男性や女性を特徴づける属性や役割や行動に関する信念であるのに対して，規範的ステレオタイプは男性や女性が従うように期待される属性や役割や行動に関する信念である．そして，記述的ステレオタイプの機能が日常生活における情報の構造化であるのに対して，規範的ステレオタイプの機能は社会における勢力の不平等の正当化にあることが指摘されている（Burgess & Borgida, 1999）．このような集団間の機能の観点から多くのステレオタイプの内容を分析すると，大半のステレオタイプが「温かさ」

と「有能さ」の次元で相関が負になることが主張され，実証的にも示されている（e.g., Fiske, Cuddy, Glick, & Xu, 2002; Glick & Fiske, 2001）．そのため，多くのステレオタイプが，「温かさ」と「有能さ」の次元で，一方がポジティブであれば，他方がネガティブなアンビバレントなものになる．つまり，多くのステレオタイプが「温かいが無能である（家父長的ステレオタイプ）」というクラスターか（例えば，主婦や老人），「有能であるが冷たい（嫉妬的ステレオタイプ）」というクラスター（例えば，ユダヤ人やフェミニスト）に入りやすい．そして，どちらの形態を取るかは社会的地位と競争関係という社会的な構造要因によって決定されることが実証的に示されている（Fiske, et al., 2002）．このようなアンビバレントなステレオタイプという観点を導入することにより，ネガティブな評価をするばかりではなくポジティブな評価をすることも，ステレオタイプの適用や偏見の現れと見る必要性が生じる．女性に対する性役割的偏見に適用した場合，伝統的性役割に一致した女性（e.g., 主婦）に向けられる好意的偏見と，伝統的性役割に不一致な女性（e.g., キャリアウーマン，フェミニスト）に向けられる敵意的偏見の双方に注意を向ける必要があることが指摘されている（e.g., Glick & Fiske, 2001）．

その一方で，ステレオタイプや偏見の内容や機能に焦点が当てられることにより，ステレオタイプや偏見が，ある種の動機付けがなされたときに活性化したり適用されやすくなる現象にも注目が集まっている（e.g., Spencer, Fein, Zanna, & Olson, 2003）．Fein & Spencer (1997)は，研究 1 において，就職者に対してパーソナリティの評価をする状況を用いて，自分の価値ある項目のチェックとのその理由付けを書かせるという自己肯定化の操作を受けた実験参加者では，統制群の参加者で見られたユダヤ人に対する偏見が，低下することを見いだしている．研究 2 では，知能テスト課題においてネガティブなフィードバックを受けるという脅威があった場合には，受けなかった場合に比べ，同性愛者を示唆するような対象人物に対して同性愛ステレオタイプを適用し好意を低下させることを見いだしている．研究 3 では，知能テスト課題においてネガティブなフィードバックを受けた場合，その後ユダヤ人に対してステレオタイプ的評定をする機会が与えられた時には，与えられなかったとき（イタリア人を評定）に比べ，状態自尊心が上昇することを見いだしている．性役割的偏見に関わる研究として，Sinclair & Kunda (2000)は，ネガティブな評価を受けた後では，評価をする人物が女性の場合，男性の場合に比べ，無能であると評定されるが，ポジティブな評価を受けた場合では評価をする人物の性によって能力の評定に差がないことを見いだしている．沼崎・工藤(1995)は，女性と競争をするという潜在的な脅威状況を経験すると，競争とは無関係な女性の評定において，伝統的な規範的ジェンダー・ステレオタイプに不一致なキャリア志向女性に対する仕事仲間としての評価を低下させ，一致する家庭志向女性に対する評価を上昇させることを見いだしている．これらの研究は，ステレオタイプ化や偏見が自己イメージの維持の機能を持っており，自己や内集団に対する脅威があるときに発現しやすいこと示している．

存在脅威管理理論（TMT）

TMT とは，Greenberg とその共同研究者が唱えている，非常に多くの社会的行動を説明するグランド・セオリーである（Greenberg et al., 1997; Pyszczynski et al., 2005; Solomon et al., 1991）．彼らは他の動物と共通して人が持つ特性として「自己保存への本能的傾向」をあげる．そして，他の動物と相違して人が持つ特性として，「高度な知的能力を備え，自己意識が生じ，かつ，自分の傷つけられやすさや不可避である死を認識できる」ことをあげる．彼らによれば，この 2 つの特性から，人は根元的に自己の存在に脅威を感じるので，この脅威を無力化する，生き続けるために必要な潜在的な力を必要とする．そして，これが文化であるとする．彼らによれば，文化とは自然世界を意味の世界（文化的世界観）へと変換するシステムであり，死の気づきによって生じる存在論的不安の緩和という重要な機能を果たす．なぜなら，文化的世界観は，世界は安定的で秩序があり有意味だと示唆するよう人の知覚を組織化する概念や構造を提供し，文化価値基準に適合することは，文字どおりの不死（不死の魂や死後の世界といった精神的概念）や象徴的不死（①自己よりも永続するもの（例えば国家）への同一化，②身体的な死後にも引き続き残る自己の反映物（例えば子孫や金銭））を提供するからである．そして，有意味な世界の価値ある成員であるという知覚から成立するのが自尊心であるとし，自尊心が高いということは文化的世界観に適合していることを意味するという．

TMT は，このように検証困難な進化論的前提をおくが，この前提から実証可能な仮説を生成することができる．2 つの主要な仮説は，不安緩衝仮説（自尊心及び文化的世界観に対する信頼を強化すれば，不安や脅威に対する不安関連行動を低下させるであろう）と MS 仮説（人々に死すべき運命を思い出させれば，自己価値や文化的世界観への信頼の感覚を妥当化しようとする欲求が生じるであろう）である．一神教的世界観を持つ西欧文化圏においては，多くの実証研究が行われ，2 つの仮説は支持されている（Greenberg et al.,（1997）および Pyszczynski, et al.（2005）を参照）．MS 仮説に関して言えば，MS 時には文化的世界観に沿った価値基準に適合しようとする行動が増大すること（e.g., Greenberg, Simon, Porteus, Pyszczynski, & Solomon, 1995; Paulhus & Levitt, 1987; Simon, Greenberg, Harmon-Jones, Pyszczynski, Solomon, Arndt, & Abend, 1997），MS 時には文化的世界観を支持する人や思想への魅力が増大し文化的世界観を侵害する人や思想への反発が増大すること（e.g., Greenberg, Pyszczynski, & Solomon, 1990; Harmon-Jones, Greenberg, Solomon, & Simon, 1996; McGregor, Lieberman, Greenberg, Solomon, Arndt, & Simon, 1998），が特に多くの実証研究によって示されている．しかし，仏教・儒教文化圏でも TMT が適用できるのかについてはほとんど実証研究がない．Heine, Harihara, & Niiya（2002）は，日本人大学生を実験参加者にして，死に関する自由記述を行うという最も典型的な操作をした MS 群では，日本文化を非難する外国人を低く評価するという MS 仮説を支持する結果を報告しているが，その他ではほとんど行われていない．そのため，本研究の目的の一つは，仏教

・儒教文化圏の日本人を実験参加者にしても MS 仮説が実証的に支持されるかを，Heine et al.(2002)と異なった MS の操作および従属変数を用いて検討することにある．

存在脅威管理理論と性役割的偏見

TMT の MS 仮説によれば，死すべき運命を顕現化させると，文化的世界観への信頼の感覚を妥当化しようとする欲求が生じる．この欲求により，世界はこうあるべきであるという信念，つまり，規範的ステレオタイプに対する信頼が強まり，活性化され適用しやすくなることが予測される．この予測を支持する研究として，Schimel, Simon, Greenberg, Pyszczynski, Solomon, Waxmonsky, & Arndt(1999, study 3)は，白人を実験参加者にして，MS の操作を行った群では，統制群に比べ，規範的黒人ステレオタイプに不一致な有能できちんとした黒人に対して敵意を，規範的黒人ステレオタイプに一致した勤勉でなく怠惰な黒人に対して好意を向けることを見いだしている．ジェンダー・ステレオタイプに関する研究として，Schimel et al.(1999, Study 4)は，女性を実験参加者にして，ジェンダー・ステレオタイプと一致した男性または女性の就職志願者と不一致な就職志願者のいずれかの印象を評定させた．その結果，ステレオタイプに一致した志願者では，統制群に比べ MS 群では印象がよく，ステレオタイプに不一致な志願者では有意ではないものの，統制群の方が印象がよいことを見いだしている．これらの研究は，死すべき運命を顕現化させると，規範的ステレオタイプに対する信頼が強まり，活性化され適用しやすくなることが示すものである．しかし，ジェンダー・ステレオタイプや性役割的偏見に適用した研究は，女性参加者を用いた Schimel et al. (1999)のみであり，ジェンダーに関わる問題として重要である男性の女性に対するステレオタイプの適用や性役割的偏見に関しては実証的に検討されていない．

そこで，本研究では，研究 1 においては，これまで検討されていない，死すべき運命の顕現化を行った場合に，男性が女性に対して規範的ジェンダー・ステレオタイプを適用しやすくなり性役割的偏見が生じやすくなるかを検討した．研究 2 では，研究 1 の実施上の問題点を修正したうえで，再度，男性が女性に対して規範的ジェンダー・ステレオタイプを適用しやすくなり性役割的偏見が生じやすくなるかを検討するとともに，女性の社会進出に関する態度（平等主義的性役割観）が，上記効果を調整するかどうかを検討した．研究 3 では，死すべき運命の顕現化を行った場合に，女性が女性に対して性役割的偏見を示すかどうか，そして実験参加者の女性の社会進出に対する態度がこの効果を調整するかどうかを検討した．

研究 1 ：MS が男性が表明する性役割的偏見に及ぼす効果

TMT の MS 仮説から，死すべき運命の顕現性の高まった場合には，規範的ステレオタ

イプが活性化し適用されやすく偏見が生じやすくなることが予測される(Schimel, et al, 1999). 本研究では, Heine et al.(2002)とは異なった操作として, 死に関連する尺度に回答するかどうかにより死すべき運命の顕現化の操作を行った(Rosenblatt, Greenberg, Solomon, Pyszczynski, & Lyon, 1989, Study 6). 統制群に比べMS群では, 規範的ジェンダー・ステレオタイプに一致した女性に対してポジティブな評価（好意的偏見）を, ステレオタイプに一致しない女性に対してネガティブな評価（敵意的偏見）をしやすくなると予測される. 規範的ジェンダー・ステレオタイプに一致するか一致しないかの操作として, 評定対象女性の志向と能力を操作した. 志向としては, キャリア志向か家庭志向かを操作した. 家庭志向女性は伝統的な意味での規範的ジェンダー・ステレオタイプに一致し, キャリア志向女性は不一致な女性であると考えられよう. 先の議論から, MS 群は統制群に比べ, キャリア志向女性に対してよりも家庭志向女性に対してポジティブな評価をするようになるであろうという仮説を設けた. 一方, 能力としては, 高い能力か低い能力かを操作した. 能力の低い女性は規範的ジェンダー・ステレオタイプに一致し, 能力の高い女性は不一致な女性であると考えられよう. 先の議論から, MS 群は統制群に比べ, 能力の高い女性に対してよりも, 能力の低い女性に対してポジティブな評価をするようになるであろうという仮説を設けた.

ポジティブな評価の表明において, アンビバレントなステレオタイプで問題になっていた「温かさ」と「有能さ」の次元をどのように用いるかを明らかにするため, 両方の次元の測度を従属変数に含めた. 評定対象女性の性格を評定させる際に,「温かさ」の次元を測定する「個人的親しみやすさ」に関わる項目と「有能さ」の次元を測定する「社会的望ましさ」に関わる項目を SD 尺度に含め, 上記仮説の検証を試みた. さらに, 従属変数として, 好意に関連する項目も測定し, 仮説の検証を試みた.

方　法

実験計画　死すべき運命の顕現化(MS 群 vs. 統制群)×評定対象女性の志向(家庭志向 vs. キャリア志向)×評定対象女性の能力(高 vs. 低)の参加者間要因計画.

実験参加者　東京都立大学男子大学生 129 名. 1 名は回答途中で体調不良により回答を中断したため分析からはずし, 128 名を分析の対象とした.

死すべき運命の顕現化の操作　MS 群には, 死に関する複数の尺度(e.g., 金児, 1994)から宗教など文化的価値観を含む項目を除いた 32 項目に回答させた(Appendix 1 参照). 統制群には, 自尊心や抑鬱関連感情を含まない感情チェックリスト 31 項目に回答させた.

評定対象女性のタイプの操作　評定対象女性タイプとして, 志向(家庭志向 vs. キャリア志向)と能力(高 vs. 低)を操作した 4 タイプのプロフィールを用意した. 実験参加者には情報を表の形にして呈示した. 家庭志向とキャリア志向を作り出すために, 将来, 仕事に対する態度, 恋人・配偶者に求めるもの, 等の情報を操作した. 好ましさの天井効果を

避けるため，一般的に望ましくない情報も含めた．具体的な志向([家庭志向] vs. [キャリア志向])の操作項目の例を挙げると，将来（[在学中は，旅行とかスキーとか社会にでたらなかなかできないことをたくさんやりたい．卒業したら女の人にふさわしく，結婚して，夫になる人を支えながら，いい母親となって，平凡でも幸せな家庭を作りたい．] vs. [在学中から将来に備えて，会計士資格などの資格をとりたい．女性ももっと社会に出て活躍するべきだと思うので，バリバリ働いて，キャリアアップを目指したい．仕事の支障となるなら，子供は諦めることも考慮している．]），仕事に対する態度（[結婚したら辞める，楽しい環境で楽して働きたい，グループの一員として仕事ができればいい] vs. [何があっても仕事は続ける，培った専門的知識を生かした仕事をしたい，人の上に立って仕事をしたい]），恋人・配偶者に求めるもの（[経済力，優しさ，誠実さ，包容力，リーダーシップ，隠し事はしないで欲しい] vs. [すべてにおいて理解のある人がよい，自分の世界に干渉して欲しくない]）等であった．能力高群と能力低群を作り出すために，学歴，英語に関する資格，仕事に関する資格，等の情報を操作した．具体的な能力([能力高] vs. [能力低])の操作項目の例を挙げると，学歴（[都内某 4 年生国立大学] vs. [都内某短期大学]），語学資格（[英検準 1 級，TOEIC 850 点] vs. [英検 4 級]），仕事に関する資格（[情報処理技術者一種] vs. [特になし]）等であった．

従属変数　性格評定として「個人的親しみやすさ」「社会的望ましさ」「活動性」の次元を含む性格形容詞対 25 項目の SD 尺度に 5 件法で回答させた．好意関連項目として，「好感がもてるか」「魅力的か」「友達として付き合いたいか」「恋人として付き合いたいか」「結婚相手として付き合いたいか」「職場の同僚として働きたいか」「アルバイト仲間として働きたいか」「一緒に作業をしたいか」「恋人として付き合いたいと思われるか」「結婚相手として付き合いたいと思われるか」「知能が高いか」「社会的に適応力があるか」「まわりの人とうまくやっていけるか」の 13 項目に対して，7 件法で回答させた．操作チェックの項目として「能力」と「志向」についても 7 件法で回答させた．得点が高いほど能力が高いことを意味するように得点化し，得点が高いほど家庭志向が強いことを意味するように得点化した．

質問紙の構成　1 枚目は表紙で，2 枚目以降は 3 部構成になっていた．第 1 部では個人差を測定すると称し，3 つの個人差尺度を含めた．最初の 2 つはダミーの対人信頼尺度と友人関係尺度で，3 番目の尺度において死すべき運命の顕現化の操作を行った．MS 群では死に関連する尺度であり，統制群では感情チェックリストであった．第 2 部は，思考心理学の調査と称して，思考課題 3 問が含まれていた．これは，死すべき運命の顕現化の操作は直後よりも死の思考を抑圧した後の方が効果を持つという知見に基づき含めた(Greenberg et al., 1997)．第 3 部は，印象形成の調査と称する，女性のタイプの操作のためのプロフィールと従属変数の測定項目および操作チェック項目を含む質問紙であった．

手続き　講義中に質問紙をランダムに配布した．ただし，死すべき運命の顕現化の操作

に気づかれないように，教室の右半分と左半分に分けて，MS 群の質問紙と統制群の質問紙を配布した．

結　果

分析は，2 × 2 × 2（MS ×志向×能力）の分散分析とその下位分析により行った．

操作チェック　「志向」の評定では，志向の主効果が有意であったが（$F(1, 120)=152.39$, $p<.001$），能力の主効果も有意であった（$F(1, 120)=23.23$, $p<.001$）．前者は操作の意図どおりであったが（$M_{careerr}=1.68$, $M_{home}=4.60$），後者は能力高群（$M=2.63$）に比べ能力低群（$M=3.70$）が家庭志向であると評定されたことによる効果であった．「能力」の評定では，能力の主効果が有意であったが（$F(1, 120)=75.89$, $p<.001$），志向の主効果も有意であった（$F(1, 120)=20.12$, $p<.001$）．前者は操作の意図どおりであったが（$M_{high\ ability}=5.36$, $M_{low\ ability}=3.30$），後者はキャリア志向（$M=4.86$）の方が家庭志向（$M=3.82$）に比べて能力が高く評定されたことによる効果であった．想定外の主効果も認められたが，全ての交互作用効果は有意ではなく，限定はあるものの，操作は成功していたと考えられよう．

性格 SD 尺度　25 項目の性格 SD 尺度に対して因子分析（初期解は主成分解・プロマックス回転）を行った結果，想定していた「個人的親しみやすさ」「社会的望ましさ」「活動性」の 3 因子を抽出した．各因子の因子得点を用いて，2 × 2 × 2 の分散分析を行った[*1]．

「温かさ」の次元を測定する「個人的親しみやすさ」では，能力の主効果と志向の主効果が有意であった（$F(1, 116)=9.29$, $p<.01$; $F(1, 116)=27.92$, $p<.001$）．能力の主効果は能力低群（$M=0.24$）の方が高群（$M=-0.24$）に比べ，志向の主効果は家庭志向（$M=0.43$）の方がキャリア志向（$M=-0.43$）に比べ，個人的に親しみやすいと評定されたことによる効果であった．仮説から予測される，MS ×志向および MS ×能力の交互作用効果は有意ではなかった（$F(1, 116)=1.49$, *ns*; $F(1, 116)=0.07$, *ns*）．

「有能さ」の次元を測定する「社会的望ましさ」では，能力の主効果と志向の主効果が有意であった（$F(1, 116)=61.85$, $p<.001$; $F(1, 116)=11.20$, $p<.001$）．能力の主効果は能力高群（$M=0.54$）が低群（$M=-0.54$）に比べ，志向の主効果はキャリア志向（$M=0.23$）が家庭志向（$M=-0.22$）に比べ，社会的に望ましいと評定されたことによる効果であった．しかしながら，後者の効果は，志向に関する仮説から予測される MS ×志向の交互作用効果が有意であることから制限を受ける（$F(1, 116)=7.96$, $p<.01$）．各群の平均値は Figure 1 に示した．下

*1「個人的親しみやすさ」に因子負荷の高い項目は「暗い-明るい（-.75）」「感じの悪い-感じのよい（-.75）」「愉快な-不愉快な（.70）」等であり，「社会的望ましさ」では「知的な-愚かな（.70）」「きちんとした-だらしのない（.69）」「誠実な-不誠実な（.67）」等であり，「活動性」では「不活発な-活発な（-.85）」「積極的な-消極的な（.77）」「外向的-内向的（.77）」等であった．各因子間の相関は，「個人的親しみやすさ-社会的望ましさ（$r=.39$）」「個人的親しみやすさ-活動性（$r=.39$）」「社会的望ましさ-活動性（$r=.39$）」であった．性格評定 25 項目に欠損値がある実験参加者を除き，性格 SD 尺度の分析は 124 名を分析の対象とした．

位分析を行うと，統制群では家庭志向に比べキャリア志向の女性を社会的に望ましいと評定したが（$F(1, 116)=19.036$ $p<.01$; $M_{careerr}=0.45$, $M_{home}=-0.41$），MS 群では 2 つの志向間で有意な差がなくなっていた（$F(1, 116)=0.53$, *ns*; $M_{careerr}=0.08$, $M_{home}=-0.07$）．また，家庭志向では MS 群の方が社会的に望ましいと評定されたが（$F(1, 116)=5.17$, $p<.05$），キャリア志向では統制群の方が社会的に望ましいと評定されていた（$F(1, 116)=3.03$, $p=.084$）．これらの結果は，志向に関する仮説を支持するものであった．能力に関する仮説から予測される MS ×能力の交互作用効果は有意ではなかった（$F(1, 116)=2.62$, *ns*）．

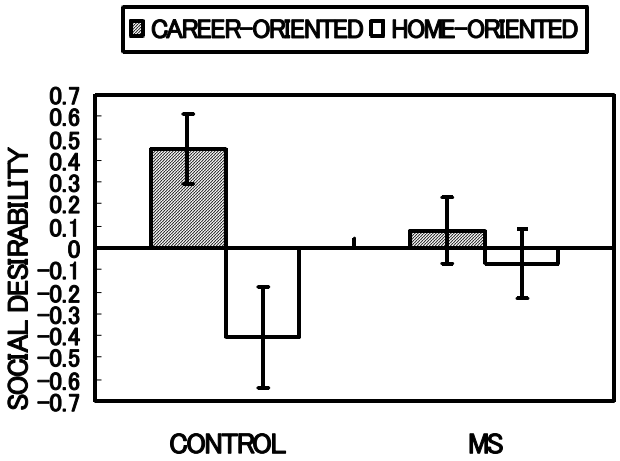

Figure 1 Mean standardized values of participants' ratings for the female target's social desirability as a function of mortality salience and her orientation. Error bars indicate 1 *SE* above and below the mean.

「活動性」では，志向の主効果のみが有意で（$F(1, 116)=124.70$, $p<.001$），キャリア志向（$M=0.73$）の方が家庭志向（$M=-0.69$）よりも活動的であると評定されていた．

好意関連項目　好意関連 13 項目に対して因子分析（初期解は主成分解，プロマックス回転）を行い，「個人的好意」，「仲間・同僚としての好意」，「社会的適応」，「知能」の 4 因子を抽出した．各次元の因子得点を用いて 2 × 2 × 2 の分散分析を行った[*2]．

「個人的好意」では，志向の主効果に有意に近い効果がみられたが（$F(1, 118)=2.93$, $p<=.090$），能力×志向の交互作用効果が有意で制限を受ける（$F(1, 118)=7.09$, $p<.01$）．この交互作用効果は，Figure 2 に示したように，キャリア志向の場合には能力高群（$M=-0.44$）に

*2「個人的好意」に因子負荷が高い項目は「好感（.77）」「魅力（.64）」「恋人（.87）」「結婚（.87）」であり，「仲間・同僚としての好意」では「同僚（.90）」「アルバイト（.89）」「一緒の作業（.90））」であり，「社会的適応」では「社会的適応（.82）」「うまくやっていけるか（.77）」の項目であり，「知能」に因子負荷が高い項目は「知能（.95）」であった．各因子間の相関は，「個人的好意-仲間・同僚（$r=.20$）」「個人的好意-社会的適応（$r=.29$）」「個人的好意-知能（$r=.07$）」「仲間・同僚-社会的適応（$r=.07$）」「仲間・同僚-知能（$r=.39$）」「社会的適応-知能（$r=.02$）」であった．好意関連 13 項目に欠損値がある実験参加者を除き，好意関連項目の分析は 126 名を分析の対象とした．

比べ低群（M=0.13）の方が好まれるが（F(1, 118)=4.78, p<.05），家庭志向の場合には能力低群（M=-0.07）に比べ高群（M=0.34）の方が好まれることによる効果であった（F(1, 118)=3.07, p=.082）．それに加えて，能力に関する仮説から予測される MS ×能力の交互作用効果に有意に近い効果が見られた（F(1, 118)=3.01, p=.085）．この交互作用効果は，Figure 3 に示したように，統制群では能力高群が好意を持たれる方向であったものが（$M_{high\ ability}$=0.22, $M_{low\ ability}$=-0.07），MS 群では能力低群の方が好意を持たれる方向になる($M_{high\ ability}$=-0.26, $M_{low\ ability}$=0.11)ことによる効果であり，弱いながら，能力に関する仮説を支持するものであった．志向に関する仮説から予測される MS ×志向の交互作用効果は有意ではなかった（F(1, 118)=0.13, *ns*）．

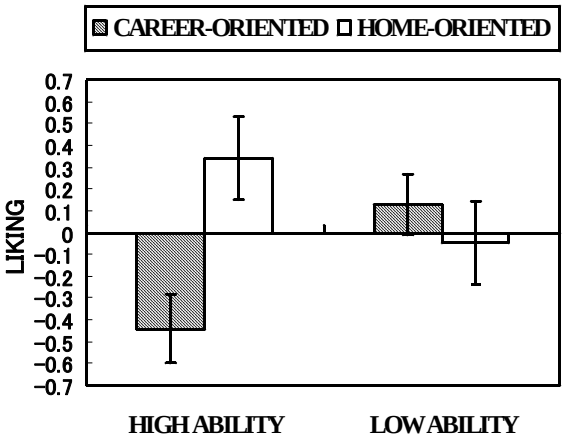

Figure 2 Mean standardized values of participants' likings for the female target as a function of her orientation and her ability. Error bars indicate 1 *SE* above and below the mean.

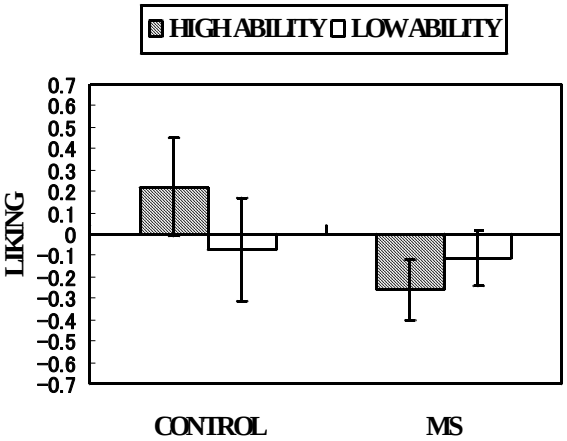

Figure 3 Mean standardized values of participants' likings for the female target as a function of mortality salience and her ability. Error bars indicate 1 *SE* above and below the mean.

「仲間・同僚としての好意」では，志向の主効果のみが有意で（F(1, 118)=13.39, p<.001），キャリア志向(M=0.31)の方が家庭志向（M=-0.31)に比べ好まれていた．仮説から予想される

MS ×志向および MS ×能力の交互作用効果は有意ではなかった（$F(1, 118)=0.55$, *ns*; $F(1, 118)=0.03$, *ns*）.

「社会的適応」では，志向の主効果のみが有意で（$F(1, 118)=27.71$, $p<.001$），家庭志向の方が社会的に適応力があると判断されていた（$M_{careerr}=-0.31$, $M_{home}=0.31$）.「知能」では，能力と志向の主効果および能力×志向の交互作用効果が有意で（$F(1, 118)=58.66$, $p<.001$; $F(1, 118)=20.83$, $p<.001$; $F(1, 118)=7.16$, $p<.01$），能力高群ほど，また，キャリア志向ほど，知能が高いと判断されるが，能力が低く家庭志向の場合に極端に評定値が低いことによるものであった（$M_{high\ ability_careerr}=0.66$, $M_{high\ ability_home}=0.38$, $M_{low\ ability_careerr}=-0.03$, $M_{low\ ability_home}=-1.03$）.

考　察

本研究の仮説は，死すべき運命の顕現化を行うと，規範的ジェンダー・ステレオタイプと一致する女性に対してポジティブな評価を，一致しない女性に対してネガティブな評価をするであろうというものであった．規範的ジェンダー・ステレオタイプとの一致および不一致を，志向と能力により操作した．死すべき運命の顕現化という脅威があるときには，ないときに比べ，規範的ジェンダー・ステレオタイプに一致する家庭志向女性の社会的望ましさを高く評価し，一致しないキャリア志向女性の社会的望ましさを低く評価していた．また，死すべき運命の顕現化という脅威があるときには，ないときに比べ，規範的ジェンダー・ステレオタイプに一致する能力の低い女性に対して個人的好意を高め，一致しない能力の高い女性に対して個人的好意を低めていた．これらの結果は仮説を支持するものであり，MS 仮説が性役割的偏見にも適用でき，そして，TMT が仏教・儒教文化圏にいる日本人男性にも適用できることを示唆するものといえよう．

それでは，どのように好意的偏見と敵意的偏見が使われたかを詳しく検討してみよう．MS 後の好意的偏見と敵意的偏見の表出において，能力の低い女性と能力の高い女性との対比においては，弱いながらも，「温かさ」の次元のみが使われていた．つまり，能力の低い女性に対しては，「より温かい」という方向に，能力の高い女性に対しては「より性格が悪い」という方向に変化していた．この方向の変化は，記述的サブカテゴリー・ステレオタイプを強める方向であると解釈することもできるし，全般的な好意的偏見や敵意的偏見が強まったと解釈することもできる．しかし，「有能さ」の次元では MS の操作による差は見られなかった．これは，能力の高さおよび低さが非常に極端であったために，能力の高い女性と能力の低い女性の対比においては「有能さ」の次元が使用しづらかったことから説明できるであろう．

一方，MS 後の好意的偏見と敵意的偏見の表出において，家庭志向の女性とキャリア志向の女性の対比においては，「有能さ」の次元のみが使われていた．つまり，家庭志向の女性に対しては「それほど無能ではない」という方向に，キャリア志向の女性に対しては「それほど有能ではない」という方向に変化していた．この方向の変化は，記述的サブカ

テゴリー・ステレオタイプをより強める方向ではなく，好意的偏見においてはサブカテゴリー・ステレオタイプの悪い面を高め，敵意的偏見においてはサブカテゴリー・ステレオタイプの良い面を引き下げることを意味しており．全般的な好意・敵意を強める方向で，死の顕現化に対する脅威に対抗したと考えられる．しかし，「温かさ」の次元を測定すると考えられる，「個人的好意」や「個人的親しみやすさ」では差が見られていない点は，検討を要する．

上記の点が最も顕著であるが，本研究の結果は MS 仮説を支持する方向のものではあるものの，予想していたよりも効果が得られていない．その理由としていくつかの点が上げられる．まず第 1 に，「個人的好意」や「個人的親しみやすさ」によって捉えられると考えた「温かさ」の次元は，規範的ステレオタイプに一致している女性にはもともとポジティブ，一致しない女性にはもともとネガティブであるために，脅威があっても好意的偏見と敵意的偏見を表出する手段としては使われづらい可能性が考えられよう．実際，「個人的親しみやすさ」では，統制群において家庭志向の女性はキャリア志向の女性に比べ親しみやすいと評定されていた．しかし，脅威後の能力の高い女性と能力の低い女性に対する偏見でも弱いながらも「温かさ」の次元が使われていること，「個人的好意」ではキャリア志向女性と家庭志向女性の間に統制群において差がないことから，必ずしもこれだけが理由とは考えづらい．

第 2 に，実験参加者の中の規範的ジェンダー・ステレオタイプが一様でなかった可能性が考えられる．最近の社会情勢を受けて，一部の男子大学生の規範的ジェンダー・ステレオタイプが伝統的なものから平等主義的なものへと変化している可能性がある．もし，女性は社会に進出するべきであるという規範的ジェンダー・ステレオタイプを持っている男性がいるとすれば，MS の効果は仮説とは逆の方向に働くはずである．そのため，MS の効果を検出しづらかった可能性が考えられる．

第 3 に，実験参加者に評定させた刺激女性に問題があった可能性がある．沼崎・工藤(1995)の研究では刺激女性の好意度評定が全般的に高く天井効果が生じた可能性があったと考えたため，本研究では，ネガティブな情報を多く含めるようにした．このネガティブな情報はほとんどが「温かさ」の次元のものであった（例えば「ヒステリーを起こしてしまう」）．そのため，「温かさ」の次元に関しては，全般的に低い評定となり，結果として変化させづらかった可能性が考えられる（平均値自体は中点を下回る程度であるが，他者を非常にネガティブに評価することは困難であろう）．

第 4 に，規範的ステレオタイプと一致した女性として設定した，家庭志向の女性の操作に問題があった可能性がある．ここでも第 3 のところで述べた天井効果を避けるために，「年収は一千万以上ほしい」といったネガティブな情報を含めたが，この部分が伝統的女性像である規範的ステレオタイプから逸脱しており，そのために「温かさ」の次元で好意的偏見を向けにくくなっていたのかもしれない．

本研究においては，第 2 から第 4 のような操作上の問題があったために，「温かさ」の次元が好意的偏見や敵意的偏見において使われなかった可能性がある．そこで，第 2 研究では，これら問題点を修正して，「温かさ」の次元が使われうるかどうかについてさらなる検討を行った．

本研究は，死すべき運命の顕現化という脅威状況において顕在化してしまう性役割的偏見を検証することを目的としていたが，「個人的好意」において，脅威の操作である MS とは無関係に，キャリア志向の場合には能力が低い女性の方が好まれるが，家庭志向の場合には能力が高い女性の方が好まれるという興味深い結果も得られた．この結果は，キャリア志向女性は，男性と潜在的に競争関係にあり，「有能さ」の次元でポジティブな属性（高能力）を持つことが男性にとり脅威となるため敵意を向けられるが，家庭志向女性では，「有能さ」の次元でポジティブであることが脅威とならないため，このポジティブな属性が好意を生み出したと考えられよう．このように，競争関係になり得ることから生じる，能力の高い人物の潜在的脅威といった観点から（e.g., Fiske et al., 2002），この結果も説明できるであろう．

研究２：MS と性役割態度が男性が表明する性役割的偏見に及ぼす効果

研究 2 においては，研究 1 の考察で指摘した問題点を修正して，MS 後の日本人男子大学生の性役割的偏見において「温かさ」の次元が使われうるかどうかを中心に検討を行った．

Rosenblatt et al.（1989, Study 2）では，社会的規範に逸脱していると考えられる売春者への罰金額に対する MS の効果を検討しているが，もともと売春に対してネガティブな態度を持っている実験参加者では，MS 後では罰金額を上げるという効果を見いだしているが，そのような態度を持っていない実験参加者では効果を見いだしていない．この結果からわかるように，個人の社会的規範に関する信念や態度が異なれば，同じ事象が文化的世界観に対して脅威を与えるか否かが異なってくる．最近の社会情勢から，男子大学生の中に，女性はもっと社会進出をするべきであるという規範を持っているものがいるとすれば，キャリア志向の女性は，その人の規範的ステレオタイプに一致しており，文化的世界観に対して脅威を与えないと考えられる．そこで，本研究では，MS の性役割的偏見への効果が，女性の社会進出に関する態度によって異なるかどうかを検討した．そのため，実験参加者の，女性の社会進出に関する態度を測定しておいた（鈴木， 1991, 1994：平等主義的性役割態度スケール）． 研究 2 は，研究 1 とほぼ同様に行ったが，実験参加者の関係から能力の操作を行わず，能力は高い女性のみにした．高い女性のみにしたのは，能力の次元を使いにくくする意味もあった．さらに，研究 1 の考察で指摘した，刺激人物の情報に含ま

れていたネガティブな情報を削減し，家庭志向の女性の情報に含まれていた非伝統的なネガティブな情報を削除して実験を行った．

仮説としては，「MS を行った群では，行わなかった群に比べ，キャリア志向女性に対してよりも家庭志向女性に対してポジティブな評価をするようになるであろう(仮説 1)」と，「仮説 1 の傾向は，伝統的性役割信念が強い人ほど顕著で，平等主義的性役割信念が強い人では見られない，または逆になるであろう（仮説2)」を設けて検討を行った．

方　法

実験計画　操作した要因としては，死すべき運命の顕現化(MS 群 vs.　統制群)×評定対象女性の志向(家庭志向 vs. キャリア志向)の参加者間要因計画．それに加え，個人差要因として平等主義的性役割態度を加えた．

実験参加者　一橋大学男子大学生 67 名．

手続き　研究 1 と以下の 5 点を除いて同様に行った．第 1 に，実験実施 2 ヶ月半前に平等主義的性役割態度スケールのショート・バージョン（鈴木，1991，1994)に授業時間中に回答させた．第 2 に，女性の能力は能力高群の刺激のみを用いた．第 3 に，志向の操作において家庭志向女性の非伝統的と考えられるネガティブな情報を削除した．第 4 に，キャリア志向女性と家庭志向女性に共通のネガティブ情報を少なくした．具体的な刺激人物の情報は Appendix 2 に示した．第 5 に従属変数の「一般に」を含む 2 項目を「一般的な一橋大生に」に変更した．

結　果

平等主義尺度の得点化　平等主義性役割態度スケールの 15 項目のうち 1 項目に誤植があったため除き 14 項目の α 係数を求めたところ.85 と高かったため，各項目の素点を得点が高いほど平等主義的性役割態度が強くなるように得点化した上で，標準化得点を求めた．

分析方法　平等主義標準得点に対して 2 × 2（MS ×志向）の分散分析を行ったところ有意になった効果はなかった($Fs<0.47$, *ns*)．そこで，平等主義得点と操作要因は独立であると考えられることから，操作チェック・従属変数に対して，平等主義尺度標準得点× MS ×志向の全ての交互作用効果を含む重回帰分析を行った．その際，MS に関しては有り群を"1"，無し群を"-1"として投入し，志向に関してはキャリア志向を"1"，家庭志向を"-1"として投入した．

操作チェック　「志向」の評定では，志向の効果のみが意図した方向で有意であった($F(1, 59)=107.71$, $\beta=-1.52$, $p<.001$)．このことから志向の操作は成功したと考えられよう．

好意関連項目　好意関連 13 項目に対して因子分析（主成分・バリマックス回転）をおこなった．4 因子を抽出し，各次元の因子得点を用いて分析をおこなった．4 因子とは，「個人的好意（<好感><魅力><友人><恋人><結婚>に負荷が高い)」，「仕事仲間としての好意（<

友人>‹同僚>‹アルバイト>‹一緒の作業>)，「社会的適応（‹社会的適応>‹うまくやっていけるか>)」，「一般的一橋大生の好意推測」，であった．

「個人的好意」では，志向の効果が有意であったが（$F(1, 59)=6.58$, $\beta=.29$, $p<.05$），MS×志向の交互作用効果にも有意に近い効果が見られ制限を受ける（$F(1, 59)=2.80$, $\beta=.11$, $p=.099$）．平等主義尺度得点の 1 σを平等主義性役割者とし，-1 σを伝統的性役割者として，回帰式に投入した数値をプロットしたのが Figure 4 である．ここからわかるように仮説 1 を支持する方向の結果であった．平等主義× MS ×志向の効果は有意とはならず（$F(1, 59)=0.19$, *ns*），仮説 2 は支持されなかった．

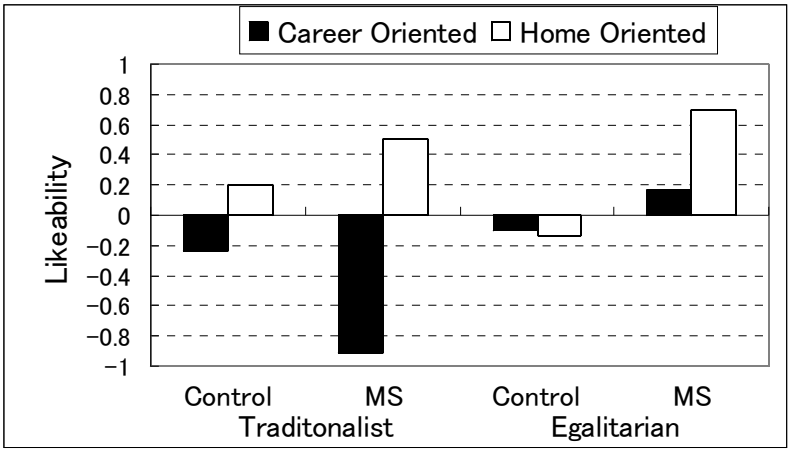

Figure 4　Likeability as a function of SESRA, mortality salience, and target.

「仕事仲間の好意」では，志向の効果と平等主義× MS ×志向の効果に有意に近い効果が見られた（$F(1, 59)=3.58$, $\beta=-0.23$, $p=.063$; $F(1, 59)=3.76$, $\beta=.24$, $p=.057$）．この効果をプロットしたのが Figure　5 である．ここからわかるように，伝統的性役割観が強いほど，MS 群でキャリア志向女性への仕事仲間としての好意が高まり家庭志向女性への仕事仲間としての好意が低下するという，仮説 2 の予測とは全く逆の効果であった．

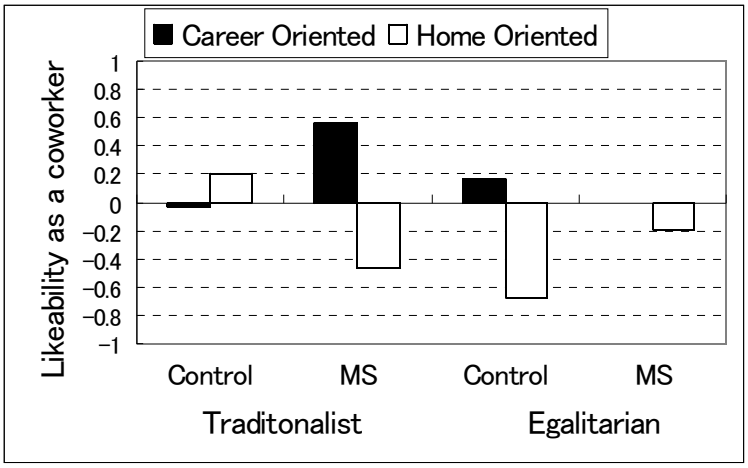

Figure 5　Likeability as a co-worker as a function of SESRA, mortality salience, and target.

「一般的な一橋大生の好意予測」では，志向の効果のみが有意で（$F(1, 59)=36.05$, $\beta=.61$, $p<.001$），家庭志向の方がキャリア志向よりも好まれると予測していた．

「社会的適応」では，志向の効果が有意であったが（$F(1, 59)=4.03$, $\beta=.24$, $p<05$），平等主義× MS ×志向の交互作用効果にも有意に近い効果が見られた（$F(1, 59)=3.80$, $\beta=-.24$, $p=.056$）．この効果をプロットしたのが Figure 6 である．ここからわかるように，伝統的性役割観が強い場合には，MS 群は統制群に比べ，キャリア志向女性の社会的適応を低く家庭志向の社会的適応を高く評定するのに対し，平等主義的性役割観が強い場合には，MS 群は統制群に比べ，キャリア志向の社会的適応も家庭志向の社会的適応も高く評定する傾向にあった．この結果は仮説 2 を支持する方向のものである．

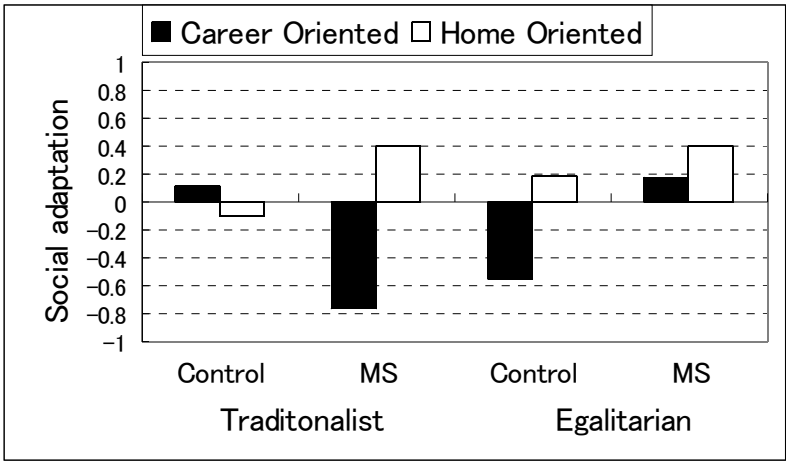

Figure 6 Social adaptation as a function of SESRA, mortality salience, and target.

性格 SD 尺度 25 項目の SD 尺度に対して因子分析（主成分・バリマックス回転）をおこなった結果，想定していた 3 因子（「活動性・自信（e.g., 競争的，堂々とした，積極的な，自信のある，大胆な）」「個人的親しみやすさ（e.g., 親しみやすい，感じのよい，明るい，社交的な，親切な）」「社会的望ましさ（e.g., きちんとした，知的な，有能な，誠実な」）が抽出された．各因子の因子得点を用いて，2 × 2 × 2 の分散分析をおこなった．

「活動性・自信」では，志向の効果と MS の効果が有意であった（$F(1, 59)=125.97$, $\beta=-.80$, $p<.001$; $F(1, 59)=9.47$, $\beta=.22$, $p<.01$）．志向の効果はキャリア志向の女性ほど活動的で自信があると評定されたことによる効果であり，MS の効果は MS 群ほど活動的で自信があると評定されたことによる効果である．

「社会的望ましさ」では有意になった効果はなかった．

「個人的親しみやすさ」では，志向の効果と平等主義× MS ×志向の効果が有意であった（$F(1, 59)=5.94$, $\beta=-.28$, $p<.05$; $F(1, 59)=4.01$, $\beta=.23$, $p<.05$）．この効果をプロットしたのが，Figure 7 である．ここからわかるように，伝統的性役割観が強い場合には，MS 群は

統制群に比べ，家庭志向女性の個人的親しみやすさを高く評定しキャリア志向女性の個人的親しみやすさを低く評定している．一方，平等主義的性役割観が強い場合には，大きな差は見られていない（キャリア志向女性でも家庭志向女性でも高く評定している）．この結果は仮説 2 を支持するものである．

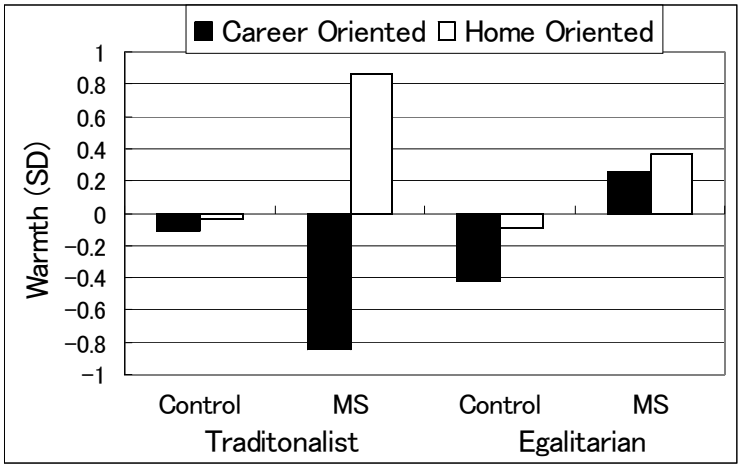

Figure 7　Warmth as a function of SESRA, mortality salience, and target.

考　察

「個人的好意」で弱いながらも MS ×志向の効果が見られ，死の顕現性が高まると，一般的な男子大学生が持つと考えられる規範的ジェンダー・ステレオタイプに一致する家庭志向女性に対する個人的好意が高まり，一致しないキャリア志向女性に対する個人的好意が低下していた．また，「個人的親しみやすさ」では平等主義× MS ×志向の効果が見られた．死の顕現性が高まると，家庭志向女性を個人的親しみやすいと評定しやすく，キャリア志向女性を個人的に親しみにくいと評定しやすくなり，その効果は，伝統的性役割観が強い人に顕著に見られた．さらに，「社会的適応」でも平等主義× MS ×志向の効果が得られ，「個人的親しみやすさ」と同じようなパターンが見られた．これらの結果は仮説を支持する方向のものである．そして，研究 1 とは異なり，「温かさ」の次元が脅威時の敵意的偏見や好意的偏見に使われうることを示唆している．研究 1 で「温かさ」の次元で効果が見られなかったのは，研究 1 の考察で指摘したような操作的な問題があったためであると考えられよう．その一方で，研究 1 と研究 2 の，次元の使用の相違は，敵意的偏見や好意的偏見を向ける場合には，利用可能なものを使うという動機に基づいた状況依存的偏見を示唆するものであると考える．

「個人的好意」や「個人的親しみやすさ」や「社会的適応」では仮説を支持する方向の結果が得られたが，「仕事仲間としての好意」では，仮説 2 とは逆の結果が見られた．伝統的性役割観が強い実験参加者では，死の顕現性が高まるという脅威の後，キャリア志向女性への仕事仲間としての好意が高まり，家庭志向女性への好意が低下していた．一方，平等的性役割観の強い実験参加者では，むしろ逆のパターンを示していた．

この結果をどのように解釈したらよいだろうか．伝統的性役割観が強い男性と平等主義的性役割観が強い男性ごとに，考察を加えてみたい．その際には，「仕事仲間の好意」が「有能さ」の次元に基づいて判断されたと考える．「有能さ」の次元に最も敏感であると考えていた SD 尺度の「社会的望ましさ」において効果が見られていないが，これは能力が高い女性のみを刺激人物に用いたために，天井効果が生じたことによるものと考えられよう．

伝統的性役割観が強い男性の場合には，死の顕現性が高まるという脅威があった場合に，家庭志向の女性に対しては，「温かさ」の次元で評価を高くし，「有能さ」の次元での評価を低めたと考えられる．一方，キャリア志向の女性に対しては，「温かさ」の次元で評価を低め，「有能さ」の次元での評価が高めたと考えることができる．この結果は，記述的サブカテゴリー・ステレオタイプの強化の方向での変化をあらわしている．これら男性にとっては，家庭志向の女性が規範的ジェンダー・ステレオタイプに一致し，キャリア志向の女性が規範的ジェンダー・ステレオタイプに不一致な女性である．これまでの研究でしばしば指摘されているように，脅威がある場合に，規範的ジェンダー・ステレオタイプの方向に評価を変化させるのでもなく，両方の軸に対して同じように好意的偏見の場合にはポジティブに，敵意的偏見の場合にはネガティブに変化するわけでもないことを示している．つまり，伝統的性役割観の強い男性において，脅威があった場合には，サブカテゴリーを強める方向で，規範的ジェンダー・ステレオタイプに一致している女性を「より温かくはあるがより無能だ」と，不一致な女性を「より有能であるがより性格が悪い」と評価する，つまりサブカテゴリー・ステレオタイプの適用を強めることにより，自分の文化的世界観を防衛したと考えることができる．ただし，キャリア志向女性に対する敵意的偏見の記述的サブカテゴリー・ステレオタイプ方向への変化は，非常に有能な女性のみを用いたことによって生じた結果の可能性も考えられる．つまり，「非常に有能である」という情報が，記述的サブカテゴリー・ジェンダー・ステレオタイプを活性化したために生じた可能性がある．このような情報がない場合には，どのような手段を用いて文化的世界観防衛をするかについては今後のさらなる検討が必要であろう．

一方，平等主義的性役割観が強い男性の場合には，死の顕現性が高まるという脅威があった場合に，家庭志向の女性に対しては，「温かさ」の次元でも「有能さ」の次元でも評価が高まる方向に変化していた．キャリア志向の女性に対しては，「温かさ」の次元でも「有能さ」の次元でもほとんど変化がないものの，評価が高まる方向を示していた．これらの結果は，平等主義的性役割感が強い男性において，脅威があった場合に，家庭志向的女性には好意的偏見を向けるのに対して，キャリア志向の女性に対しては好意的偏見も敵

意的偏見も示さないことを示していると考えられよう[*3]．平等主義的性役割観が強い人も，死の顕現性が高まった場合に，何らかの形で自分の文化的世界観を防衛することは仮定できよう．平等主義的性役割観の強い男性にとり，家庭志向の女性は依然として規範的ステレオタイプと一致している女性であるが，キャリア志向の女性は規範的ステレオタイプと必ずしも不一致な女性ではないという構造があるとすれば，上記の結果は説明できるであろう．つまり，平等主義的性役割観の強い男性において，規範的ジェンダー・ステレオタイプに一致している家庭志向女性を「より温かくより有能だ」と好意的偏見を向けて評価することにより，自分の文化的世界観を防衛したと考えることができる．単項目ごとに見てみると，平等主義的性役割観を持った男性は，キャリア志向の女性に対して，統制群に比べ MS 群で「社会的適応」項目評定において，評定を上昇させていた[*4]．これは，平等主義的性役割観を持った男性にとって，キャリア志向女性も規範的ジェンダー・ステレオタイプになりつつある可能性を示すものである．つまり，このような男性にとって，女性の 2 つの記述的サブカテゴリー・ステレオタイプの両方が規範的ステレオタイプになっている可能性を示すものである．ただし，伝統的性役割観の男性の結果の解釈でも指摘したが，本研究では，非常に能力の高い女性のみを刺激人物に使っており，「能力の高い女性はキャリア志向を目指すべきだ」という規範的ステレオタイプがあるだけで，「女性もキャリア志向を目指すべきだ」という規範的ステレオタイプは存在しない可能性も考えられる．この点についてはさらなる検討が必要であろう．

本研究の限界として，すでに，能力が非常に高い女性のみを刺激人物に用いた点を上げたが，実験参加者の特性も指摘しておく必要があろう．本研究の実験参加者は，一橋大学生であり，能力が高い男性と考えられる．また，鈴木(1994)のデータと比較をすると，平等主義性役割観得点も相対的に高い得点を示す，全体としては平等主義的性役割観の強い男性集団であった．

本研究の結果が，どこまで一般化できるかについては今後の検討が必要であろう．

一般化を考えるために，研究 3 では，死すべき運命の顕現化を行った場合に，女性が女性に対して性役割的偏見を示すかどうか，そして実験参加者の女性の社会進出に対する態度がこの効果を調整するかどうかを検討した．女性参加者としてはある意味で特殊な集団ではあるが，一橋大女子大学生を実験参加者に用いて検討をおこなった．

---

*3　好意的偏見を向ける人と敵意的偏見を向ける人の両方がいる可能性もあるが，平等主義得点をメディアン分割して，平等主義（高 vs. 低）× MS（有 vs. 無）×志向（家庭 vs. キャリア）の 8 群で平均値および標準偏差を求めたところ，平等主義的性役割観得点が高い実験参加者の MS 群のキャリア志向女性の評定の標準偏差が特に高い値を示すことはなく，この可能性は低いと考えられる．

*4　この結果は，2 × 2 × 2（MS ×志向×平等主義(上位 vs.　下位)の分析の下位分析から得られた結果である．

研究３：MS と性役割態度が女性が表明する性役割的偏見に及ぼす効果

日本人女性を実験参加者にしても，TMT の MS 仮説が検証されるかどうかの検討を行った．規範的ジェンダー・ステレオタイプの機能から，女性では男性とは異なった規範的ジェンダー・ステレオタイプを持っていると考えられ(Burgess & Borgida, 1999)，また，鈴木(1991, 1994)は，平等主義的性役割観尺度の得点で女性のほうが男性よりも高い得点を示すことを報告している．このことから，死の顕現性を高めた場合に，女性全体で見た場合に，キャリア志向の女性と家庭志向の女性のどちらに敵意的偏見を向け，どちらに好意的偏見を向けるのかは必ずしも明らかではない．しかし，平等主義的性役割観により，どちらのほうに好意的偏見を向けるか，敵意的偏見を向けるかには違いがあると考えられよう.そこで,「伝統的性役割観が強い女性では,平等主義的性役割観が強い女性に比べ,MS を行った場合，行わなかった場合に比べ，相対的に，キャリア志向女性に対してよりも家庭志向女性に対してポジティブな評価をするようになるであろう」という仮説を設けて実験を行った．

方　法

実験計画　操作した要因としては，MS(有 vs. 無)×志向(家庭志向 vs. キャリア志向)の被験者間要因計画．それに加え，個人差要因として平等主義的性役割態度を加えた．

実験参加者　一橋大学女子大学生 37 名．

手続き　実験 2 と同時に全く同様の手続きで行った．ただし，従属変数のうち，「恋人として付き合いたいか」「結婚相手として付き合いたいか」には回答させなかった．

結　果

平等主義尺度の得点化　平等主義性役割態度スケールの 15 項目のうち 1 項目に誤植があったため除き，14 項目で項目分析を行ったところ，3 項目がその項目を除く項目の合計値との相関が低かった．そこで，この 3 項目を除いた 11 項目でα係数を求めたところ.84 と高く，各項目の素点を得点が高いほど平等主義的性役割態度が強くなるように得点化した上で，標準化得点を求めた．

分析方法　平等主義標準得点に対して 2 × 2（MS ×志向）の分散分析を行ったところ有意になった効果はなかった($Fs<1$, *ns*)．そこで，平等主義得点と操作要因は独立であると考えられることから，操作チェック・従属変数に対して，平等主義尺度標準得点× MS ×志向の全ての交互作用効果を含む重回帰分析を行った．その際，MS に関しては有り群を"1"，無し群を"-1"として投入し，志向に関してはキャリア志向を"1"，家庭志向を"-1"として投入した．

操作チェック　「志向」の評定では，志向の効果のみが意図した方向で有意であった(F(1, 29)=202.62, β=-2.13, p<.001)．このことから志向の操作は成功したと考えられる．

好意関連項目　好意関連 11 項目に対して因子分析（主成分・バリマックス回転）をおこなった．4 因子を抽出し，各次元の因子得点を用いて分析をおこなった．4 因子とは，「好意（<好感><魅力><友人><同僚><アルバイト><作業>に負荷が高い)」，「一橋大男性の好意推測」，「社会的適応（<社会的適応><うまくやっていけるか>)」，「知能」であった．

「個人的・仕事仲間としての好意」では，志向と平等主義×志向の効果が有意であったが(F(1, 29)=9.51, β=-.45, p<.01; F(1, 29)=7.09, β=-.40, p<.05)，平等主義× MS ×志向も有意であり制限を受ける(F(1, 29)=4.42, β=-.32, p<.05)．この効果をプロットしたのが Figure 8 である．ここからわかるとおり，平等主義性役割観が強い場合には，MS 群は統制群に比べてキャリア志向女性に対する好意が高まり，家庭志向女性に対する好意が低下している．一方，伝統主義的性役割観が強い場合にはむしろ逆の傾向を示している．この結果は仮説を支持するものである．

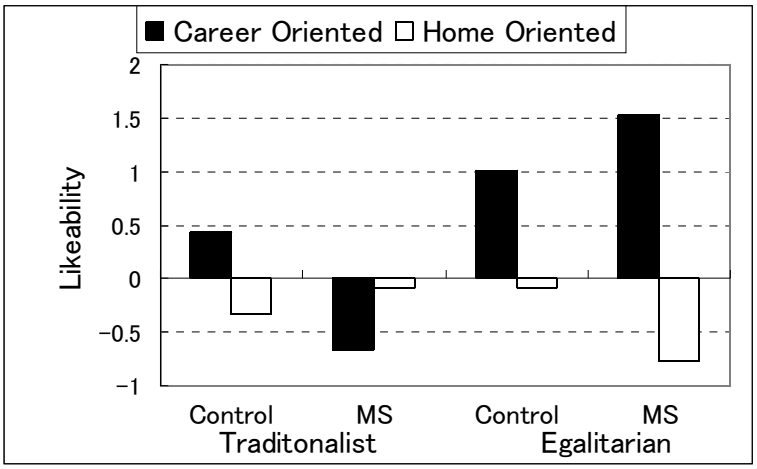

Figure 8　Likeability as a function of SESRA, mortality salience, and target.

「一橋大男性の好意推測」では，志向の効果のみが有意で(F(1, 29)=14.43, β=-.56, p<.001)，家庭志向女性のほうがキャリア志向女性よりも一橋男子大学生に好かれるだろうと推測していた．

「社会的適応」では，志向の効果に有意に近い効果が見られた(F(1, 29)=2.97, β=-.31, p=.097)．家庭志向女性のほうがキャリア志向女性よりも社会的に適応していると評定されていた．

「知能」では，志向の効果に有意な効果が見られた(F(1, 29)=4.70, β=.34, p<.05)．キャリア志向女性のほうが家庭志向女性よりも知能が高いと評定されていた．

性格 SD 尺度　25 項目の SD 尺度に対して因子分析（主成分・バリマックス回転）をおこなったが，想定した因子構造にならなかった．そのため今回の報告には含めない．

考　察

本研究の結果は，日本人女性に対しても，TMT が適用可能で，MS 仮説を性役割的偏見に適用できることを示す結果であった．

そして，MS の効果は，予想されたように性役割観による違いが見られた．死の顕現性を高めた後では，平等主義的性役割観が強い女性では，キャリア志向女性に対してポジティブな評価を，家庭志向女性に対してはネガティブな評価をするのに対して，相対的に伝統的性役割観を持った女性では，むしろ逆の方向を示した．これらの結果は，相対的に伝統的性役割観を持った女性では伝統的性役割観を持った男性と類似した規範的ジェンダー・ステレオタイプを持っているのに対して，平等主義的性役割観が強い女性が保有する規範的ジェンダー・ステレオタイプが，平等主義的性役割観が強い男性とは異なり，「女性は社会進出をすべきだ」といったものになっていると考えれば理解できるであろう．つまり，平等主義的性役割観が強い女性は，キャリア志向女性が規範的ジェンダー・ステレオタイプと一致しているので好意的偏見を向け，家庭志向の女性が不一致なので敵意的偏見を向けることで，自分の文化的世界観を防衛したのだと解釈できる．興味深い点は家庭志向の女性の結果である．平等主義的性役割観を持った男性では好意的偏見を家庭志向の女性に向けていたが，女性では家庭志向の女性に対して敵意的偏見を向けていた．平等主義的性役割観が強い女性では，男性とは異なり，家庭的志向を規範的ジェンダー・ステレオタイプに不一致な女性であると判断していると考えられる．この結果の相違は，従来の規範的ジェンダー・ステレオタイプを利用することによって，男女の不平等な社会構造を正当化するという利益を受けているのが，男性であることよって生じていると考えることができるかもしれない．しかし，研究 2 の男性実験参加者と研究 3 の女性実験参加者では，平等主義的性役割観得点が大きく異なっており，そのために生じた結果とも解釈できる．

本研究の限界として，実験 2 と同様に，実験に参加した女性が，平均的な女子大学生に比べ，能力が高く，平等主義的役割観が強いキャリア志向を強く持った女性であることには注意が必要であろう．今後はより幅広いサンプルの女性からデータを取り，女性の女性に対する性役割的偏見の構造を明らかにする必要があろう．また，本研究においても能力の高い女性のみを刺激人物にしていることも結果を解釈する上で注意をしなくてはならない．能力の高い女性のみを刺激人物を用いているので，平等主義的性役割観が強い女性の規範的ジェンダー・ステレオタイプとして「女性は基本的に社会進出すべきだ」という単一の規範があるのか，「能力の高い女性は社会進出すべきだ（＝能力が高いにもかかわらず家庭を志向すべきではない）」という，サブカテゴリー化された女性に対する規範的ジェンダー・ステレオタイプがあるのかは明確ではない．この点もさらなる研究において明らかにする必要があろう．

総　合　考　察

本研究で行った 3 つの実験の結果はいずれも，死の顕現性を高めると，自分が保有する文化的世界観を守るとために，ステレオタイプの活性化/適用が強くなるという，存在脅威管理理論から導き出された MS 仮説によって説明できるものであった．このことは，一神教的世界観が希薄な，仏教的/多神教的死生観を持つ日本人に対しても TMT が適用することができることを示している．また，これまで検討されていなかった，ジェンダー・ステレオタイプの適用が，文化的世界観を守るために用いられることを示唆するものであった．

一方，文化的世界を守るために，記述的ジェンダー・ステレオタイプや規範的ジェンダー・ステレオタイプの活性化/適用は実験ごと，また実験参加者の性役割的信念によって異なっていた．研究 1 では，死すべき運命の顕現化という脅威状況において，男性はキャリア志向女性の「有能さ」を低め，家庭志向女性の「有能さ」を高めることにより脅威に対処していた．研究 2 では，伝統的性役割観の強い男性は，家庭志向女性の「温かさ」を高め「有能さ」を低めることにより脅威に対処していた．一方平等主義的性役割観の強い男性は，キャリア志向に対する評価を変えずに，家庭志向女性の評価を高めることにより，脅威に対処していた．研究 3 では，平等主義的性役割観の強い女性は，家庭志向女性の評価を低めキャリア志向女性の評価を高めることにより脅威に対処していた．これらの結果は，ステレオタイプの活性化/適用が状況依存的で，その状況における，動機付けにあい，かつ利用可能なものを使用するという主張に沿うものであった（e.g., Blair, 2002; Kunda & Spencer, 2003）．しかし，研究ごとに異なったパターンが生じたかを考えるためには，脅威状況における規範的ステレオタイプに一致した人に対して向けられる好意的偏見と規範的ステレオタイプに不一致な人に対して向けられる敵意的偏見の方向性について整理をしておく必要があろう．

伝統的な意味における女性の規範的ステレオタイプは，「女性は温かくあるべきで，地位関連成功つまり，有能さを示すべきではない」といったものがあると考えられる．記述的なステレオタイプとして，女性一般には「温かいが無能である」というステレオタイプが，サブカテゴリー・ステレオタイプとして家庭的女性には「温かいが無能である」というステレオタイプが，キャリア女性には「有能だが性格が悪い」というステレオタイプがあると考えられる（e.g., Glick, Diebold, Bailey-Werner, & Zhu, 1997）．脅威状況において，伝統的な意味での規範的ステレオタイプに一致する人に好意的偏見と不一致な人に敵意的偏見を向ける場合，「温かさ」と「有能さ」の次元を使用し，かつ，これらのステレオタイプを利用した 3 つの方策が考えられよう．

第 1 は，単純に評価を変える方略であり，好意的偏見を向ける場合には「温かさ」と「有

能さ」をともに高め，敵意的偏見を向ける場合には「温かさ」と「有能さ」をともに低める方略である．つまり，脅威状況において，伝統的な意味での規範的ステレオタイプに一致した女性に対して「非常に温かくそれほど無能ではない」という好意的偏見を，伝統的な意味での規範的ステレオタイプに一致しない女性に対して「それほど有能ではなく非常に性格が悪い」という敵意的偏見を向ける可能性である．

第 2 は，好意的偏見を向ける場合でも敵意的偏見を向ける場合でもサブカテゴリー・ステレオタイプ（伝統的女性の「温かいが無能である」ステレオタイプと非伝統的女性の「有能だが性格が悪い」）を強化する方略である．つまり，脅威状況において，伝統的な意味での規範的ステレオタイプに一致した女性に対して「非常に温かく非常に無能である」と言った好意的偏見を，伝統的な意味での規範的ステレオタイプに一致しない女性に対して「非常に有能ではあるが非常に性格が悪い」という敵意的偏見を向ける可能性である．

第 3 は，女性一般に関するというステレオタイプ（「温かいが無能である）を利用して，所詮女性であると再確認をすることにより脅威に対処する方略である．つまり，脅威状況において，伝統的な意味での規範的ステレオタイプに一致した女性に対して「非常に温かく非常に無能である」と言った好意的偏見を，伝統的な意味での規範的ステレオタイプに一致しない女性に対して「それほど有能ではないがそれほど性格も悪くない」という敵意的偏見を向ける可能性である．

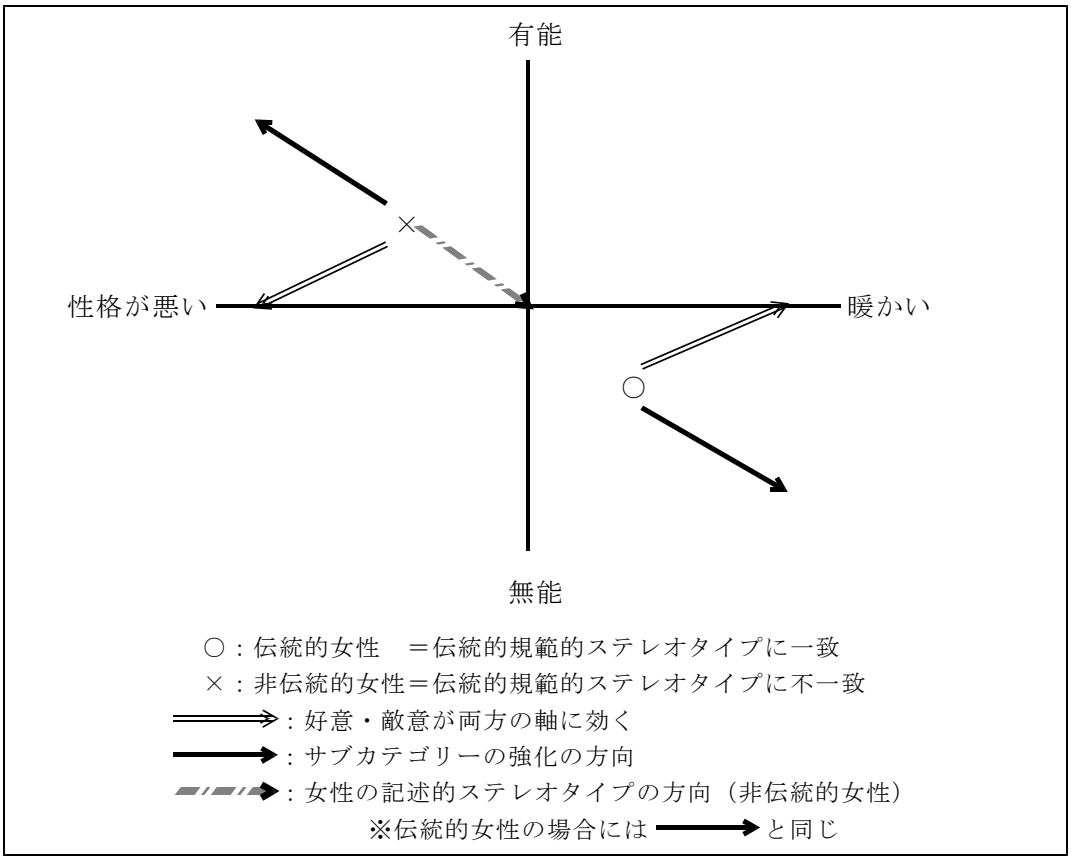

Figure 9　脅威を受けた場合の評定の変化の方向の可能性

これらの可能性を図示したのが Figure 9 である．第 1 の方略は "⇒ " で，第 2 の方略は" ➡ "で，第 3 の方略は" ➡"であらわしている．これら方略に加え，それぞれの次元に関して評価を変えないという方略も考えることができるであろう．

この整理に基づいて，研究 1 から研究 3 までの結果を考えると，研究 1 においては，男性参加者は「有能さ」の次元で方略 1 を使用したと考えることができよう．それに対して，研究 2 においては，伝統的性役割観の強い男性では「有能さ」と「温かさ」の両方の次元を用いて，サブカテゴリー・ステレオタイプを強めるという方略 2 を使用したと考えられよう．一方，平等主義的性役割観の強い男性では，伝統的性役割と一致した家庭志向女性に対して方略 1 を使用したと考えられよう．研究 3 においては，伝統的性役割観の強い女性では方略 1 を使用したのに対して，平等主義的性役割観の強い女性では，自分の性役割観に合致する形で，つまり，伝統的な意味での規範的ジェンダー・ステレオタイプとは異なった規範的ジェンダー・ステレオタイプ（「女性は社会進出をすべきだ」）を用いて，自分の規範的ジェンダー・ステレオタイプに一致した女性に対して好意的偏見を一致しない女性に対して敵意的偏見を向けるという意味で，方略 1 を使用したと考えられよう．

これらの方略の違いが生じさせた理由はどこにあるのだろうか？　本研究からは明確な結論を引き出すことは困難であるが，統制群の結果に注目をすることにより重要な示唆が得られると思われる．研究 1 で最も MS の効果が顕著に見られた「有能さ」の次元と考えられる「社会的望ましさ」では，統制群においてキャリア志向女性は家庭志向女性に比べ高く評定されていた．一方，「温かさ」の次元と考えられる「個人的親しみやすさ」では，統制群において家庭志向女性はキャリア志向女性に比べ高く評定されていた．つまり，脅威のない統制群においても既に，ある志向を持った特定の女性に対してサブカテゴリー・ステレオタイプが適用されていたと考えられる．そして，脅威状況において，規範的ステレオタイプに一致した家庭志向女性に対してポジティブな評価を，不一致なキャリア志向女性に対してネガティブな評価を向けるとするのならば，「温かさ」の次元は使用しづらく，「有能さ」の方が使用しやすい状況であったと考えられよう．それに対して，研究 2 においては，「社会的望ましさ」を含め，「有能さ」の次元においても「温かさ」の次元においても，統制群では家庭志向女性とキャリア志向女性との間にほとんど評定の違いが見られていない．さらに，伝統的性役割観が強いか平等主義的性役割観が強いかによってもほとんど評定の違いが見られていない．つまり，脅威がない状況においては，ある志向を持った特定の女性に対して，参加者自身の女性集団に対するサブカテゴリー・ステレオタイプや偏見に基づいて判断をしていなかった．このような場合には，脅威状況において，女性をサブカテゴリー化し，サブカテゴリー・ステレオタイプの方向に判断しやすく，かつ，そのサブカテゴリーに基づいた評価を示すことがしやすいと考えられる．そして，伝統的性役割観の強い男性においてはこのような，サブカテゴリー・ステレオタイプの強化と言った方略 2 を取ったと考えられよう．一方，平等的性役割観の強い男性では，家庭志

向女性に対して好意的偏見を向けるため，サブカテゴリー・ステレオタイプを使ってポジティブに評価をしたため，「温かさ」の次元を使用したと考えられよう．研究 3 においても，女性参加者の統制群の結果は，伝統的性役割観が強いか平等主義的性役割観が強いかによる家庭志向女性とキャリア志向女性に対する評定の差はほとんど見られていない．つまり，研究 2 の男性参加者と同様，女性参加者も，脅威がない状況では，ある志向を持った特定の女性に対して，参加者自身の女性集団に対するサブカテゴリー・ステレオタイプや偏見に基づいた判断をしていなかった．このような場合に，脅威がある状況では，女性参加者も男性参加者と同様に，女性をサブカテゴリー化しやすい状況であったと考えられる．そのため，自分自身の規範に沿った形で対象女性を内集団成員と外集団成員と分化させジェンダー・ステレオタイプに基づいた偏見を示すという方略がとられたと考えられよう．つまり，統制群に現れる脅威のない状況で，特定の評定対象人物に対してすでにサブカテゴリー化が生じていたかどうかが，このような研究ごとの結果のパターンの相違を生み出したとすれば，本研究の一連の結果を整合的に解釈することができよう．しかし，統制群においていかなるパターンを示すかについて明確な状況設定をしてない本研究では，この解釈は後付け的解釈であることは否めない．今後は，動機付けや利用可能なジェンダー・ステレオタイプを系統的に操作することによって，脅威のない状況での判断や評価を系統的に操作することにより，複数のジェンダー・ステレオタイプがどのように利用されるのかについて明らかにしていく必要があろう．そして，このような研究を通して，上記の解釈が妥当であるかを検証していく必要があろう．こうした研究の中で，好意的偏見と敵意的偏見の方向性を規定する要因を見いだしていくことができるであろう．

この方向の研究において，ステレオタイプの活性化や適用の違いを調べるための操作として，多くの人たちにとってはジェンダーと無関係と考えられやすい，死の顕現性の操作が有効な手段となろう．多くの研究において MS 仮説が支持されている．また，本研究において，統制群のような通常では出現しない日本人の大学生世代の性役割的偏見を，死の顕現性が引き出すことが明らかとなった．これらのことから，死の顕現性によって偏見や差別の表出が変化するかどうかは，IAT などによる潜在的ステレオタイプの測定と質問紙などによる顕在的ステレオタイプの測定とは異なった形で，通常では出現しない潜在的な偏見や差別行動を捉えるための有効な手段となりうると言えよう．

性役割的偏見や差別は現代の日本においても重要な問題であり，この方向での研究が，ジェンダーに関わる問題を解決するために必要な，ステレオタイプの構造や機能，そして適用に関する基本的な知見を生み出すことが期待できよう．

引 用 文 献

Alexander, M. G., Brewer, M. B., & Herrmann, R. K. (1999). Images and affect: A functional analysis of out-group stereotypes. *Journal of Personality and Social Psychology, 77*, 78-93.

Blair, I. V. (2002). The malleability of automatic stereotypes and prejudice. *Personality and Social Psychology Review, 6*, 242-261.

Burgess, D., & Borgida, E. (1999). Who women are, who women should be: Descriptive and prescriptive gender stereotyping in sex discrimination. *Psychology, Public Policy, and Law, 5*, 665-692.

Fein, S., & Spencer, S. J. (1997). Prejudice as self-image maintenance: Affirming the self through derogating others. *Journal of Personality and Social Psychology, 73*, 31-44.

Fiske, S. T. (1998). Stereotyping, prejudice, and discrimination. In D. T. Gilbert, S. T. Fiske, & G. Lidzey (Eds.), *The handbook of social psychology, 4th ed.* Vol. 2. New York: McGraw-Hill. Pp. 357-411.

Fiske, S. T., Cuddy, A. J. C., Glick, P., & Xu, J. (2002). A model of (often mixed) stereotype content: Competence and warmth respectively follow from perceived status and competition. *Journal of Personality and Social Psychology, 82*, 878-902.

Glick, P., Diebold, J., Bailey-Werner, B., & Zhu, L. (1997). The two faces of Adam: Ambivalent sexism and polarized attitudes toward women. *Personality and Social Psychology Bulletin, 23,* 1323-1324.

Glick, P., & Fiske, S. T. (2001). Ambivalent sexism. *Advances in Experimental Social Psychology.* Vol. 33. San Diego, CA: Academic Press. Pp. 115-188.

Greenberg., J., Pyszczynski, T., & Solomon, S. (1990). Anxiety concerning social exclusion: Innate response or one consequence of the need for terror management? *Journal of Personality and Social Psychology, 43*, 702-709.

Greenberg, J., Simon, L., Porteus, J., Pyszczynski, T., & Solomon, S. (1995). Evidence of a terror management function of cultural icons: The effects of mortality salience on the inappropriate use of cherished cultural symbols. *Personality and Social Psychology Bulletin, 21*, 1221-1228.

Greenberg, J., Solomon, S., & Pyszczynski, T. (1997). Terror management theory of self-esteem and cultural wordviews: Empirical assessments and conceptual refinements. In M. P. Zanna (Ed.), *Advances in Experimental Social Psychology.* Vol. 29. San Diego, CA: Academic Press. Pp. 61-139.

Harmon-Jones, E., Greenberg, J., Solomon, S., & Simon, L. (1996). The effects of mortality salience on intergroup bias between minimal groups. *European Journal of Social Psychology,*

72, 24-36.

Heine, S. J., Harihara, M., & Niiya, Y.（2002）. Terror management in Japan. *Asian Journal of Social Psychology, 5*, 187-196.

Jost, J. T., & Banaji, M. R.（1994）. The role of stereotyping in system-justification and the production of false consciousness. *British Journal of Social Psychology*, *33*, 1-27.

Kunda, Z., & Spencer, S. J.（2003）. When do stereotypes come to mind and when do they color judgment? A goal-based theoretical framework for stereotype activation and application. *Psychological Review, 129*, 522-544.

McGregor, H. Liberman, J. D., Solomon, S., Greenberg, J., Arndt, J., Simon, L., & Pyszczynski, T.（1998）. Terror management and aggression: Evidence that mortality salience motivates aggression against worldview threatening others. *Journal of Personality and Social Psychology, 74*, 590-605.

金児曉嗣（1994）. 大学生とその両親の死の不安と死観 人文研究 大阪市立大学文学部紀要, *46(10)*, 1-28.

沼崎誠・工藤恵理子（1995）. 女性との競争状況が男性の家庭志向型女性・キャリア志向型女性に対する好意に及ぼす効果 日本グループダイナミックス学会第 43 回大会発表論文集, 246-247.

Paulhus, D. L., & Levitt, K.（1987）. Desirable responding triggered by affect. *Journal of Personality and Social Psychology, 52*, 245-259..

Pyszczynski, T., Greenberg, J. & Solomon, S.（2005）. The machine in the ghost: A dual process model of defense against conscious and unconscious death-related thought. In J. P. Forgas, K. D. Williams, & S. M. Laham（Eds.）, *Social motivation: Conscious and unconscious processes.* New York: Cambridge University Press. Pp. 40-54.

Rosenblatt, A., Greenberg, J., Solomon, S., Pyszczynski, T., & Lyon, D.（1989）. Evidence for terror management theory: I. The effects of mortality salience on reactions to those who violate or uphold cultural values. *Journal of Personality and Social Psychology, 57*, 681-690.

Schimel, J., Simon, L., Greenberg, J., Pyszczynski, T., Solomon, S., Waxmonsky, J. & Arndt, J.（1999）. Stereotypes and terror management: Evidence that morality salience enhances stereotypic thinking and preferences. *Journal of Personality and Social Psychology, 77*, 905-926.

Simon, L. Greenberg, J., Harmon-Jones, E., Pyszczynski, T., Solomon, S., Arndt, J., Abend, T.（1997）. Terror management and cognitive-experiential self-theory: Terror management occurs in the experiential system. *Journal of Personality and Social Psychology, 72*, 1132-1146.

Sinclair, L., & Kunda, Z.（2000）. Motivated stereotyping of women: She's fine if she praised me but incompetent if she criticized me. *Personality and Social Psychology Bulletin, 26*, 1329-1342.

Solomon, S., Greenberg, J., & Pyszczynski, T.（1991）. A terror management theory of social behavior: The psychological functions of self-esteem and cultural worldviews. In M. P. Zanna（Ed.）, *Advances in Experimental Social Psychology.* Vol. 24. San Diego, CA: Academic Press. Pp. 91-159.

Spencer, S. J., Fein, S., Zanna, M. P., & Olson, J. M.（2003）. *Motivated social perception: The Ontario Symposium, Vol. 9.* Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associations, Publishers.

鈴木淳子（1991）. 平等主義的性役割態度：SESRA（英語版）の信頼性と妥当性の検討および日米女性比較　社会心理学研究, *6*, 80-87.

鈴木淳子（1994）. 平等主義的性役割態度スケール短縮版（SESRA-S）の作成　心理学研究, *65*, 34-41.

Appendix 1　MS の操作に用いた質問項目

1. 死とは何にもまして予測しがたいものである。
2. 誰かが死んだからといって，世界が変わるわけではない。
3. 死んでしまえば，自分の力を十分に生かすことができなくなる。
4. わたしは心臓発作にひどくおびえている。
5. 死について考えることはめったにない。
6. 人生の計画をたてるにあたって死はたいして重要ではない。
7. 死んでしまえば，もう人生の意義を追及できなくなる。
8. 死んでしまえば，人は忘れ去られてしまうものである。
9. わたしは時々，人生はなんと短いのだろうと考えることがある。
10. 死は複雑な人生のなかでも，もっともわかりにくいものである。
11. わたしは時があまりにも速く過ぎてしまうことを悩むことがある。
12. 死とはもっともつらいものである。
13. 死んでしまえば一人ぽっちである。
14. わたしは苦しんで死ぬことを不安に思っている。
15. 死んだ後のことを考えるとひどく悩んでしまう。
16. 死んでしまえば，もう希望を実現することができない。
17. わたしは人が第三次世界大戦について話しているのを聞くと，ぞっとする。
18. 今死ねば，あらゆる可能性を試さないままに終わってしまう。
19. 死とは最後の不幸なできごとである。
20. 死ぬことを考えて悩んだりはしない。
21. わたしは将来に不安を感じることはない。
22. 死体を見ると恐ろしくなってしまう。
23. 他の人が死について話していても気にならない。
24. 死とは最後の苦しい瞬間である。
25. わたしは手術を極度に受けたくないと思っている。
26. 死については誰もが「わからない」という。
27. わたしはしを少しも恐れていない。
28. 死とは未知のことがらである。
29. 死ぬことはとても寂しいことである。
30. わたしは癌になることを特に恐れていない。
31. 社会全体からみれば人の死など取るに足りないことである。
32. わたしは死をひどく恐いと思っている。

Appendix 2　研究 2, 3 で使用した刺激人物

○能力の高いキャリア志向女性

学歴	都内某4年制国立大学１年生
趣味	アウトドア 水泳
よくみるTV番組	教養番組 ドキュメンタリー
好きな音楽	ジャズ クラシック
休日の過ごし方	ショッピング 美術館めぐり
恋人・配偶者に求めるもの	全てにおいて理解のある人がよい。 自分の世界には干渉して欲しくない。
恋人・配偶者に対する態度	対等の関係 精神的な支えであってほしい
仕事に対する態度	何があっても仕事は続ける 培った専門的知識を生かした仕事をしたい 人の上に立って仕事をしたい
語学資格	英検準１級 TOEIC 850点
仕事に関する資格	情報処理技術者一種
将来	在学中から将来に備えて、会計士資格などの資格をとりたい。女性ももっと社会に出て活躍するべきだと思うので、バリバリ働いて、キャリアアップを目指したい。仕事の支障となるなら、子供は諦めることも考慮している。
他者からの評価	学業成績は非常に優秀であり、自分の生き方にはっきりした目標と自信を持っている。しかし神経質で、時折ヒステリーを起こしてしまうこともある。 性格はさっぱりしていて､好奇心・向上心に富み､エネルギッシュな行動派である。

○能力の高い家庭志向女性

学歴	都内某4年制国立大学１年生
趣味	料理､特にお菓子作り ビーズアクセサリー作り
よくみるTV番組	教養番組 ドキュメンタリー
好きな音楽	J-POP
休日の過ごし方	ショッピング ファッション雑誌をみる
恋人・配偶者に求めるもの	経済力、優しさ、誠実さ、包容力 リーダーシップ、隠し事はしないで欲しい
恋人・配偶者に対する態度	守られたい、引っ張っていってほしい 何よりも大事で、なくてはならない存在であり、最優先したい 年収は、最低一千万は欲しい
仕事に対する態度	結婚したら辞める 楽しい環境で、楽して働きたい グループの一員として仕事ができればいい
語学資格	英検準１級 TOEIC 850点
仕事に関する資格	情報処理技術者一種
将来	在学中は、旅行とかスキーとか社会にでたらなかなかできないことをたくさんやりたい。卒業したら女の人にふさわしく、結婚して、夫になる人を支えながら、いい母親となって、平凡でも幸せな家庭を作りたい。
他者からの評価	学業成績は非常に優秀であり、協調性があり周囲への配慮は細やかである。しかし神経質で、時折ヒステリーを起こしてしまうこともある。 基本的にはひかえめで古典的な日本人女性の良さをもっていると言えるが、自ら積極的に行動するというよりは、成り行きや人に任せるなど周囲に流されやすいタイプである。

Ⅳ．無能な人は温かいか？　冷たい人は有能か？

－死すべき運命の顕現化と平等主義的性役割信念が同性/異性の評価に及ぼす効果－

沼崎　誠

（首都大学東京）

存在脅威管理理論から，「死すべき運命の顕現化（mortality salience：以下 MS）」が生じると自分の文化的世界観を守ろうとする動機付けが高まり，その結果，多くの人に共有されているステレオタイプが活性化され偏見が生じやすくなることが実証的に示されている．（e.g., Greenberg, Solomon, & Pyszczynski, 1997; Pyszczynski, Greenberg, & Solomon, 2005; Solomon, Greenberg, & Pyszczynski, 1991; 本報告書のⅢも参照）．本研究では，MS 操作を行ったときの，アンビバレントなステレオタイプ（e.g., Fiske, Cuddy, Glick, & Xu, 2002; Glick & Fiske, 2001; 本報告書のⅢの参照）に関わるステレオタイプの活性化と偏見について検討を行った．

本研究で取り上げるステレオタイプは，実証的に存在が確認されている「温かいが無能である」という家父長的ステレオタイプと，「有能であるが冷たい」という嫉妬的ステレオタイプである（e.g., Fiske, et al., 2002; Glick & Fiske, 2001）．ジェンダー・ステレオタイプに当てはめると，伝統的女性ステレオタイプの「温かい女性は能力が低い」というステレオタイプと非伝統的女性ステレオタイプの「有能な女性は冷たい」というステレオタイプである（Glick, Diebold, Bailey-Werner, & Zhu, 1997）．本研究で問題とするのは，このようなステレオタイプが，「能力が低い人は温かい」や「冷たい人は能力が高い」といった逆の方向にも機能するのかという疑問である．つまり，「温かさ」や「有能さ」の次元に関してネガティブな情報を見せた場合，別の次元ではポジティブな属性を想定するということがあるであろうか．もし，MS 状況でステレオタイプが活性化しているのならば，このような現象が強まる可能性がある．本研究ではこの点を実証的に検討する．

さらに，女性に対するステレオタイプ化は女性よりも男性の方がしやすいことが知られている．その一方で，ポジティブな属性は内集団成員（女性が女性に対して判断する場合や男性が男性が男性に対して判断する場合）に帰属しやすいことも知られている．このため，ネガティブな属性を見せたときにポジティブな属性を帰属するのは，女性に対しては女性が，男性に対しては男性がしやすい可能性がある．また，男性が能力の低いことは女性に比べ伝統的社会的規範により反するので，MS 時によりネガティブな評価を受ける可能性もある．同様に，女性が冷たいことは男性に比べて伝統的社会的規範により反するので，MS 時によりネガティブな評価を受ける可能性がある．これらの点を検討するために，能力が低いという情報が女性と男性に対する温かさ評定やその他の評定にどのように影響

を及ぼすかを男女大学生を実験参加者にして検討した．さらに，平等主義的性役割信念により上記傾向に差が見られるか探索的に検討した．

方　法

実験計画　独立変数としては，死すべき運命の顕現化（MS 群 vs.　統制群）×評定対象者の性（男 vs. 女）×実験参加者の性（男 vs. 女）の参加者間要因に加え，個人差要因として平等主義的性役割観を加えた．

実験参加者　　一般教養の授業を受講している男子大学生 63 名，女子大学生 35 名（東京都立大学・東京都立短期大学）．本実験の約 10 週間前の講義において，大半の実験参加者（男子大学生 57 名・女子大学生 33 名）には集団で平等主義的性役割観尺度に回答させてあった．

手続き　授業時間中に集団で実施した．カバー・ストーリーとして，対人認知における個人差の研究であると目的を伝えた．表紙において，実験参加同意書を取得し，その後，3 部構成になっている質問紙に回答させた．

第 1 部は個人差を測定する尺度と称して，複数の個人差尺度に回答させた．その最後の尺度において MS の操作を行った．MS 群には，死に関する複数の尺度（e.g.，金児，1994）から宗教など文化的価値観を含む項目を除いた 32 項目に回答させた（本報告書Ⅲ．Appendix 1 参照）．統制群には，自尊心や抑鬱関連感情を含まない感情チェックリスト 31 項目に回答させた．

第 2 部は思考心理学の調査と称して，思考課題 3 問が含まれていた．これは，死すべき運命の顕現化の操作は直後よりも死の思考を抑圧した後の方が効果を持つという知見に基づき含めた（Greenberg et al., 1997）．

第 3 部は対人認知の研究であるとして，4 人の人物の 4 つの行動・態度記述文を読ませ，その人物に対する印象を形成させた．約半数の実験参加者には，その人物が男性であると想定させた上で回答させた．残りの約半分の実験参加者には，その人物が女性であると想定させ回答させた．

「冷たい人」の情報として，予備実験において「冷たい」という属性を示し「男性的女性的」という属性ではほぼ中点を取る 2 つの情報と，予備実験において「温かさ」「有能さ」「男性性女性性」においてほぼ中点を取る，これら次元に関して情報価の少ないと考えられる，2 つの情報が含まれていた．「無能な人」の情報として，予備実験において「有能さ」という属性を示し「男性的女性的」という属性ではほぼ中点を取る 2 つの情報と，予備実験において「温かさ」「有能さ」「男性性女性性」においてほぼ中点を取る，これら次元に関して情報価の少ないと考えられる，2 つの情報が含まれていた．「ニュートラ

ルな人」の情報として，予備実験において「温かさ」「有能さ」「男性性女性性」においてほぼ中点を取る，これら次元に関して情報価の少ないと考えられる，4 つの情報が含まれていた（人物情報に関しては Appendix 1 を参照）.

評定する人物の第 1 番目と第 3 番目の人物は共通の「ニュートラルな人」であり，第 2 番目と第 4 番目に「冷たい人」と「無能な人」を入れた．約半数の実験参加者には「冷たい人」を 2 番目に回答させ，残りの半数の実験参加者には「無能な人」を 2 番目に回答させ，順序をカウンターバランスさせた.

従属変数として性格に関する SD 尺度 10 項目に 9 件法で当てはまるかどうかに回答させた.「温かさ」認知を測定する項目として,「親しみやすい-親しみにくい」「つめたい-あたたかい」「感じの良い-感じの悪い」の 3 項目が,「有能さ」認知を測定する項目として,「知的な-愚かな」「有能な-無能な」「能力の高い-能力の低い」の 3 項目が,「社会的望ましさ」認知を測定する項目として,「誠実な-不誠実な」「責任感の強い-無責任な」の 2 項目が,「活動性」認知を測定する項目として,「外向的-内向的」「積極的-消極的」の 2 項目が含まれていた．これらの SD 項目に加えて,「友達として」「アルバイト仲間として」「職場の同僚として」望ましいかどうかについて,「全く望ましくない(1)」から「非常に望ましい(9)」までの 9 件法で回答させた.

このセッションの後，この実験実施の背景となる存在脅威管理理論とステレオタイプに関する理論の講義をし，ディブリーフィングを行った後，質問に答えて実験を終了した.

結果 1：能力が低い人に対する評定

事前分析

「無能な人」は温かいと評定されたかを見るために，ニュートラルな人物と温かい人物の「温かさ」の指標に対して人物を実験参加者内要因とした 1 要因の分散分析を行った．その結果，要因の主効果が有意で($F(2, 194)=42.77$, $p<.001$)，下位分析の結果,「無能な人($M=5.79$)」は 2 人の「ニュートラルな人(Ms=4.74, 5.37)」に比べてどちらとも有意に(ps<.01)，温かいと評定されていた.

この結果は無能な人は温かいと評定されやすいことを示しており,「温かさ」次元と「有能さ」次元が対人認知においてアンビバレントになりやすいと指摘に合致するものであった.

ニュートラル人物に対して 2 × 2 × 2（参加者の性×対象者の性× MS）の分散分析を行ったところ，一方の人物に関しては，MS や対象者の性を含む効果で有意になったものが見られたので，これ以降の分析では，無能な人物の評定値からニュートラル人物 2 名の評定値の平均値を引いた差得点を分析に用いた.

個人差を要因に入れない分析

「温かさ」と「友人として望ましいか」の評定に対して，2 × 2 × 2（参加者の性×対象者の性× MS）の分散分析を行った．「友人として望ましいか」の評定には有意になった効果はなかった（$Fs<1$, *ns*）．「温かさ」評定では，参加者の性×対象者の性の交互作用効果に有意に近い効果が見られた（$F(1, 97)=3.74$, $p=.056$）．この効果は，女性が女性に対して評定した場合（$M=1.51$）に，他の群に比べ（$Ms=0.46$, 0.73, 0.34），ニュートラル人物に比べ温かいと評定したことによる効果である．MS を含む効果で有意になったものはなく，全体で見た場合，死すべき運命の顕現化が高まった場合にアンビバレントなステレオタイプ化が強くなるという仮説は支持されなかった．

男性参加者の平等主義的性役割観を要因にした分析

平等主義的性役割観には性差が見られたので，男女ごとに分析を行った．性役割観× MS ×対象人物の性の全ての交互作用効果を含む重回帰分析を行った．その際，MS に関しては有り群を"1"，無し群を"-1"として投入し，対象人物の性では男性を"1"，女性を"-1"として投入した．Figure は，回帰式に上記値と，伝統的性役割観の強い人を-1，平等主義的性役割観の強い人は 1 を投入し，期待値を求めプロットした．

温かさ関連評定　「温かさ」の指標に重回帰分析を行った結果，性役割観の効果が有意に近く（$F(1, 49)=3.65$, $p=.062$），性役割観× MS の交互作用効果が有意であったが（$F(1, 49)=5.46$, $p<.05$），性役割観×対象人物の性× MS の交互作用効果が有意であることから制限を受ける（$F(1, 49)=6.21$, $p<.01$）．3 要因の交互作用効果に関する結果は Figure 1 に示した．ここからわかるとおり，女性に対する評定では性役割観や MS によりほとんど差が見られなかったが，男性に対する評定では，伝統的性役割観者の強い男性では，統制群においてニュートラル人物に比べて温かいと評定されていたものが MS 群では差がなくなるのに対して，平等主義的性役割観の強い男性では，MS 群においてニュートラル人物にくらべて温かいと評定することによる効果であった．

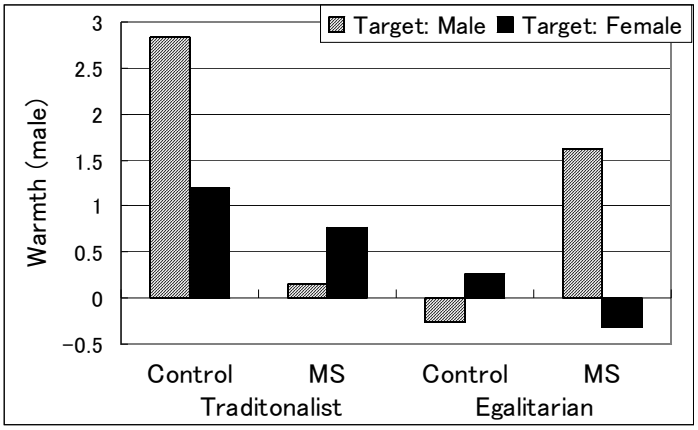

Figure 1　Male participants' ratings for warmth as a function of MS, participants' s sex, and target's sex

友人としての望ましさ評定に対して，重回帰分析を行ったところ，性役割観×対象人物の性× MS の交互作用効果が有意であった（$F(1, 49)=9.44$, $p<.01$）．3 要因の交互作用効果に関する結果は Figure 2 に示した．ここからわかるとおり，「温かさ」評定とほぼ同様の結果であり，女性に対する評定では性役割観と MS によってほとんど差が見られなかった．一方，伝統的性役割観者の強い男性では，統制群においてニュートラル人物に比べて友人として望ましいと評定されていたものが MS 群では差がなくなるのに対して，平等主義的性役割観の強い男性では，統制群ではニュートラル人物に比べ友人として望ましくないと評定してものが，MS 群においてはニュートラル人物に比べて友人として望ましいと評定したことによる効果であった．

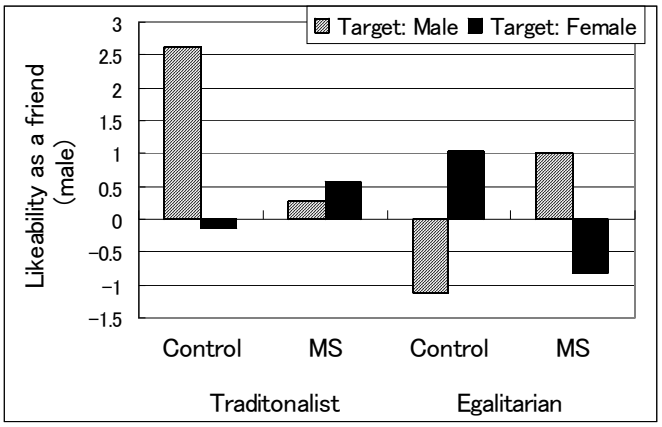

Figure 2 Male participants' ratings for likeability as a friend as a function of MS, participants' s sex, and target's sex

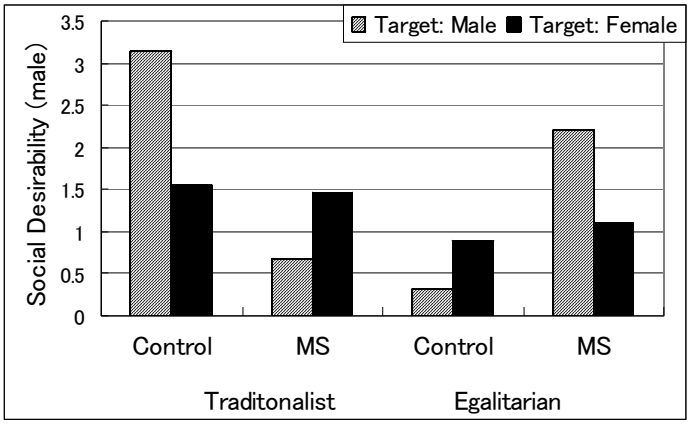

Figure 3 Male participants' ratings for social desirability as a function of MS, participants' s sex, and target's sex

その他の評定　その外の評定値に対しても同様の分析を行った．「社会的望ましさ」では，性役割観× MS の交互作用効果が有意であったが（$F(1, 49)=6.77$, $p<.05$），性役割観×対象人物の性× MS の交互作用効果が有意であることから制限を受ける（$F(1, 49)=5.21$, $p<.05$）．この効果の結果を Figure 3 に示した．ここからわかるとおり，「温かさ」や「友人として望ましさと」とほぼ同様の結果が得られていた．「活動性」でも，性役割観× MS の交互

作用効果が有意に近かったが（$F(1, 49)=3.96$, $p=.052$），性役割観×対象人物の性× MS の交互作用効果が有意であることから制限を受ける（$F(1, 49)=4.18$, $p<.05$）．この効果の結果を Figure 4 に示した．ここからわかるとおり，女性に対する評定では性役割観や MS は効果は持っていなかった．一方，男性に対する評定では，これまでの結果とは逆であり，伝統的性役割観が強い男性では MS 群の方が，平等主義的性役割観の強い男性では統制群の方が，ニュートラル人物に比べ無能な人物を相対的に活動的であると評定したことによる効果であった．同僚としての望ましさでは，性役割観の効果に有意に近い効果が見られたのみであった（$F(1, 49)=3.39$, $p=.072$）．

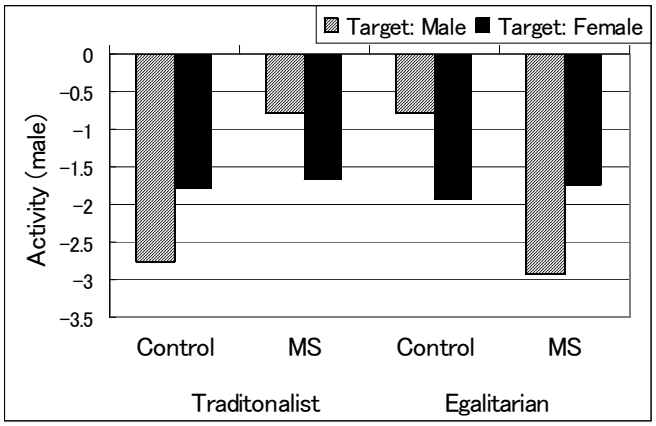

Figure 4 Male participants' ratings for activity as a function of MS, participants' s sex, and target's sex

平等主義的性役割観を要因にした分析：女性

温かさ関連評定　男性と同様の分析をした結果，「温かさ」の指標で性役割観の効果が有意であったが（$F(1, 25)=4.83$, $p<.05$）．性役割観× MS の交互作用効果に有意に近い効果が見られるため制限を受ける（$F(1, 25)=4.09$, $p=.054$）．この効果に関する結果は Figure 5 に示した．平等主義的性役割観の強い人が統制群ではニュートラル人物に比べ相対的に温かいと評定したものが，MS 時にはその効果が消えることによるものであった．

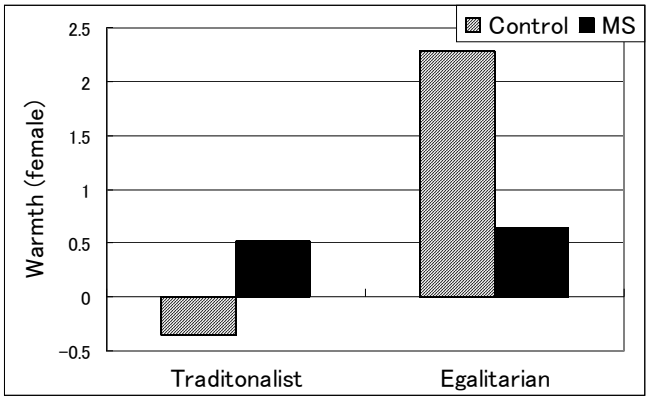

Figure 5　Female participants' ratings for warmth as a function of MS, participants' s sex, and target's sex

友人として望ましいかどうかの評定では，性役割観の効果と性役割観×対象人物の性の交互作用効果と MS ×対象人物の性の交互作用効果が有意であったが（$F(1, 25)=4.27$, $p<.05$; $F(1, 25)=4.98$, $p<.05$; $F(1, 25)=4.79$, $p<.05$），性役割観×対象人物の性× MS の交互作用効果が有意に近いことから制限を受ける（$F(1, 25)=3.78$, $p=.063$）．この効果の効果は Figure 6 に示した．ここからわかるとおり，伝統的な性役割観の強い女性が統制群においては，友人としてニュートラル人物に比べ非常に望ましくないと評定していたものが死すべき運命の顕現化があるとそのような傾向が見られなくなることによるものであった．

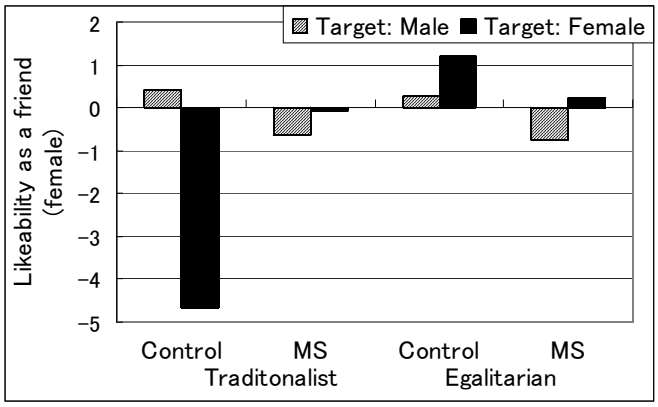

Figure 6　Female participants' ratings for likeability as a friend as a function of MS, participants' s sex, and target's sex

その他の評定　その他の評定では，同僚として望ましさにおいて，性役割観の効果が有意であったが（$F(1, 25)=9.33$, $p<.01$），性役割観× MS の効果も有意に近く制限を受ける（$F(1, 25)=3.91$, $p=.059$）．この効果の効果は Figure 7 に示した．伝統的性役割観の強い女性が統制群では同僚として望ましくないと評定したものが，MS 時にはその効果が消えることによるものであった．

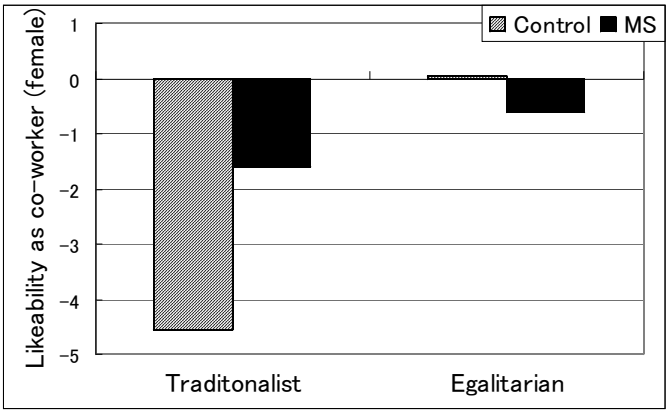

Figure 7　Female participants' ratings for likeability as a co-worker as a function of MS, participants' s sex, and target's sex

結果２：冷たい人に対する評定

事前分析

「冷たい人」は有能であると評定されたかを見るために，ニュートラル人物と冷たい人物の「有能さ」の指標に対して人物を実験参加者内要因とした 1 要因の分散分析を行った．その結果，要因の主効果が有意で（$F(2, 194)=15.97$, $p<.001$），下位分析の結果，「冷たい人（$M=5.79$）」は 2 人の「ニュートラルな人（Ms=4.24, 5.28）」に比べてどちらとも有意に（ps<.05），有能であると評定されていた．

ニュートラル人物に対して 2 × 2 × 2 の分散分析を行ったところ，一方の人物に関しては，MS や対象者の性を含む効果で有意になったものが見られたので，これ以降の分析では，無能な人物の評定値からニュートラル人物 2 名の評定値の平均値を引いた差得点を分析に用いた．

個人差を要因に入れない分析

「有能さ」と「同僚として望ましいか」の評定に対して 2 × 2 × 2（参加者性×対象者性× MS）の分散分析を行った．「同僚として望ましさ」の評定において MS の主効果に有意に近い効果が見られたのみであった（$F(1, 97)=2.99$, $p=.087$）．この効果は，統制群（$M=-0.99$）に比べ MS 群（$M=-1.82$）では同僚としての望ましさがニュートラル人物と比べ低いことによるものである．この他の効果には有意または有意に近い効果はなく，全体で見た場合，死すべき運命の顕現化が高まった場合にアンビバレントなステレオタイプ化が強くなるという仮説は支持されなかった．

男性参加者の平等主義的性役割観を要因にした分析

平等主義的性役割観には性差が見られたので，男女ごとに分析を行った．性役割観× MS ×対象人物の性の全ての交互作用効果を含む重回帰分析を行った．その際，MS に関しては有り群を"1"，無し群を"-1"として投入し，対象人物の性では男性を"1"，女性を"-1"として投入した．標準化をする場合には，男女ごとに再度標準化を行った．Figure は，回帰式に上記値と，伝統的性役割観の強い人を-1，平等主義的性役割観の強い人は 1 を投入し，期待値を求めプロットした．

有能さ関連評定　「有能さ」の指標に回帰分析を行った結果，性役割観の効果が有意に近かったが（$F(1, 49)=3.31$, $p=.075$），性役割観× MS の交互作用効果が有意であることから制限を受ける（$F(1, 49)=4.61$, $p<.05$）．それに加え，性役割観×対象者性× MS の交互作用効果も有意に近かった（$F(1, 49)=2.78$, $p=.102$）．この効果は Figure 8 に示した．ここからわかるとおり，2 要因の交互作用効果は，伝統的性役割観の強い男性では，統制群では MS 群では冷たい人をニュートラル人物に比べより有能さを高く評定するのに対して，平等主義的性役割観の強い男性では，統制群に比べ MS 群では冷たい人をニュートラル人物に比

べより有能さを高く評定することによる効果である．3 要因の交互作用効果は，その効果が男性において強いことによるものであった．

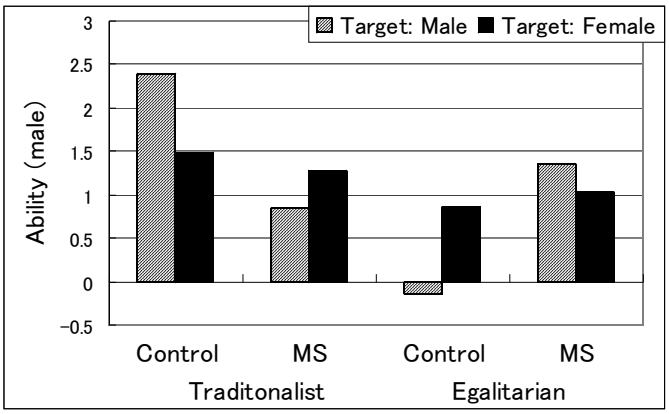

Figure 8. Male participants' ratings for ability as a function of MS, participants' s sex, and target's sex

同僚としての望ましさ評定に対して，重回帰分析を行った結果，性役割観×対象者性×MS の交互作用効果が有意であった（$F(1, 49)=6.96$, $p<.05$）．この効果は Figure 10 に示したように，伝統的性役割観が強い男性において，統制群では，女性に比べ男性を同僚としての望ましさを高く評定したものが，死すべき運命の顕現化があると，女性の方を男性に比べ同僚として望ましいと評定したことによる効果である．

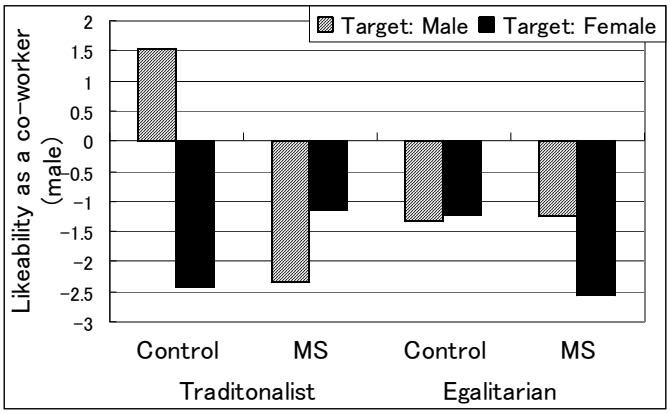

Figure 9. Male participants' ratings for likeability as a co-worker as a function of MS, participants' s sex, and target's sex

その他の評定　その他の評定では，活動性の評定で性役割観×対象者性× MS の効果が有意であった（$F(1, 49)=4.58$, $p<.05$）．この効果は，Figure 10 に示したように，伝統的性役割観が強い男性では統制群の方が，平等主義的性役割観の強い男性では MS 群の方が，ニュートラル男性に比べ冷たい男性を相対的に活動的でないと評定したことによる効果である．

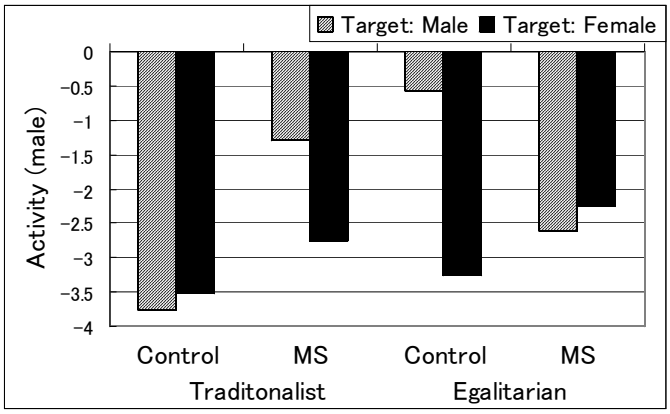

Figure 9. Male participants' ratings for activity as a function of MS, participants' s sex, and target's sex

女性参加者の平等主義的性役割観を要因にした分析

男性と同様な分析をした結果,「有能さ」評定においてのみ，性役割観×対象者性× MS の交互作用効果に有意に近い効果が見られた（$F(1,\ 25)=3.10$, $p=.090$）．この効果に関する結果は Figure 11 に示した．ここから分かるとおり，男性に対する評定は性役割観や MS の影響を受けないが，女性に対する評定では，統制群において平等主義的性役割観が強い参加者ではニュートラルな人物に比べて能力が高いと評定していたものが，MS 時にはその効果がなくなることによるものであった．

この項目以外の評定で有意または有意に近い効果は見られなかった．

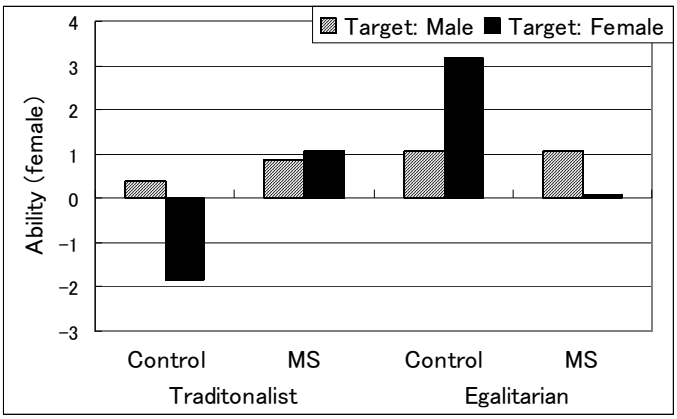

Figure 10 Female participants' ratings for ability as a function of MS, participants' s sex, and target's sex

考　察

本研究では,「温かい女性は能力が低い」や「能力の高い女性は冷たい」といったステレオタイプが，死すべき運命を顕現化させると活性化が強まる結果,「能力が低い女性は温かい」や「冷たい女性は能力が高い」といった逆の方向にも機能するのかということを検討した．その結果，男女を問わず，温かい人は能力が低く見られ，冷たい人は能力が高

く見られ，「有能さ」と「温かさ」がアンビバレントな関係になりやすいという結果は得られたが，MS 時にその傾向が強くなるという結果は得られなかった．本研究ではステレオタイプの活性化という観点からの仮説を検討したが，測度として測定したのは，統制が可能な評価的な顕在的な反応であり，むしろ偏見の要素が強く現れたと考えられる．性役割観を含めた本研究で得られた結果を，偏見の観点から見ると，興味深い結果が得られたと思われる．

顕在的な偏見と考えた場合には，次のような議論を考慮しておく必要があろう．まず第 1 に，「有能である」ことや「温かくある」ことは文化的規範である．とすれば，それに反する人に対しては，文化的世界観の違反者と考えることができ，死すべき運命の顕現化が生じるとネガティブな方向に評定が変化することが予測される．第 2 に，「男性は有能であるべき」「女性は温かくあるべき」といった文化的規範の方が伝統的な意味で規範的ステレオタイプであるため，「女性は有能であるべき」「男性は温かくあるべき」といった文化的規範より，も強いと考えられる（e.g., Burgess & Borgida, 1999）．この規範的ステレオタイプは伝統的なものであるため，伝統的性役割観が強い人たちの間でより強く，平等主義的性役割観の強い人ではその差が小さくなっていることが予測される．第 3 に，内集団の異端者を排除するという黒い羊効果の観点から考えると（e.g., Marques & Paez, 1994; Marques, , Yzerby, & Leyens, 1988; 大石, 2003），内集団に対してこうあるべきだと考えられている属性は多くの人に共有されているはずであり，それに反することは排除の対象となりやすいと考えられる．そのため，「男性は有能であるべき」という規範に反する男性を排除しやすいのは男性であり，「女性は温かくあるべき」という規範に反する女性を排除しやすいのは女性であると予測される．第 4 に，これらの過程の上に，記述的ステレオタイプの活性化から生じる「無能な人は温かい」「冷たい人は有能」という効果が加算されるはずである．

これらの視点を取れば，本研究の MS の効果に関しての結果はある程度整合的に解釈できると思われる．以下，「能力が低い人」と「冷たい人」をわけてそれぞれに対して考察を加えたい．

能力が低い人に対する評定に関して

男性参加者においては，「温かさ」と「友人として望ましいか」の両方の評定で，また，それに加え，「社会的望ましさ」と「活動性」で性役割観×対象者の性× MS の 3 要因の交互作用効果が得られた．女性に対する評定では，伝統的性役割観の強い人も平等主義的性役割観の強い人も同様に，死すべき運命の顕現化の効果が弱くほとんど差が見られなかった．これは当初の目的であるステレオタイプの活性化というものが生じるということに疑問を投げかけるものであるが，男性に対する評定では伝統的性役割観の強い男性と平等主義的性役割観の強い男性ではパターンに大きな違いが見られた．伝統的性役割観の強い男性では，死すべき運命の顕現化がない状況では，能力の低い男性を相対的に温かく友人

として望ましく社会的に望ましい性格である一方で活動性は低いと評定していたものが，死すべき運命の顕現化が起こった状況では，能力の低い男性に対する評価を下げる方向に変化していた．一方，平等主義的性役割観の強い男性では，死すべき運命の顕現化がない状況では，能力の低い男性に対して相対的に温かくなく友人として望ましくなく社会的に望ましくない性格である一方で活動性は高いと評定していたものが，死すべき運命の顕現化状況では，能力の低い男性に対する評価をあげる方向に変化していた．

伝統的性役割観の強い男性は，「男性は有能であるべき」だという社会的規範を内在化している人であると考えられる．そのため，死すべき運命の顕現化がない状況では，そのような人を女性的な男性と見なし女性的な属性を付与しているが，死すべき運命の顕現化が生じ文化的世界観を防衛しなくてはならなくなると，通常時には見られない，能力の低い男性を拒否する方向に，好意的な評価を低下させる方向に変化したと考えることができよう．

一方，平等主義的性役割観の強い男性の結果は，ジェンダーばかりではなくどのような観点においても「人を平等に扱わなくてはいけない」という規範を持っているとすれば次のような解釈が可能であろう．死すべき運命の顕現化がない状況では，社会的に望ましくない能力の低い男性に対して評価を低くしていたものが，死すべき運命が顕現化した状況では，上記のような規範が強まり，平等に扱わなくてはいけない対象である保護の対象として，好意的な評価をする一方で，活動性は低く評定したと解釈できるであろう．

それでは，なぜ女性に，このような評価が適用されないのであろうか．いくつかの可能性が考えられよう．第 1 に，女性が能力の低いことは，伝統的性役割観が強い人にとっても平等主義的性役割観の強い人にとっても規範に反していなかったため評価に変化が生じなかった可能性が考えられよう．第 2 に，そのような人物はニュートラルな人物に比べ保護の対象としてみられなかった可能性が考えられよう．第 3 に，同性を評定する場合に比べ，異性を評定する際には判断の材料が必要であり，本研究では情報量が少なすぎた可能性が考えられよう．これら可能性を検討するためには，情報量を多くして再度検討する必要があろう．

女性参加者では，統制群の伝統的性役割観の強い女性は，能力が低い女性を友人としては非常に望ましくないと評定していた．このパターンは有意ではないものの，仕事仲間としての望ましさでも得られていた．一方，平等主義的性役割観の強い女性では男女を問わず, 統制群において能力の低い人の温かさをニュートラル人物に比べて高く評定していた．この結果は，男性と同様に，女性においても同性に対する評価が MS によって変化しやすいこと，および，統制群において伝統的性役割観と平等主義的性役割観に差が見られやすいことを示唆するものであるが，解釈は困難であり，女性の実験参加者の人数を増やし，結果が再現するかどうか再度検討する必要があろう．

冷たい人に対する評定に関して

男性参加者では，女性に対する評定ではあまり差が見られなかったが，ここでもまた男性に対する評定で性役割観と MS が効果を持っていた．平等主義的性役割観の強い男性では MS の効果を相対的に受けないのに対して，伝統的性役割観の強い男性では，統制群においては MS 時に冷たい男性の能力を高く評価し，同僚としての望ましさを高く評定したものが，MS 時には能力評価を下げ，他の群と同様に同僚としての望ましさを低くしていた．この結果は，通常時では伝統的性役割観の高い男性は冷たい男性を有能な人物として許容していたものの，MS 時には規範に外れた人物として評価を下げたと考えることができよう．

女性参加者では，平等主義的性役割観の強い女性は，統制群において，冷たい女性の能力を高く評定していたが，MS 時にはその評価を下げていた．これも同性に対する評定が MS によって影響を受けること示唆している．通常時では平等主義的性役割の強い女性は冷たい女性を有能な人物として許容していたものの，MS 時には規範に外れた人物として評価を下げたと考えることができよう．しかし，女性参加者の結果は弱いもので，必ずしも一貫したものではなく，女性の実験参加者の人数を増やし，結果が再現するかどうか再度検討する必要があろう．

今後の研究課題

本研究は，当初の目的として，MS 時に異性に対するステレオタイプの適用が強まるかどうかを検討を目指したが，そのような効果は得られなかった．むしろ，統制群での同性に対する評価が，MS の操作や性役割観によって違いが見られていた．従来のステレオタイプや偏見の研究においては，少数の例外（例えば「黒い羊効果」）を除き，男性の女性に対するステレオタイプや偏見が取り上げられることが多かった．しかし，本研究の結果は，本報告書のⅠやⅤと同様に，同性に対するステレオタイプ化や偏見，また，同性の中のサブカテゴリーも視野に入れることにより，ジェンダーに基づく差別に有意義な知見をもたらす可能性を示唆するものであり，今後は，同性に対する偏見やステレオタイプ化も視野に入れた研究を精力的に行う必要があろう．

引　用　文　献

Burgess, D., & Borgida, E.（1999）. Who women are, who women should be: Descriptive and prescriptive gender stereotyping in sex discrimination. *Psychology, Public Policy, and Law,* 5, 665-692.

Fiske, S. T.（1998）. Stereotyping, prejudice, and discrimination. In D. T. Gilbert, S. T. Fiske, & G. Lidzey（Eds.）, *The handbook of social psychology, 4th ed.* Vol. 2. New York: McGraw-Hill. Pp. 357-411.

Fiske, S. T., Cuddy, A. J. C., Glick, P., & Xu, J.（2002）. A model of (often mixed) stereotype

content: Competence and warmth respectively follow from perceived status and competition. *Journal of Personality and Social Psychology, 82*, 878-902.

Glick, P., Diebold, J., Bailey-Werner, B., & Zhu, L. (1997). The two faces of Adam: Ambivalent sexism and polarized attitudes toward women. *Personality and Social Psychology Bulletin, 23,* 1323-1324.

Glick, P., & Fiske, S. T. (2001). Ambivalent sexism. *Advances in Experimental Social Psychology.* Vol. 33. San Diego, CA: Academic Press. Pp. 115-188.

Greenberg, J., Solomon, S., & Pyszczynski, T. (1997). Terror management theory of self-esteem and cultural worldviews: Empirical assessments and conceptual refinements. In M. P. Zanna (Ed.), *Advances in Experimental Social Psychology.* Vol. 29. San Diego, CA: Academic Press. Pp. 61-139.

Jost, J. T., & Banaji, M. R. (1994). The role of stereotyping in system-justification and the production of false consciousness. *British Journal of Social Psychology*, *33*, 1-27.

Kunda, Z., & Spencer, S. J. (2003). When do stereotypes come to mind and when do they color judgment? A goal-based theoretical framework for stereotype activation and application. *Psychological Review, 129*, 522-544.

金児曉嗣 (1994). 大学生とその両親の死の不安と死観 人文研究 大阪市立大学文学部紀要, *46*(10), 1-28.

Marques, J. M., & Paez, D. (1994). The "Black Sheep Effect": Social categorization, rejection of ingroup deviates, and perception of group variability. *European Review of Social Psychology, 5,* 37-68.

Marques, J. M., Yzerby, V. Y. & Leyens, J. F. (1988). The black sheep effect: Judgemental extremity towards ingroup members as a function of group identification. *European Journal of Social Psychology, 18,* 1-16.

大石千歳 (2003). 社会的アイデンティティ理論による黒い羊効果の研究 風間書房

Pyszczynski, T., Greenberg, J. & Solomon, S. (2005). The machine in the ghost: A dual process model of defense against conscious and unconscious death-related thought. In J. P. Forgas, K. D. Williams, & S. M. Laham (Eds.), *Social motivation: Conscious and unconscious processes.* New York: Cambridge University Press. Pp. 40-54.

Sinclair, L., & Kunda, Z. (2000). Motivated stereotyping of women: She's fine if she praised me but incompetent if she criticized me. *Personality and Social Psychology Bulletin, 26*, 1329-1342.

Solomon, S., Greenberg, J., & Pyszczynski, T. (1991). A terror management theory of social behavior: The psychological functions of self-esteem and cultural worldviews. In M. P. Zanna (Ed.), *Advances in Experimental Social Psychology.* Vol. 24. San Diego, CA: Academic

Press. Pp. 91-159.

Spencer, S. J., Fein, S., Zanna, M. P., & Olson, J. M.（2003）. *Motivated social perception: The Ontario Symposium, Vol. 9.* Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associations, Publishers.

Appendix 1 刺激人物

冷たい人の刺激文

・挨拶をしない.（「冷たい」情報）
・映画をよく見る.
・他者に全く同情を示さない.（「冷たい」情報）
・食べ物に好き嫌いがない.

無能な人の刺激文

・要点をまとめて話せない.（「無能さ」情報）
・朝は目覚ましで起きる.
・アルバイトで段取り・手際が悪い.（「無能さ」情報）
・駅まで自転車で通っている.

ニュートラル人物の刺激文１

・夜更かしをよくする
・夏はＴシャツをよく着る
・ストレスがたまりやすい
・髪を染めている

ニュートラル人物の刺激文２

・最近，寝不足である.
・コンタクトを着用している.
・枕が変わると眠れない.
・ペットボトル飲料をよく買ってしまう.

Ⅴ．女性は女性に対して偏見を示すか？
－活性化した自己表象が女性への評価とステレオタイプ化に及ぼす効果－

高林　久美子	沼崎　誠	小野　滋	石井国雄
（一橋大学大学院）	（首都大学東京）	（(株）日能研）	（東京都立大学大学院）

近年，男女平等の意識の高まりにより，社会進出を果たす女性はますます増え，働く女性は今では決して珍しい存在ではなくなってきた．しかし，そのような社会進出を遂げた女性は，伝統的な性役割観から完全に自由になったといえるのだろうか.

本研究では，現代の女性の多くは，伝統的な女性としての自己と非伝統的な女性としての自己の両方を保持し，それゆえに，女性であっても，ある状況において同性のある女性に対して偏見を示したり，ステレオタイプ的な判断を行う可能性があることを検討した.

従来の女性に対する偏見研究

従来，ジェンダーに基づくステレオタイプや偏見の研究は，主に男性による女性に対するステレオタイプの適用や偏見に力点が置かれてきた．それは，男性の女性への偏見は女性の社会進出の大きな障害であったために, 男女平等を実現しなければならない時代においては, 男性がいつ，どのようにして女性に対して偏見を示すのか，ということを解明することが重要な課題であったからだろう．男性が女性に対して示す偏見を検討した研究としては，男性実験参加者は，男性型の職業に対しては女性よりも男性のほうを雇用しやすいことや（e.g., Glick, Zion, & Nelson, 1988; Eagly, Mladinic, & Otto,1991），女性からネガティブフィードバックを受けた男性実験参加者は，女性の評価者の評価能力を低く見積もること（e.g., Sinclair & Kunda, 2000）を示した研究などがある．本邦においても，女性と競争状況におかれた男性は，競争状況におかれない男性よりも，キャリア志向女性に対して偏見的態度を表出することが確認されている（沼崎・工藤, 1995, 2003）．しかし，女性の社会進出がある程度実現されつつある現代において，男性による女性に対する偏見という視点だけではなく，女性による女性への偏見という新たな視点も必要となってくると考えられる．以下では，この視点の必要性について述べる.

女性による女性への偏見

近年, 女性のサブタイプ化が進み, 一般に人は, 女性を単に女性として捉えるのではなく, 主婦のような伝統的な女性，キャリア女性のような非伝統的な女性，性的対象としての女性の 3 つのサブタイプから捉えやすいことが指摘されている（e.g., Deau, Winton, Crowley, & Lewis, 1985; Six & Eckes, 1991）．また，女性自身においても，ワーキングマザーのように, 伝統的性役割と非伝統的性役割の両方に就く女性も多い. また, 将来は,「家庭もキャリアも」という家庭と仕事の両立を目指す女子学生も少なくない．このような両方の役割に実際についている，あるいは両方を志向する女性は，伝統的な自己表象と非伝統的な自己表象両方を

保持していると考えられる．このように一人の女性において両方の自己が内在化しているとするならば, 常に伝統的女性と非伝統的女性両方に好意的になるという可能性もあるだろう．しかし，一人の女性が両方の性役割を保持しているからこそ，ある状況においては，伝統的女性に対してネガティブな評価をし，ある別の状況においては，非伝統的女性にネガティブな評価をしてしまう可能性も考えられよう．このような予測が立てられる根拠に，まず，ステレオタイプの活性化や偏見は，自己が置かれた状況に応じて状況依存的に生じるという知見が挙げられる（e.g., Kunda & Spencer, 2003; Blair, 2002）. 例えば, Spencer, Fein, Wolf, Fong, Sinclair, & Dunn（1998）は，実験参加者に，参加する実験が 2 種類あると伝え，まず知的テスト課題を行い，ネガティブなフィードバックあるいはポジティブなフィードバックを行った．次に，2 つ目の課題として語彙完成課題を行った．その課題の問題はビデオの中でアジア系アメリカ人あるいはヨーロッパ系アメリカ人が提示するカードで出題されていた．語彙完成課題においては，例えば，s_y の下線部の箇所に入るアルファベットを回答することが求められるが，完成単語がアジア人ステレオタイプと一致するようなアルファベットを，この場合だと h と答える（shy）と，アジア人ステレオタイプが活性化していると考えられている．その結果，ネガティブなフィードバックを受けるとアジア人ステレオタイプが，しかもネガティブなアジア人ステレオタイプのみが活性化することが示された．この結果は，人は状況に応じて，ステレオタイプのある側面を自動的に活性化できることを示している．

また，女性が女性に対してネガティブなステレオタイプや評価を行うことを示した知見もある．例えば，男性と女性は顕在的な態度の差異に関わらず，女性の権威者に対して女性は男性と同様に，潜在的なレベルではネガティブな態度を持っていることが示されている（Rudman & Kilianski, 2000）．また，Rudman（1998）では，女性実験参加者は男性実験参加者よりも，女性ステレオタイプに反する自己宣伝的な女性をネガティブに評価するという知見も報告されている．

これらのことから，女性が女性に対してステレオタイプを適用したり，偏見を示す可能性は十分にあると考えられるが, なぜ, どのようなときに女性が女性に対して偏見を示すのか, ということに関して焦点を当てて検討した研究はない．しかし，男性から女性という視点だけではなく，女性から女性という視点を取り入れていくことによって，今まで見過ごされてきたジェンダーの問題にアプローチすることができようになると考えられる．

本研究で想定するプロセス－現象的自己の機能

本研究では，女性が女性に対する偏見を示すプロセスとして，状況に応じて活性化する自己表象の機能に注目する．すなわち，一時的に活性化した自己表象がどのようなものであるかによって，その後の伝統的女性や非伝統的女性の認知や評価が異なったものになると予測する．

「自己」研究において，自己概念は，さまざまな自己に関する知識を含んでおり，非常に複雑で多面的であることが指摘されている．そして，ある側面の自己が活性化したら，それ

と連合したさまざまな属性や行動事例が想起されやすく使われやすい状態になると考えられている（沼崎，2002）．特定の時点で，ある側面の自己が顕現的になると，一時的にそれが自己概念として機能する．このような自己は，「現象的自己」と呼ばれている（Rhodewalt, 1998）．

家庭と仕事の両方を志向する女性は，伝統的な自己表象と非伝統的な自己表象の両方が自己概念の中に含まれていると考えられる．現象的自己の考え方に基づくと，家庭にいて，育児に専念しているときは，伝統的な自己が自己概念として機能し，仕事をしているときには，非伝統的な自己が自己概念として機能すると考えられる．このように，複数の自己を状況に応じてうまく使い分けることができるのは，自己の一貫性を保つための自己制御であるとBodenhausen, Macrae, and Hugenberg（2003）は指摘している．例えば，伝統的女性に対して社会から期待される属性や行動は，非伝統的女性のものとは対立し，そのような対立は自己の一貫性を脅かし，葛藤を引き起こす．そのような葛藤を抑えるために，伝統的女性の自己表象が活性化した場合には，それと対立する非伝統的女性の自己表象は自動的に抑制されると考えられている（e.g., Hugenberg & Bodenhausen, 2004）．

以上の知見から，伝統的な女性としての自己と非伝統的な女性としての自己の両方を保持している女性は，一方の自己表象が活性化している場合には，他方の自己表象を抑制させ，その後の対象に対する判断や評価が異なってくることが予測される．

では，具体的に，ある一方の女性の自己表象が活性化すると，伝統的女性や非伝統的女性をどのように判断したり，評価するようになるのだろうか．

女性サブタイプに対する評価とステレオタイプ化

本研究では，ある一方の女性タイプの自己表象が活性化している際の伝統的女性あるいは非伝統的女性に対する反応を，評価とステレオタイプの適用に区別して検討を行う．従来から，偏見とステレオタイプは概念的に区別され論じられてきた．偏見は，感情価を伴う態度レベルのものとして，ステレオタイプは認知レベルのものとして捉えられてきた．さらに，近年では，この 2 つを区別した上で測定すべきであるという指摘もなされており（e.g., Wittenbrink, Judd, & Park, 2001; Judd, Blair, & Chapleau, 2004），本研究においても評価（偏見）とステレオタイプを区別して検討することが必要だと考えた．よって，評価とステレオタイプの適用という２つの反応に対して，以下のように予測を立てて実験を行った．

評価

ある一方のタイプの自己表象が活性化している場合，同じタイプの女性に対しては好意的に，他方のタイプの女性に対しては非好意的な評価をすると予測される．すなわち，伝統的な女性の自己表象が活性化した場合には，非伝統的な女性の自己表象が活性化した場合に比べて，伝統的な女性に対してポジティブに評価し，非伝統的な女性に対してはネガティブに評価すると考えられる．この予測は，内集団－外集団へのカテゴリー化がおこると，内集団をポジティブに，外集団をネガティブに知覚させるといった評価の非対称性を生むことを指摘している社会的アイデンティティ理論（Tajifel & Turner, 1986）から説明可能であろう．

伝統的女性の自己表象が活性化すると，他の伝統的女性を内集団成員となり，非伝統的女性を外集団成員となってしまうために，それぞれに対する評価が異なってくると考えられる．

ステレオタイプ化

先に述べたように，伝統的な女性としての自己表象が活性化している場合には，伝統的な女性と連合したものも同時に活性化すると考えられる．例えば，伝統的な女性としての自己が顕現化すると，それに対応して伝統的女性がもっているだろう伝統的な価値観も活性化し，保守的なやり方でターゲットを判断する可能性が考えられる．一方，非伝統的な女性としての自己が顕現化すると，それに対応した平等主義的な価値観が活性化し，その価値観に基づいてターゲットを判断すると考えられる．よって，伝統的な女性の自己表象が活性化した場合には，非伝統的な女性の自己表象が活性化した場合よりも，ターゲット人物をよりステレオタイプ的に判断すると予測できる．

それでは，伝統的女性あるいは非伝統的女性のステレオタイプとはどのようなものなのだろうか．Fiske, Cuddy, Glick, & Xu（2002）は，一般的なステレオタイプは，「能力」と「あたたかさ」の 2 つの次元から構成されていると指摘している．さらに，多くのステレオタイプは，この 2 つの次元が負に相関し，両面価値的な内容になることが見出されている（e.g., Fiske, Xu, Guddy, & Glick, 1999; Glick & Fiske, 2001）．女性サブタイプに関しても，伝統的な女性は「能力は低いが，あたたかい」というステレオタイプに，非伝統的女性は「能力は高いが，冷たい」というステレオタイプになることが知られている（e.g., Glick, Diebold, Bailey-Werner, &Zhu, 1997）．この伝統的な女性のサブステレオタイプは，従来「男性 vs. 女性」という観点から捉えられてきたジェンダーステレオタイプの，典型的な女性ステレオタイプと一致し，女性性をあらわす属性（例えば，面倒見の良い，献身的な）がここに多く含まれる．一方，非伝統的な女性のサブステレオタイプは，従来の男性ステレオタイプと一致し，男性性をあらわす属性（例えば，決断力のある，指導力のある）がここに多く含まれる．

以上のことから，伝統的な女性の自己表象が活性化した場合には，非伝統的な女性の自己表象が活性化した場合よりも，伝統的女性をより女性的だと判断し，非伝統的女性をより男性的だと判断するようになるだろうと予測した．

方　法

実験参加者

女子大学生 53 名　回答に不備のあったもの 3 名を分析から除外した. 最終的な分析対象者は 50 名であった．

実験計画

プライム（伝統的女性 vs. 非伝統的女性）×ターゲット人物（家庭女性 vs. キャリア女性）×ステレオタイプ（男性性 vs. 女性性）×ベイレンス（ポジティブ vs. ネガティブ）．前 2 つが被験者間要因，後ろ 2 つが被験者内要因の混合要因計画であった．

手続き

実験は，授業中に一斉に行った．実験参加者には，2 つの無関連な調査に協力してほしいと依頼した．まず，最初に，「イメージングの研究」と称して，実験参加者は将来の自分の姿を想像するよう求められた．その際，伝統的女性プライム群では，「将来，結婚して良き妻，良き母になった自分」を想像させた．非伝統的女性プライム群では，「将来，キャリアウーマンとしてバリバリ働いている自分」を想像させた．3 分半想像させた後で，想像した内容を書き出させた．

次に，2 つ目の調査として，「対人認知の研究」と称して，架空のキャリア女性あるいは家庭女性のプロフールを提示し（Appendix1 参照），そのターゲット人物の印象を尋ねた．その際，43 つの特性語に 7 件法（1＝全く当てはまらない～7＝非常に当てはまる）で回答させた．それら特性語は，ステレオタイプ（男性性 vs. 女性性）×ベイレンス（ポジティブ vs. ネガティブ）の 4 つのカテゴリーから構成されていた（Appendix2 参照）．

最後に，最初の調査での想像のしやすさについて確認するために，「将来の自分の姿を想像するのがどのくらい困難だったか」と「どのくらいうまく将来の自分の姿を想像することができたか」について 7 件法（1＝全くできなかった～7＝非常にできた）で尋ねた．さらに，実験参加者本人のキャリア志向度を確認するため，「女性は結婚後も働き続けるべきだと思うか」と「あなたは結婚後も仕事を続けたいか」について 7 件法（1＝全く思わない～7＝非常に思う）で尋ねた．

実験終了後，実験目的と内容が説明されてある紙を配布し，デブリーフィングを行った．

結　果

予測された効果に対して，実験参加者がどのくらいうまく将来の自分を想像できたか，ということが影響すると考えられたため，想像しやすさについて尋ねた 2 つの質問項目の得点を合計し（r=.81, p＜.001），その得点の中央値（8.5）よりも高い得点の人を想像容易群，低い得点の人を想像困難群とした．さらに，4 カテゴリーの特性の得点をそれぞれ信頼性係数が最も高くなるように綱目を選び算出した．男性性・ポジティブ特性に関しては，「有能」「決断力のある」「自立した」「独立した」等の 10 項目（α＝.96），男性性・ネガティブ特性に関しては，「強引」「威圧的」「無愛想な」「そっけない」等の 10 項目（α＝.94），女性性・ポジティブ特性に関しては，「優しい」「あたたかい」「可愛らしい」「純真な」等の 10 項目（α＝.93），女性性・ネガティブ特性に関しては，「うるさい」「うわさ好き」「依存的」「なよなよした」等の 10 項目（α＝.92）の平均値を算出した．それらの得点に対し，プライム×ターゲット人物×想像の困難度×ステレオタイプ×ベイレンスの分散分析を行った．

その結果，ベイレンスの主効果（F(1, 42)=40.78, p＜.001），ステレオタイプ×ターゲット人物の交互作用効果（F(1, 42)=227.01, p＜.001），ベイレンス×ターゲット人物の交互作用効果（F(1, 42)=4.10, p＜.05），ステレオタイプ×ベイレンスの交互作用効果（F(1, 42)=4.76, p＜.05），

プライム×想像の困難度×ステレオタイプ×ベイレンスの交互作用効果（$F(1, 42)=5.18$, $p<.05$）が有意であった．

さらに，本研究で仮説を検証する上で重要となるプライムとターゲット人物の両方の要因を含む効果に，プライム×ターゲット人物×想像の困難度×ステレオタイプの交互作用効果（$F(1, 42)=4.32$, $p<.05$）とプライム×ターゲット人物×想像の困難度×ベイレンスの交互作用効果（$F(1, 42)=5.97$, $p<.05$）が有意であった．

プライム×ターゲット人物×想像の困難度×ステレオタイプの交互作用効果は，伝統的な女性としての自己表象をプライムされた場合には，非伝統的な女性としての自己表象をプライムされた場合に比べて，家庭女性に女性的なステレオタイプを適用し，キャリア女性に男性的なステレオタイプを適用したことを示すものであった．しかし，このパターンは，想像が容易だった実験参加者に限られ，想像が困難だった実験参加者ではこのようなパターンは見られなかった（Figure 1）．

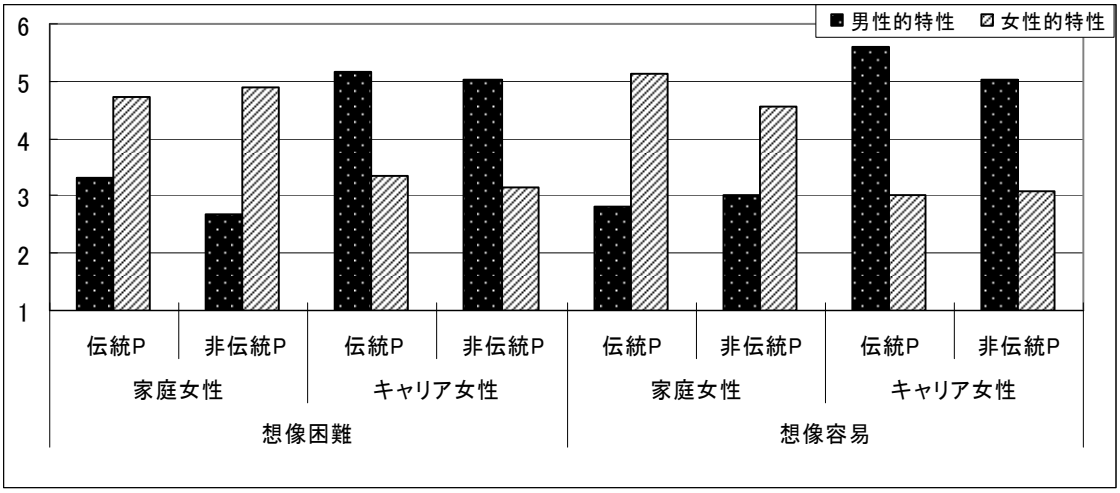

Figure 1　プライム×ターゲット人物×想像の困難度×ステレオタイプ

Note 1 ：伝統 P は伝統的女性プライム，非伝統 P は非伝統的女性プライムを意味する．

Note 2：値が高いほど，実験参加者がターゲット人物をそれらの特性があてはまると判断したことを示す．

プライム×ターゲット人物×想像の困難さ×ベイレンスの交互作用効果は，伝統的な女性としての自己表象をプライムされた場合には，非伝統的な女性としての自己表象をプライムされた場合に比べて，家庭女性をよりポジティブに，キャリア女性をよりネガティブに評価したことを示すものであった．しかし，このパターンも，想像が容易だった実験参加者に限られ，想像が困難だった実験参加者ではこのようなパターンは見られなかった（Figure 2）．

今回の結果では，プライム×ターゲット人物×ステレオタイプの交互作用効果，あるいは，プライム×ターゲット人物×ベイレンスの交互作用効果はいずれも有意ではなく，想像の困難度を要因に含んだ効果しか有意ではなかった．このことから，次のような代替仮説が考え

られた．すなわち，伝統的プライム群で想像が容易だった実験参加者は，もともと伝統的な性役割態度をもっていたため，キャリア女性をネガティブに評価し，ターゲット人物をステレオタイプ的に判断した可能性がある．また，同様に，非伝統的プライム群で想像が容易だった実験参加者は，もともと非伝統的な性役割を支持する態度をもっていたため，家庭女性をネガティブに評価し，ターゲット人物をステレオタイプ的に判断することを抑制したのかもしれない．この代替説明について検討するために，実験参加者本人のキャリア志向度を尋ねた 2 つの質問項目の合計得点（r=.79, p＜.001）に対して，プライム×想像の困難度の分散分析を行った．その結果，有意な効果は見られなかった（F(1, 42)=2.23, ns）．この結果は，プライム群と想像困難度において，実験参加者の志向の偏りがないことを示しており，上記の代替説明の可能性が小さいことを示唆していると考えられる．

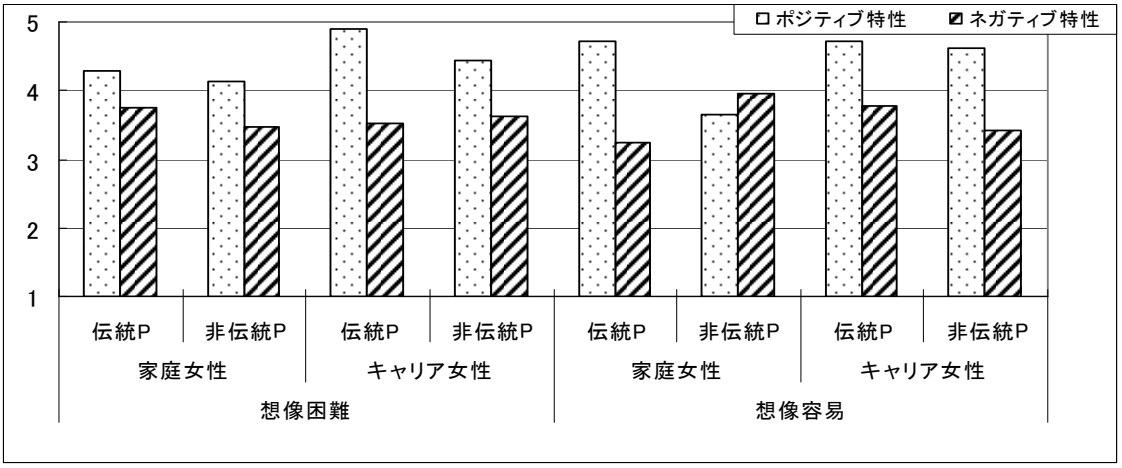

Figure 2　プライム×ターゲット人物×想像の困難度×ベイレンス

Note 1 ：伝統 P は伝統的女性プライム，非伝統 P は非伝統的女性プライムを意味する．

Note 2：値が高いほど，実験参加者がターゲット人物をそれらの特性があてはまると判断したことを示す．

考　察

本研究では，現代の女性が伝統的な女性としての自己と非伝統的な女性としての自己の両方を内在化させ，一方の自己表象が活性化すると他方の女性に対して偏見を示したり，ステレオタイプ的な判断を行う可能性について検討を行った．その結果，仮説は部分的に支持された．まず，活性化した自己表象と一致したタイプの女性は，好意的に評価された．さらに，伝統的な女性としての自己表象が活性化したときには，非伝統的な女性としての自己表象が活性化したときに比べて，ターゲット人物をよりステレオタイプ的に判断していた．しかしながら，これらの効果は自己表象をうまく活性化できた実験参加者のみに限られたものであった．

実験参加者のキャリア志向度に対して，プライム×想像の困難度の分散分析を行った結果

では，有意な効果は得らなかったため，本研究で得られた効果がプライムの効果によるものではなく，実験参加者が本来持っている志向の効果によるものであるという代替説明の可能性は小さいと考えられる. しかし, この代替説明を完全に否定することはできないであろう. なぜなら，実験参加者のキャリア志向は実験の最後に尋ねたものであるため，今回得られた実験参加者のキャリア志向度は実験操作の影響を受けた可能性がある．また，今回測定したキャリア志向度は，質問紙で直接尋ねるという顕在指標で回答されたものであり，社会的規範などの影響から実験参加者が真の自分の志向を回答していない可能性も考えられる．よって，今後は，事前に志向について尋ねておいたり，潜在指標を用いて志向を測定したりするなどして，追試する必要があると思われる.

また，本研究で想定したプロセスは，現象的自己の機能を前提に置いたものであった．すなわち，偏見やステレオタイプという帰結には，ある特定の自己表象の活性化が媒介していると考えていた．しかし，今回得られた結果が，本当に「伝統的女性としての自己」や「非伝統的女性としての自己」という自己表象の活性化によるものなのか，あるいは自己を含まない「伝統的女性」「非伝統的女性」という単なる概念構成体の活性化によるものなのか区別することはできない．近年，プライムと行動の間にあるプロセスに関してさまざまな理論が提出されている．例えば，イデオモータ理論では，ある行動を生じさせるには，自己に無関連なものであっても，その行動に関連した表象を活性化させるだけで十分であるとされている（e.g., Bargh, Chen, & Burrows, 1996; Dijksterhuis & Bargh, 2001）．一方，自動動機理論（Bargh, 1997）では，プライムー行動の効果は，目標や動機の自動的な活性化を媒介した間接的な効果であると考えられている．さらに，近年，DeMarree, Wheeler, and Petty（2005）は，プライム刺激は，一時的に自己情報にバイアスをかけ，それによって行動が変化するというプロセスを検討し，プライムー行動のプロセスに自己を媒介させる重要性を指摘している．これらの理論は，どれかひとつが正解ということではなく，想定されているそれぞれのプロセスは，状況に応じて生じうるものであると考えられる（Wheeler, DeMarree & Petty, 2005）．今後は，これらの理論を踏まえて，本研究のプライムとターゲット女性への反応が何を媒介しているのか，より具体的なプロセスを特定していき，状況に対応するプロセスを整理していくことが望まれるだろう.

以上のような限界はあるものの，本研究の結果では，ひとまず女性でも同性の女性に対して偏見を示すことがある，ということが明らかになったといえよう．これは，ジェンダーに基づく偏見について検討するにおいて，従来のような男性による女性への偏見という視点だけでは不十分であることを示唆している．本研究で導入した女性の女性に対する偏見という視点も考慮することによって，今までの知見では解決できなかったプロセスや現象にアプローチすることが可能となるだろう.

また，本研究では，ターゲット女性に対する反応を評価とステレオタイプの適用の２つから検討した．その結果，この２つは独立した効果をもつことが明らかとなった．近年，態度

レベルの偏見と認知レベルのステレオタイプを区別して検討する必要性が論じられているが（e.g., Wittenbrink et al., 2001; Judd et al., 2004），これらの２つの反応が独立したものなのか，相補的なものなのか，その関係性は明らかでない．今後，この２つのプロセスの関係性についても検討していくことも必要になるだろう．

さらに，本研究で得られた効果を潜在指標を用いて検討する必要もある．潜在指標で測定される反応と顕在指標で測定される反応や，それらが予測するものは異なっていることが多くの研究者によって指摘されている（e.g., Dovidio, Kawakami, &Gaertner, 2002; Fazio, 1990 ; Wilson, Lindsey, & Schooler, 2000）．本研究で得られた知見が，潜在指標を用いても再現されるのか, あるいは潜在指標では異なったパターンを示すのかを検討することによって，偏見やステレオタイプの潜在と顕在の関係についても有益な知見を提供できることが期待できるだろう．

引用文献

Bagh, J.A., Chen, M., & Burrows, L.（1996）. Automaticity of social behavior: Direct effects of trait construct and stereotype activation on action. *Journal of Personality and Social Psychology*, ***71***, 230-240.

Bargh, J. A. (1997). The automaticity of everyday life. In R. S. Wyer Jr. (Ed.), *Advances in social cognition* (Vol. 10). Mahwah, NJ: Erlbaum.

Blair, I.V.（2002）. The malleability of automatic stereotypes and prejudice. *Personality and Social Psychology Review*, ***6***, 242-261.

Bodenhausen, G. V., Macrae, C. N.,&Hugenberg, K. (2003). Activating and inhibiting social identities : Implications for perceiving the self and others. In G. V. Bodenhausen, & A. J. Lambert (Eds.), *Foundations of social cognition* (pp. 131–154). Mahwah, NJ: Erlbaum.

Deaux, K., Winton, W., Crowley, M., & Lewis, L. L. (1985). Level of categorization and content of gender stereotypes. *Social Cognition,* ***3***, 145-167.

Demarree, K.G., Wheeler, S.C., & Petty, R.E（2005）. Priming a new identity: Self-monitoring moderates the effects of non-self stereotype primes on self-judgments and behavior, *Journal of Personality and Social Psychology*, ***89***, 657-671.

Dijksterhuis, A., Bargh, J.A.（2001）. The perception－behavior expressway: Automatic effects of social perception on social behavior. In M P. Zanna（Ed.）, *Advances in experimental social psychology*（Vol. 33, pp.1-40）. San Diego, CA: Academic Press.

Dovidio,J.F., Kawakami,K., & Gaertner, S.L.（2002）. Implicit and explicit prejudice and interracial interaction. *Journal of Personality and Social Psychology*, ***82***, 62-68.

Eagly, A. H., Mladinic, A., & Otto, S.（1991）. Are women evaluated more favorably than men? *Psychology of Women Quarterly*, ***15***, 203-216.

Fazio, R. H. (1990). Multiple processes by which attitudes guide behavior: The MODE model as an integrative framework. In M. P. Zanna (Ed.), *Advances in experimental social psychology* (Vol.23, pp. 75–109). Orlando, FL: Academic Press.

Fiske, S. T., Cuddy, A. J., Glick, P., Xu, J.（2002）. A Model of (often mixed) stereotype content: competence and warmth respectively follow from perceived status and competition. *Journal of Personality and Social Psychology*, ***82***, 878-902.

Fiske, S. T., Xu, J., Guddy, A. C., & Glick, P.（1999）. (Dis)respecting versus (dis)liking : Status and interdependence predict ambivalent stereotype of competence and warmth. *Journal of Social Issues,* ***55***, 473-489.

Hugenberg, K. & Bodenhausen,G.V.（2004）. Category membership moderates the inhibition of social identities. *Journal of Experimental Social Psychology,* ***40***, 233-238.

Glick, P., & Fikse, S. T. (2001). Ambivalent stereotypes as legitimizing ideologies: Differentiating paternalistic and envious prejudice. In J. Jost & B. Major (Eds.)., *The Psychology of legitimacy* (pp.278-306). Cambridge, England : Cambridge University Press.

Glick, P., Diebold, J., Bailey-Werner, B., & Zhu, L. (1997). The two faces of Adam: Ambivalent sexism and polarized attitudes toward women. *Personality and Social Psychology Bulletin*., ***23***, 1323-1334.

Glick, P., Zion, C., & Nelson, C.（1988）. What mediates sex discrimination in hiring decisions? *Journal of Personality and Social Psychology,* ***55***, 178-186.

Judd, C. M., Blair, I. V., & Chapleau K. M.（2004）. Automatic stereotypes vs. automatic prejudice: Sorting out the possibilities in the weapon paradigm. *Journal of Experimental Social Psychology,* ***40***, 75-81.

Kunda, Z., & Spnecer, S. J.（2003）. When do stereotypes come to mind and when do they color judgement? A goal-based theoretical framework for stereotype activation and application. *Psychological Review*, ***129***, 522-544.

沼崎誠（2002）. 自己概念. 安藤清・船津衛（編者）. 自我・自己の社会心理学（Pp.78-95）. 北樹出版.

沼崎誠・工藤恵理子(1995) 女性との競争状況が男性の家庭志向型女性・キャリア志向型女性に対する好意に及ぼす効果　日本グループダイナミックス学会大会発表論文集，246－247.

沼崎誠・工藤恵理子 (2003) 脅威状況における性役割的偏見に関する研究　日本グループダイナミック学会第 50 回大会発表論文集，32－35.

Rhodewalt, F.（1998）. Self-presentation, and the phenomenal self: The “carryover effect” revised. In J. M. Darley & J. Cooper（eds.）, *Attribution and social interaction*: *The legacy of Edward E. Jones*, Washigton D.C.: American Psychological Association, 373-407.

Rudman, L. A.（1998）. Self-promotion as a risk factor for women: The costs and benefits of

counterstereotypical impression management. *Journal of Personality and Social Psychology,* ***74***, 629-645.

Rudman, L. A. & Kilianski, S. E. (2000). Implicit and explicit attitudes toward female authority. *Personality and Social Psychological Bulletin,* ***26***, 1315-1328.

Sinclair, L., & Kunda, Z. (2000). Motivated stereotyping of women: She's fine if she praised me but incompetence if she criticized me. *Personality and Social Psychological Bulletin*, ***26,*** 1329－1342.

Six, B., & Eckes, T. (1991). A closer look at the complex structure of gender stereotypes. *Sex Roles,* ***24***, 57-71.

Spencer, S. J., Fein, S., Wolf, C. T., Fong, C., & Dunn, M. A. (1998). Automatic Activation of Stereotypes: The role of self-image threat. *Personality and Social Psychological Bulletin*, ***24***, 1139－1152.

Tajifel, H., & Turner, J.C.（1986）. The social identity theory of intergroup behavior. In S. Worchel, & W. Austin（Eds.）, *Psychology of intergroup reactions*（pp.7-24）. Chicago: Nelson.

Wheeler, S. C., DeMarree, K. G., & Petty, R. E.（2005）. The roles of the self in priming-to-behavior effects, In A. Tesser, J. Wood, & D. Stapel (Eds.) *On building, defending and regulating the self: A psychological perspective(*pp. 245-272*)*, New York: Psychology Press.

Wittenbrink, B., Judd,C.M., & Park, B.（2001）. Evaluative versus conceptual judgments in automatic stereotyping and prejudice. *Journal of Experimental Social Psychology* **37,** 244–252.

Wilson, T. D., Lindsey, S., & Schooler, T. Y. (2000). A model of dual attitudes. *Psychological Review*, ***107,*** 101–126.

Appendix 1 実験で用いた刺激人物

家庭女性

現在の職業	専業主婦（30 才）
趣味	お菓子作り ガーデニング
よくみる TV 番組	ドラマ ワイドショー
好きな時間	近所の人たちと集まってお茶をする時間
配偶者に求めるもの	経済力，優しさ，誠実さ，包容力 リーダーシップ，隠し事はしないで欲しい
配偶者に対する態度	守られたい，引っ張っていってほしい 何よりも大事で，なくてはならない存在であり，最優先したい
将来	平凡でもいいから，心が安らげる家庭を築いていきたい. 子育てがおわったら，夫と旅行などして楽しくやっていきたい.
他者からの評価	周囲への配慮ができ，他の人からも信頼されている．古典的な日本人女性の良さをもっていると言える.

キャリア女性

Appendix 2 ターゲット評定の特性語

現在の職業	雑誌編集記者（30 才）
趣味	アウトドア 水泳
よくみる TV 番組	教養番組 ドキュメンタリー
好きな時間	ドライブをしている時間
配偶者に求めるもの	全てにおいて理解のある人がよい. 自分の世界には干渉して欲しくない.
配偶者に対する態度	対等の関係 精神的な支えであってほしい
将来	仕事でどんどん実績をあげて，最終的には編集長として活躍したい. 仕事は何があってもずっと続けていきたい.
他者からの評価	仕事の面においても優秀で，他の人から信頼されている．自分の生き方にはっきりした目標と自信を持っている.

男性性		女性性	
ポジティブ	ネガティブ	ポジティブ	ネガティブ
有能	傲慢	優しい	口やかましい*
決断力のある	強引	面倒見の良い	うるさい
自信のある	威圧的	あたたかい	でしゃばり*
指導力のある	頑固な	献身的	うわさ好き
勇敢な	高圧的	親しみやすい	おせっかい
自立した	無愛想な	優雅な*	おしゃべり
独立した	そっけない	純真な	八方美人
冷静	とっつきにくい	可愛らしい	臆病な
周りに流されない	冷たい	おしとやか	虚弱な
分析的	打ち解けない	繊細	なよなよした
		謙虚	頼りない
			依存的

注）*がついている特性は、分析に含めなかった。

Ⅵ．恋愛は女性に対するステレオタイプ化や偏見を強めるか？

－異性愛プライムと平等主義的性役割観が キャリア女性と家庭女性に対する印象や評価に及ぼす効果－

沼崎　誠　（首都大学東京）
高林　久美子　（一橋大学大学院）
天野　陽一　（東京都立大学大学院）

我々の日常生活において恋愛は最も重要な事柄の一つであり，精神的健康や身体的健康とも密接に結びついている(e.g., Bersheid & Reis, 1998)．1980 年代になるまでの社会心理学では異性愛に関する心理メカニズムについての研究は少なかったが，1990 年代以降，伝統的な親密な関係に注目する社会心理学の立場からも(e.g., Bersheid & Reis, 1998; Fehr, 2001; 松井, 1993)，新しい進化社会心理学の立場からも(e.g., Buss, 2005)，多くの研究がおこなわれるようになってきている．本研究は，社会心理学において重要な領域である異性愛関係と，もう一つの重要な領域である偏見とステレオタイプ化，特にジェンダーに関わる偏見とステレオタイプ化に関する研究とのリンクを目指すものである．

最近のステレオタイプの活性化や偏見の研究では，ステレオタイプの活性化や偏見が多くの状況的要因によって影響されることが指摘されている(e.g., Blair, 2002; Kunda & Spencer, 2003)．その中で最も注目されているのは，自己や内集団に対する脅威状況であり（e.g., Spencer, Fein, Zanna, & Olson, 2003，本報告書Ⅲも参照)，特に，集団間の葛藤状況がステレオタイプの活性化や適用そして偏見に繋がることは古くから多くの研究において示されている(e.g., Esses, Jackson, Dovido, & Hobson, 2005; Sherif, Harvey, White, Hodd, & Sherif, 1961; Stephan& Renfro, 2002)．Sherif 等による古典的研究においては，集団間に競争状況を作ることにより，相互の集団間関係が敵対的関係になること，その後，運命共同体的な状況の中で共同作業をすることにより敵対的関係が改善されることを見いだしている．また，沼崎・工藤(1995)は，男性参加者が女性と競争をした後では，競争とは無関係な女性の評定において，伝統的な規範的ジェンダー・ステレオタイプに不一致なキャリア志向女性に対する仕事仲間としての評価を低下させ，一致する家庭志向女性に対する評価を上昇させることを見いだしている．

しかし，最近の心理学におけるジェンダーに関わる偏見の理論によれば(e.g., Glick & Fiske, 2001)，集団間競争関係や葛藤関係ばかりではなく，協力関係や依存関係もまたステレオタイプの適用や偏見を強める可能性を示唆している．本研究は，異性愛における協力的な相互依存関係がジェンダー・ステレオタイプの適用や偏見を促進する可能性を検討しようとするものである．

Glick and Fiske（2001)は，男性が女性に対しては男性に対するよりも好意的な態度を取

ることに注目してアンビバレント・セクシズム理論を提出した（Glick & Fiske, 1996; 2001）．彼らは男性は女性に対して敵意的であると同時に好意的な態度を取ることを指摘し，従来の敵意的な偏見に加えて，好意を見せる慈愛的偏見があることも指摘した．この理論ではこれらの偏見の背後にある男女間の構造的関係に注目をし，男女間の勢力差と相互依存関係が共存することが，敵意的偏見と慈愛的偏見の両方を生み出すとしている．この理論では，男女間の勢力差と相互依存関係を強調する特有の領域として，3 つの領域 ── 家父長制・ジェンダー差異・異性愛 ── を指摘している．

他の集団間とは異なり，男女の集団は異性愛という親密な関係を形成する．異性愛の男性は幸福や充実した人生を得るためには女性との関係が必要であり，女性に対して親密な感情を持つ．その一方で，女性に依存していることは，女性によって男性の幸福や人生を支配されていることを意味し，女性に性的門衛（sexual gatekeepers）としての優位性を与えることにもなる．そのため，親密な感情とともに女性に対して脅威を感じ敵意を持つようにもなる．この脅威と敵意に関するテーマは文学作品に多く取り上げられており，ギリシャ喜劇のアリストパネスの『女の平和』が代表的なものであろう．この脅威や敵意のため，この親密な関係を対等な関係ではなく相補的でかつ支配－被支配の関係とするのが，男女双方に別々の社会的役割を与えるジェンダー差異であり，役割の分化である．Egaly（1987）の社会的役割理論によれば，現在見られるジェンダー役割の違いは，それ自体が永続する社会的構造により，記述的期待と規範を生み出し，男性に対しては支配を正当化する勢力に密接に関係する作動的（agentic）属性を付与し，女性に対しては被支配を正当化するとともに相補的な補助的な役割に必要な共同的（communal）属性を付与することとなる．また逆に，この属性に従い「男は仕事，女は家庭」といった役割分化が正当化されることになり，女性が仕事に就く場合でも他者を支援することに関わる補助的な職業が女性的職業（e.g., 看護師，秘書）として推奨される．そして，この社会的役割と属性におけるジェンダー差を正当化する装置として家父長制というイデオロギーがあるとされる．家父長制のイデオロギーには，男性は女性よりも勢力を持つべきだという支配的温情主義（dominant paternalism）とともに家父長的温情主義（protective paternalism）がある．家父長的温情主義とは，男性が男性支配を正当化するために，勢力に関わる作動性を女性に付与せず高い地位を与えない見返りとして，男性は自分に依存する女性を保護し養うという義務を負っていることを指す．この保護的温情主義が，女性に守られる立場を与え，そして，それに伴う望ましい特性（作動性低ポジティブ特性：可憐さ，純真さ）を女性に付与し，女性の補助的役割および地位の低さを維持する装置となる．つまり，女性に対して一見すると望ましく見える保護的温情主義は，男性にとっても女性にとっても，社会的役割と属性のジェンダー差異を前提とした現存のシステムを維持する装置として機能することとなる（Jost & Kay, 2005; Jost & Hamilton, 2005）．そして，社会的役割と属性のジェンダー差異が存在しているという前提に従う女性に対しては親密さや好意という慈愛的偏見を示し，

この前提に従わず，不平等な地位を伴う相互依存関係を否定し，対等な関係を目指す女性や支配を否定しようとする女性に対しては敵意的偏見を向けさせることに繋がる．

このような，敵意ばかりでなく好意に対しても注目する議論は，偏見の社会心理学的研究の文脈では目新しいものであるが，異性愛やセクシュアリティがジェンダー秩序を形成しているという議論はジェンダーの社会学において広く主張されているものである（e.g., 江原, 2001; 井上・上野・大澤・見田・吉見, 1995, 1996）．

これらの理論の主張は一言でまとめると，男女間の相補的な相互依存関係がジェンダーを再生産する装置となりうる，ということになろう．本研究はこれらの理論を受けて，男女間の相補的な相互依存関係がジェンダーを再生する過程で，どのような心理メカニズムが働いているかを明らかにしようとするものである．先の議論から予測されることは，異性愛という男女間の相補的な相互依存関係によって生じる慈愛的偏見の対象となるのは伝統的性役割に一致する女性に対してであり，敵意的偏見の対象となるのは伝統的性役割に一致しない女性に対してであろう．

最近のジェンダー・ステレオタイプ研究では，アンビバレント・セクシズム理論と整合する形で，伝統的性役割に一致する女性と伝統的性役割に不一致な女性では異なったステレオタイプが持たれていることが主張され，（特に女性において）サブグループが顕著であることが，ジェンダー・ステレオタイプが他のステレオタイプと異なるもう 1 つの大きな特徴として指摘されている（e.g., Deau, Winton, Crowley & Lewis, 1985; Six & Eckes, 1991）．女性のサブグループとしては，伝統的な性役割人物（e.g., 主婦，母親），性の対象としての役割人物（e.g., 娼婦），非伝統的な性役割人物（e.g., キャリアウーマン，フェミニスト）の 3 つが主に見いだされ，これらサブグループは異なった内容のステレオタイプが持たれていることが指摘されている（Glick & Fiske, 2001）．伝統的性役割に一致した女性では，地位格差のある相補的相互依存関係に適合するよう「共同性は高い（温かい）が，作動性は低い（無能である）」といったステレオタイプの内容となり，伝統的性役割と不一致な人物は，このステレオタイプとは対照的な「作動性は高い（有能である）かもしれないが，共同性は低い（冷たい）」という内容になりやすことが実証的に示されている（Fiske, Cuddy, Glick, & Xu, 2002）．そして，Glick, Diebold, Bailey-Werner, and Zhu（1997）が示しているように，サブグループに対する偏見とステレオタイプ化は連動している可能性がある（本報告書Ⅲも参照）．

このような議論を受けて，本研究では，男女の相互依存関係である異性愛に関する知識が活性化したときに，伝統的性役割に一致した女性（専業主婦）と伝統的性役割に不一致な女性（キャリア・ウーマン）に対する偏見（慈愛的偏見と敵意的偏見の双方）とステレオタイプ化が強化されるかを，男性参加者（研究 1）と女性参加者（研究 2）を用いて検討した．

研究１：男性に及ぼす影響

研究１では，男性を実験参加者として，男女の相互依存関係を示唆する異性愛に関する概念を活性化したときに，伝統的性役割に一致した女性（専業主婦）と伝統的性役割に不一致な女性（キャリア・ウーマン）に対する偏見やステレオタイプ化が強化されるかを検討した．男女の相互依存関係は男性にとり，支配－被支配を維持するために男性の作動性と女性の共同性が相補的になる関係が望ましいものと考えられる．ここから，伝統的性役割に一致する女性に対しては慈愛的偏見を，伝統的性役割に不一致な女性に対しては敵意的偏見を向けると考えられる．このことから，異性愛に関わる概念が活性化した時には家庭女性に対してポジティブな評価をキャリア女性に対してネガティブな評価になると予測できるであろう．また，偏見とステレオタイプ化が連動するとすれば，異性愛に関わる概念が活性化したときには，家庭女性をより女性的にキャリア女性を男性的に印象評定すると予測できるであろう．

本研究ではさらに，上記の効果を調整する変数についても明確化することを試みた．MS という脅威状況では伝統的性役割観を持つと主張する男性と平等主義的性役割観を持つと主張する男性では，異なったパターンが見られた（本報告書Ⅲを参照）．そこで，調整変数として顕在的に測定される平等主義的性役割観を測定し，顕在的性役割観が上記効果に影響を及ぼすかも検討した．平等主義的性役割観とは，個人としての男性と女性の平等性に関する信念である．平等主義的性役割観を持つと主張する男性と伝統的性役割観を持つと主張する男性のどちらの方が，異性愛に関わる概念が活性化したときにアンビバレント・セクシズムが強化されるかについては必ずしも明確ではないと考えられる．

まず，平等主義的性役割観の強いと主張する男性の方が影響を受けやすい可能性が考えられる．伝統的性役割観の強いと主張する男性は，通常の状況においても，女性を潜在的な異性愛の対象と見なす傾向があると考えられる．そのため，異性愛に関する知識の活性化は伝統的性役割観が強いと主張する人には影響を及ぼしづらいかもしれない．それに対して，平等主義的性役割観が強いと主張する男性は，通常の状況では女性を評価するのに複数の次元を用い，女性を１人の個人として扱おうとする傾向があると考えられる．しかし，異性愛に関する知識が活性化すると，女性を潜在的恋人として評価する傾向が強くなる可能性があろう．もし，そうであるとするならば，平等主義的性役割観の強いと主張する男性の方が異性愛に関する知識の活性化の影響を受けやすいであろう．

その一方で，伝統的性役割観が強いと主張する男性の方が影響を受けやすい可能性も考えられる．伝統的性役割観が強いと主張する男性は異性愛関係を，伝統的に性役割分業の観点 ── 女性は家庭，男性は仕事 ── から捉えているのに対して，平等主義的性役割観が強いと主張する男性では，異性愛関係をより平等的観点から捉えていると考えられる．も

しそうであるとするならば，伝統的性役割観が強いと主張する男性の方が異性愛に関する知識の活性化の影響を受けやすいであろう．

本研究では，あらかじめ平等主義的性役割観尺度に回答させてあった男性に、異性愛に関係する単語を含む対連語のリストを記憶するように教示するか（異性愛プライム群），異性愛関係に無関係な単語のみを含む対連語のリストを記憶するように教示した（統制群）．その後，家庭女性（専業主婦）かキャリア女性のいずれかのプロフィールを読ませ，一般的好意・恋人としての評価・上司としての望ましさに関して評価させた．さらに，伝統的な意味での男性的特性と伝統的な意味での女性的特性で，対象女性の印象評定をおこなわせた．偏見に関する仮説としては次のような仮説を設けた：異性愛プライム群は統制群に比べ，家庭女性にポジティブな評価をキャリア女性に対してネガティブな評価をするであろう．ステレオタイプ化に関する仮説としては次のような仮説を設けた：異性愛プライム群は統制群に比べ，家庭女性は伝統的女性特性を持ちキャリア女性は伝統的男性特性を持つという印象を持つであろう．最後に，これらの効果の大きさは，参加者が持つ平等主義的性役割観によって影響を受けるであろうという仮説も設けた．

方　法

実験参加者

一般教養の心理学を受講している明星大学男子大学生 62 名．あらかじめ実験に参加することにより出席点を与えられると伝えた．7 名の参加者は回答を拒否するか，または，重要な項目に未記入の回答があったため分析から除外し，残りの 55 名を分析の対象とした．

手続き

本実験の約 8 週間前に，授業時間中の集団セッションで，他の尺度とともに，平等主義的性役割尺度ショート・バージョン（Scale of Egalitarian Sex Roles Attitudes（SESRA）; 鈴木, 1994）に回答させた．

本実験は集団でおこなった．実験参加者には，記憶実験と対人認知に関する 2 つの無関連な実験に参加するように依頼した．実験参加者には封筒を一通ずつ配布した．その封筒には，「記憶課題」冊子，「対人認知質問紙」冊子，「記憶課題解答用紙」の入った小封筒を入れておいた．

異性愛プライミング　第 1 の記憶実験として，「記憶課題」冊子を封筒から取り出させた．実験参加者には 3 ページ目に書かれている対連語を，あとでテストをするので，憶えておくように教示した．異性愛に関する概念を活性化させるため，半数の参加者には 7 対の異性愛に関係する語が含まれる対連語を，無関連な 7 対の対連語とともに学習させた（Appendix 1 参照）．統制群として，半数の参加者には 14 対の異性愛に無関係な対連語を学習させた．そのうちの 7 対の対連語は異性愛群と同じ異性に無関連な対連語であった．再生テストは，もう一つの対人認知の実験の後におこなうと告げた．

評定人物の操作　第 2 実験は対人認知の実験であると実験参加者に告げ，封筒から「対

人認知質問紙」を取り出させた．実験参加者には，ある女性のプロフィールを読みいくつかの質問に答えるよう依頼した．家庭女性のプロフィールとして，既婚で 2 歳の子供を 1 人持っている 30 歳の専業主婦の女性を提示し，予備調査で家庭女性に典型的とされた情報を含めた．キャリア女性のプロフィールとして，未婚で子どもを持たない 30 歳の雑誌編集者の女性を提示し，予備調査でキャリア女性に典型的とされる情報を含めた（Appendix 2 参照）．

従属変数の測定　実験参加者は，家庭女性かキャリア女性のいずれかのプロフィールを読んだ後，7 件法の印象評定尺度に回答した．一般的な好意を聞く項目として，「この女性に対してどの程度好感が持てますか？」と「この女性はどの程度魅力的な人だと思いますか？」の 2 項目に対して回答させた．恋愛対象としての評価を聞く項目として，「将来，このようなタイプの女性と恋人として付き合いたいですか？」と「将来，このようなタイプの女性と結婚したいですか？」の 2 項目に対して回答させた．上司としての望ましさを聞く項目として，「あなたが将来就職したとして，職場の上司として，このようなタイプの女性と一緒に働きたいと思いますか？」の 1 項目に回答させた．さらに，性格特性語 40 語に対して，「まったく当てはまらない(1)」から「非常に当てはまる(7)」の 7 件法で印象評定をさせた．性格特性語は，伝統的な意味での男性的ポジティブ特性 10 語（e.g., 勇敢な, 分析的な), 伝統的な意味での男性的ネガティブ特性 10 語 (e.g., 傲慢な, 無愛想な), 伝統的意味での女性的ポジティブ特性 10 語（e.g., 親しみやすい，おしとやかな)，伝統的な意味での女性的ネガティブ特性 10 語（e.g., おせっかいな，頼りない）から構成されていた（Appendix 3 参照）．その他いくつかの質問項目にも回答させた後，最後に，操作チェックの項目として，「この女性はどの程度キャリア志向だと思いますか？」と「この女性はどの程度家庭志向だと思いますか？」の 2 つの項目に 7 件法で回答させた．

全ての参加者が対人認知質問紙に回答した後，最初に配布した封筒に入っている小封筒の中から記憶課題解答用紙を取り出させ，5 分間時間を与え再生課題をおこなわせた．

再生課題終了後，実験参加者には本研究の目的を詳しく示した用紙を配布し，ディブリーフィングをおこなった．

結　果

分析の方針　平等主義的性役割観尺度の得点を標準化した上で，従属変数に対して，平等主義的性役割観とプライムと女性のタイプと全ての交互作用効果を含んだ回帰分析をおこなった．*Figure* に図示する場合には，平等主義的性役割観者は回帰式から SESRA の+1 σ の得点を，伝統的性役割観者は回帰式から SESRA の -1 σ 得点を求め提示した．

操作チェック　「この女性はどの程度キャリア志向だと思いますか？」の評定値に対して回帰分析をおこなったところ，女性のタイプの主効果が有意であった($F(1, 47)=22.75$, $p<.001$)．キャリア女性($M=6.03$)は家庭女性($M=4.27$)に比べ，キャリア志向が強いと認知さ

れていた．それに加え，SESRA ×プライムの交互作用効果も有意であった（$F(1, 47)=4.73$, $p<.05$）．この効果は，統制群では平等主義的なほど女性をキャリア志向であると判断するのに対して，異性愛プライム群では平等主義的なほど女性をキャリア志向的でないと判断したことによるものである．しかし，女性のタイプを含む交互作用効果に加えその他の効果は有意ではなかった．「この女性はどの程度家庭志向だと思いますか？」の評定値に対して回帰分析をおこなったところ，女性のタイプの主効果のみが有意であった（$F(1, 47)=267.98$, $p<.001$）．家庭女性（$M=6.27$）はキャリア女性（$M=2.52$）に比べ，家庭志向が強いと認知されていた．その他の効果は有意ではなかった．これらの結果から，操作は成功したと言えよう．

一般的好意　「この女性に対してどの程度好感が持てますか」と「この女性はどの程度魅力的な人だと思いますか」の 2 項目の平均値を一般的好意の指標とした（$\alpha=.89$）．この指標に対して，回帰分析をおこなったところ，女性のタイプの主効果が有意であった（$F(1, 47)=5.22$, $p<.05$）．家庭女性（$M=5.57$）はキャリア女性（$M=4.90$）に比べ，好意を持たれていた．しかし，この効果は，仮説から予測される SESRA ×プライム×女性のタイプの 3 要因の交互作用効果が有意であることから制限を受ける（$F(1, 47)=6.12$, $p<.05$）．この効果をプロットしたのが *Figure 1* である．ここからわかるように，平等主義的性役割観を持っていると主張する男性においては，異性愛プライムを受けると家庭女性に対する好意を高め，キャリア女性に対する好意を低下させる方向であった．それに対して，伝統的性役割観を持っていると主張する男性においては，異性愛プライムを受けるとキャリア女性に対する好意を高め，家庭女性に対する好意を低下させる方向にあった．この結果は，平等主義的性役割観を持っている人においてのみ偏見に関する仮説が支持されることを示唆している．

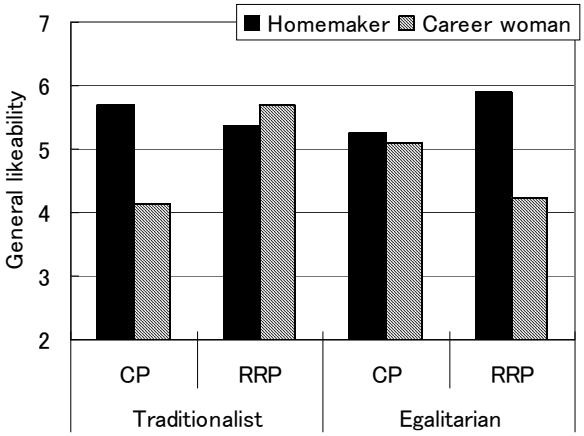

Figure 1. General likeability as a function of SESRA, priming, and target

NOTE: CP=Control Priming, RRP=Romantic Relationships Priming.
Traditionalist=SESRA score -1*SD*, Egalitarian=SESRA score +1*SD*

恋愛対象としての評価　「将来，このようなタイプの女性と恋人として付き合いたいで

すか」と「将来，このようなタイプの女性と結婚したいですか」の 2 項目の平均値を恋愛対象としての評価の指標とした（α=.90）．この指標に対して，回帰分析をおこなったところ，女性のタイプの主効果のみが有意であった（F(1, 47)=6.99, p<.05）．異性愛プライムや SESRA の得点とは関係なく，家庭女性（M=4.96）はキャリア女性（M=3.29）に比べ，恋愛対象として高く評価されていた（see *Figure* 2）．

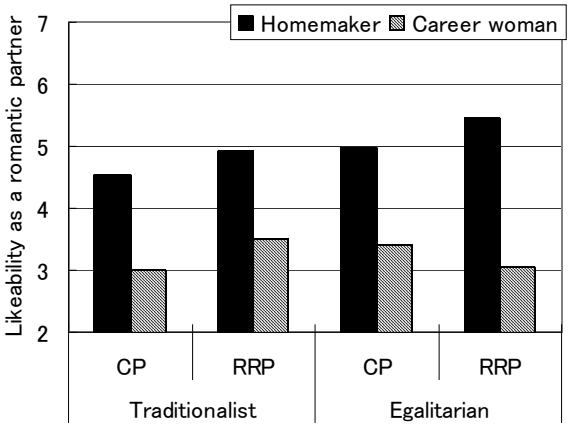

Figure 2. Likeability as a romantic partner as a function of SESRA, priming, and target

NOTE: CP=Control Priming, RRP=Romantic Relationships Priming.
Traditionalist=SESRA score -1*SD*, Egalitarian=SESRA score+1*SD*

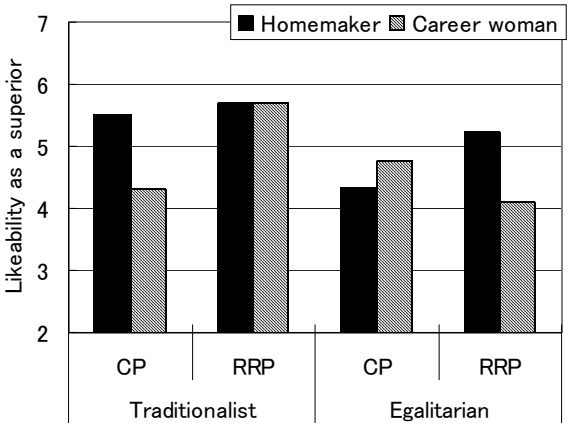

Figure 3. Likeability as a superior as a function of SESRA, priming, and target

NOTE: CP=Control Priming, RRP=Romantic Relationships Priming.
Traditionalist=SESRA score -1*SD*, Egalitarian=SESRA score+1*SD*

上司としての望ましさ　「あなたが将来就職したとして，職場の上司として，このようなタイプの女性と一緒に働きたいと思いますか」の回答に対して回帰分析をおこなったところ，仮説から予測される SESRA ×プライム×女性のタイプの 3 要因の交互作用効果が有意であった（F(1, 47)=4.35, p<.05）．この効果をプロットしたのが *Figure* 3 である．ここからわかるように，平等主義的性役割観を持っていると主張する男性においては，異性愛プライムを受けると家庭女性の上司としての評価を上昇させ，キャリア女性の上司として

の評価を低下させる方向であった．それに対して，伝統的性役割観を持っていると主張する男性においては，異性愛プライムを受けるとキャリア女性を上司として高く評価する方向であった．この結果は，平等主義的性役割観を持っている人においてのみ偏見に関する仮説が支持されることを示唆している．

男性性・女性性評定[*1]　男性的ポジティブ 10 特性（α=.86），女性的ポジティブ 10 特性（α=.86），男性的ネガティブ 10 特性（α=.93），女性的ネガティブ 10 特性（α=.78）に対する評定の平均値を求めた．この値に対して，平等主義的性役割観を標準化した上で，平等主義的性役割観とプライムと女性タイプを参加者間要因として，特性語ジェンダーと特性語感情価を参加者内要因とした，全ての交互作用効果を含んだ回帰分析をおこなった．回帰分析の結果，特性語ジェンダーの主効果と特性語感情価の主効果，および，特性語ジェンダー×特性語感情価の交互作用効果が有意であった（$F(1, 42)=28.44$, $p<.001$; $F(1, 42)=82.02$, $p<.001$; $F(1, 42)=7.18$, $p<.05$）．これらの効果に加え，特性語ジェンダー×女性タイプの交互作用効果と特性語感情価×女性タイプの交互作用効果が有意であった（$F(1, 42)=74.40$, $p<.001$; $F(1, 42)=6.64$, $p<.05$）．前者の効果は，キャリア女性（M=5.05）は家庭女性（M=3.72）に比べより男性的性格であり，家庭女性（M=4.20）はキャリア女性（M=3.44）に比べて女性的性格であると評定されたことによるものである．後者の効果は，家庭女性（M=4.78）とキャリア女性（M=4.72）とではポジティブな性格評定には差がないが，キャリア女性（M=3.76）は家庭女性（M=3.14）に比べネガティブな性格であると評定されたことによるものである．それに加え，特性語ジェンダー×特性語感情価×女性タイプの交互作用効果も有意であった（$F(1, 42)=7.72$, $p<.01$）．この交互作用効果は，男性的なネガティブ性格特性においては家庭女性よりもキャリア女性の方が当てはまると評定されるのに対して，女性的なネガティブな性格特性においては，キャリア女性よりも家庭女性の方が当てはまるとは評定されず，キャリア女性と家庭女性の間に差が見られないことによるものである（see *Figure 4*）．

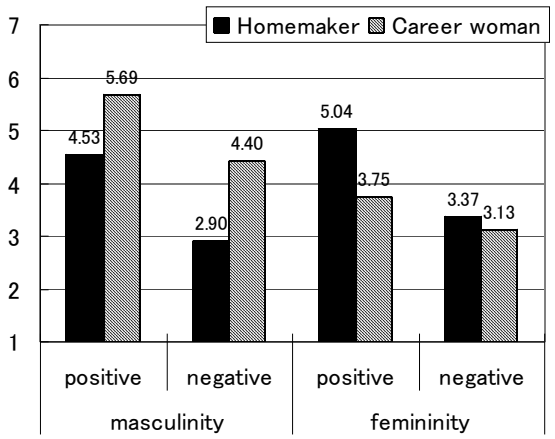

Figure 4. Mean ratings as a function of target, gender of traits, and valence of traits

*1 この分析には性格特性語の評定に欠損値のない 50 名の実験参加者のみを用いた．

上記の効果に加え，本研究の目的に関連するプライムを含む交互作用効果では，SESRA×特性語ジェンダー×女性のタイプ×プライムの交互作用効果が有意であった（$F(1, 42)=5.40$, $p<.05$）．この効果を詳しく見るために，男性的特性語と女性的特性語ごとに回帰分析をおこなったところ，女性的特性語では SESRA ×女性のタイプ×プライムの 3 要因の交互作用効果は有意ではなかったが（$F(1, 42)=0.18$, *ns*），男性的特性語では SESRA ×女性タイプ×プライムの 3 要因の交互作用効果が有意であった（$F(1, 42)=6.43$, $p<.05$）．この効果をプロットしたのが *Figure 5* である．ここからわかるように，伝統的性役割観を持っていると主張する男性においては，異性愛プライムを受けるとキャリア女性の男性性を高く評定する方向に，家庭女性の男性性を低く評定する方向に変化していた．それに対して，平等主義的性役割観を持っていると主張する男性おいてはむしろ逆の方向であった．つまり，伝統的性役割観の高い男性では，男性性に関してサブグループのステレオタイプの違いを拡大する方向であるのに対して，平等主義的性役割観が強いと主張する男性ではサブグループのステレオタイプの違いを縮小する方向に評定するようになった．この結果は，伝統的性役割観を持っていると主張する男性においてのみステレオタイプ化に関する仮説が支持されることを示唆している．

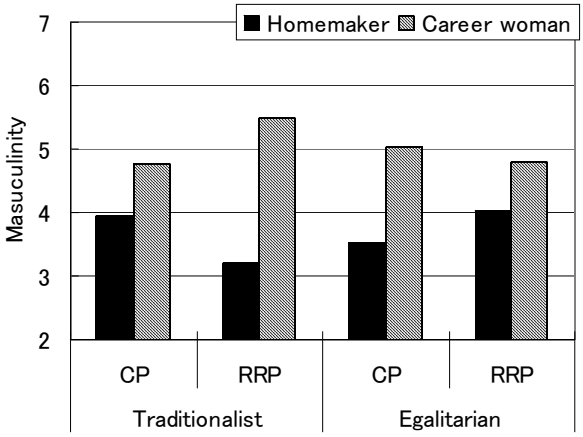

Figure 5. Masculinity ratings as a function of SESRA, priming, and target

NOTE: CP=Control Priming, RRP=Romantic Relationships Priming.
Traditionalist=SESRA score -1*SD*, Egalitarian=SESRA score+1*SD*

考　察

本研究には 3 つの仮説があった．第 1 の偏見に関する仮説は，異性愛プライミングを受けた男性参加者は統制群の参加者に比べ家庭女性に対してポジティブな評価をキャリア女性に対してネガティブな評価になるであろう，というものであった．第 2 のステレオタイプ化に関する仮説は，異性愛プライムを受けた男性参加者は統制群の参加者に比べ家庭女性をより女性的にキャリア女性を男性的に評定するであろう，というものであった．第 3 の仮説は，上記の傾向は参加者が主張する平等主義的性役割観によって調整されるであろう，というものであった．

一般的好意の指標と上司としての望ましさの指標において 3 要因の交互作用効果が有意となり，平等主義的性役割観が強いと主張する男性においてのみ第 1 の仮説は支持され，伝統的性役割が強いと主張する男性ではむしろ逆のパターンを示した．男性的性格特性評定において 3 要因の交互作用効果が有意となり，伝統的性役割観が強いと主張する男性においてのみ第 2 の仮説は支持され，平等的性役割観が強いと主張する男性ではむしろ逆のパターンを示した．これらの結果は仮説 3 を支持するものであった．これらの結果は，本報告書のⅢで報告した死すべき運命が顕現化するという脅威状況と同様に，男女の相互依存関係を示唆する異性愛に関わる概念が活性化したときでも，伝統的性役割観が強いと主張する男性と平等主義的性役割観が強いと主張する男性では，伝統的性役割に一致する女性と一致しない女性に対して異なったステレオタイプ化や偏見を示すことを示唆するものである．平等主義的性役割観が強いと主張する男性と伝統的性役割観が強いと主張する男性のそれぞれの結果について順に考察をしてみたい．

顕在的な平等主義的性役割観尺度において高い得点を取る平等主義的性役割観が強いと主張する男性においては，一般的好意の評定において，統制群では家庭女性とキャリア女性では差が見られなかったものが，異性愛プライムがなされると，家庭女性をキャリア女性に比べて高く評価するという結果が得られた．異性愛プライム群での結果は，一般的好意と恋愛の対象としての評価とが同じパターンを示している．これらの結果は，平等主義的であると主張する男性は，通常の状況では，女性を評価するときに様々な評価次元を持っているものが，異性愛に関する概念が活性化したときには，女性を潜在的な恋愛の対象とみなし，その観点から評価しやすくなることを示唆していると考えられよう．そのため，女性との恋愛に関する概念が活性化すると，伝統的な性役割に一致する女性をポジティブに評価し不一致な女性をネガティブに評価するという偏見を示しやすくなったと考えられる．

一方，顕在的な平等主義的性役割観尺度において低い得点を取る伝統的性役割観が強いと主張する男性では，一般的好意と恋愛対象としての評価のどちらにおいても，統制群で，家庭女性をキャリア女性に比べて高く評価するという結果を示していた．これらの結果は，伝統的性役割観の高い人は，異性愛に関する概念が活性化していないときでも，女性を潜在的な恋愛の対象としてみており，この観点から評価していることを示唆していると考えられよう．しかし，この議論だけでは，異性愛プライム群において，キャリア女性に対する一般的好意や上司としての望ましさを伝統的性役割観が強いと主張する人が高めたという結果を説明できない．なぜこのような結果が得られたのであろうか．男性性評定の結果において，伝統的性役割観が強いと主張する男性では，異性愛プライム群では家庭女性の男性性を低く，キャリア女性の男性性を高く評定するようになっていた．これらの結果は，異性愛に関わる概念が活性化すると，両方のタイプの女性に対して，女性のサブカテゴリー・ステレオタイプを適用しやすくなることを示唆している．そして，彼らは家庭女性の

みを潜在的な恋愛の対象者 ── 彼らにとっては女性 ── とみなすようになり，キャリア女性を女性カテゴリーから除外したのではないだろうか．そのため，伝統的性役割観が強いと主張する男性では，異性愛に関わる知識が活性化したときキャリア女性を評価する場合に，彼らが通常女性を評価する次元とは異なった評価次元を使用するようになり，キャリア女性の作動性により注目をするようになったのであろう．その結果，キャリア女性の上司としての望ましさを高く評価するようになり，それに伴って，一般的好意も高めるという結果が生じたと考えられよう．伝統的性役割観が強いと主張する男性が，状況によってサブカテゴリー・ステレオタイプの適用を強め，キャリア女性の仕事面での能力を高く評価するようになるという結果は，本報告書Ⅲで示したように，死すべき運命が顕現化した脅威状況でも見られた結果である．脅威状況においても男女の相互依存関係を示唆する状況においても，伝統的性役割観の高いと主張する男性はサブカテゴリー・ステレオタイプを強化することによって，女性に対する優位を維持するという方略をとりやすいことを，これらの結果は示唆していると考えられよう．

本研究の結果は，男性では男女の相互依存関係を示唆する状況において，平等主義的性役割観が強いか弱いかにより違いはあるものの，女性に対するサブカテゴリー・ステレオタイプの適用，または，性役割的偏見が強まることを示唆している．それでは，男女の協力的な相互依存関係のもう一方の当事者である女性においても，相互依存関係が顕現化した状況では，女性に対するサブカテゴリー・ステレオタイプ化や性役割的偏見の強化が見られるであろうか．第 2 研究では，女子大学生を実験参加者にして，この問題について検討をおこなった．

研究 2：女性に及ぼす影響

研究 2 では，男性で見られた，男女の相互依存関係を示唆する状況において，女性に対するサブカテゴリー・ステレオタイプの適用と性役割的偏見が強まる傾向が女性参加者でも見られるかどうかについて，女子大学生を実験参加者にして検討をおこなった．

男性では，支配－被支配を正当化するために相互依存関係を地位の不平等を前提とした相補的な相互依存関係を維持するように，女性に対してアンビバンレントな性役割的偏見が強化されると考えられたが，女性が女性に対して同様な偏見を向けるであろうか．異性愛関係は男性だけではなく女性にとっても重要であり，異性愛や結婚は女性の幸せにとって重要であると多くの独身女性にとっても考えられている（e.g.，社会保障・人口問題研究所, 2002）．また，男女の相補的な相互依存関係は男性ばかりでなく女性が受容することによって成立し，慈愛的偏見という一見すると女性にとっても望ましく見える形態も取るので，少なくとも一部の女性に対しても男性と同様の効果を持つ可能性があろう．

関連する研究として，赤澤(1999)は，恋人を持ちその相手との結婚を意識しているものは，恋人がいない女性や恋人がいても結婚を意識していない女性に比べ，男性的行動をより男性にふさわしいものと認識し，女性的行動を実行していることを報告している．また，Rudman & Heppen(2003)は女性の異性愛に関わるファンタジーと勢力志向性との関係について検討をおこない，「ガラスの靴効果(A glass slipper effect)」という興味深い現象を見いだしている．彼女らは，IAT(Implicit Association Test)を用いて(e.g., Greenwald, McGhee, & Schwartz, 1998)，恋人とヒーローやナイトとがどれだけ潜在的に連合しているかを測定し，勢力志向性を顕在的尺度により測定した．結果として，異性愛に関わるファンタジーが強い女性参加者ほど，勢力志向性が低いことを見いだしている．これは，少なくとも，異性愛の対象を保護的な男性とするような女性においては，伝統的性役割分業を自ら受け入れることを示唆している．Rudman & Heppen(2003)の研究は，異性愛に関する信念と自己の社会進出に関する関係を検討しているものであるが，伝統的性役割分業を受け入れるとすれば，女性のサブグループに対する評価も，異性愛に関する概念が活性化すれば，男性と同様な偏見を示す可能性も考えられよう．また，その一方で，異性愛の対象を保護的な男性としない，つまり従来の異性愛関係を拒否する女性においてはそのような効果は得られないことも予想できる．

そこで，研究 2 でも研究 1 と同様に，平等主義的性役割観をあらかじめ測定した女性を実験参加者にして，異性愛プライムの有無を操作し家庭女性かキャリア女性の評価と印象評定を測定した．男性と同様に，異性愛プライム群は統制群に比べ，家庭女性にポジティブな評価をキャリア女性に対してネガティブな評価をするであろう，という偏見に関する仮説を，異性愛プライム群は統制群に比べ，家庭女性は伝統的女性特性を持ちキャリア女性は伝統的男性特性を持つという印象を持つであろう，というステレオタイプ化に関する仮説を設けた．最後に，上記傾向は伝統的性役割観の強い人において顕著に見られ，平等主義的性役割観の強い人では見られづらいであろうという仮説を設けた．

方　法

実験参加者

一般教養の心理学を受講している明星大学女子大学生 29 名．あらかじめ実験に参加することにより出席点を与えられると伝えた．

手続き

研究 1 と同時に実施した．研究 1 との相違点は，男性に回答させた恋愛対象としての評価を聞く項目（「将来，このようなタイプの女性と恋人として付き合いたいですか」，「将来，このようなタイプの女性と結婚したいですか」）に回答させない点のみであった．

結　果

分析の方針　研究 1 と同様の方法で分析をおこなった．*Figure* に図示する場合には，平等主義的性役割観者は回帰式から SESRA の 1 σ の得点を，伝統的性役割観者は回帰式から SESRA の -1 σ 得点を求め提示した．

操作チェック　「この女性はどの程度キャリア志向だと思いますか？」の評定値に対して回帰分析をおこなったところ，女性のタイプの主効果が有意であった（$F(1, 28)=27.35$, $p<.001$）．キャリア女性（$M=6.67$）は家庭女性（$M=4.18$）に比べ，キャリア志向が強いと認知されていた．それに加え，SESRA の効果も有意であった（$F(1, 28)=5.33$, $p<.05$）．この効果は，平等主義的な女性参加者はどちらの女性に対してもキャリア志向を高く判断したことによるものであった．しかし，全ての交互作用効果は有意ではなかった．「この女性はどの程度家庭志向だと思いますか？」の評定値に対して回帰分析をおこなったところ，女性のタイプの主効果のみが有意であった（$F(1, 28)=43.70$, $p<.001$）．家庭女性（$M=6.00$）はキャリア女性（$M=2.75$）に比べ，家庭志向が強いと認知されていた．その他の効果は有意ではなかった．これらの結果から，操作は成功したと言えよう．

一般的好意　「この女性に対してどの程度好感が持てますか」と「この女性はどの程度魅力的な人だと思いますか」の 2 項目の平均値を一般的好意の指標とした（$\alpha=.80$）．この指標に対して，回帰分析をおこなったところ，全ての効果は有意ではなかった（$Fs<1$, *ns*）．

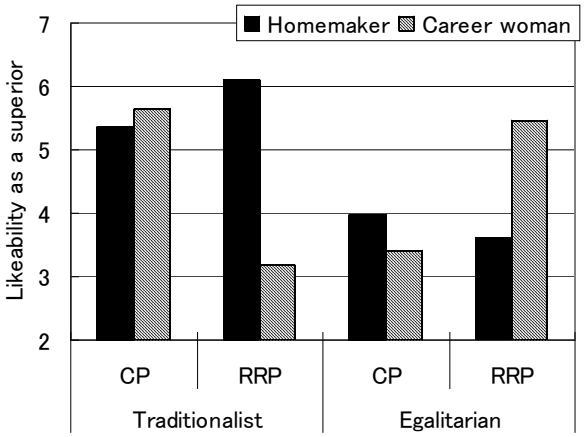

Figure 6. Likeability as a superior as a function of SESRA, priming, and target

NOTE: CP=Control Priming, RRP=Romantic Relationships Priming.
Traditionalist=SESRA score -1*SD*, Egalitarian=SESRA score+1*SD*

上司としての望ましさ　「あなたが将来就職したとして，職場の上司として，このようなタイプの女性と一緒に働きたいと思いますか」の回答に対して回帰分析をおこなったところ，SESRA の効果と SESRA ×女性のタイプの交互作用効果が有意であった（$F(1, 28)=7.94$, $p<.05$; $F(1, 28)=6.52$, $p<.05$）．しかし，これらの効果は，仮説から予測される SESRA ×プライム×女性のタイプの 3 要因の交互作用効果が有意であることから制限を受ける（*F*

(1, 28)=7.12, p<.05)．この効果をプロットしたのが *Figure 6* である．ここからわかるように，伝統的性役割観を持っていると主張する女性においては，異性愛プライムを受けるとキャリア女性の上司としての評価を低下させ，家庭女性の評価を上昇させる方向であるのに対して，平等主義的性役割観を持っていると主張する女性においては，異性愛プライムを受けるとキャリア女性を上司として評価を上昇させる傾向にあった．

男性性・女性性評定[*2]　男性的ポジティブ 10 特性（α=.96），女性的ポジティブ 10 特性（α=.89），男性的ネガティブ 10 特性（α=.92），女性的ネガティブ 10 特性（α=.84）に対する評定の平均値を求めた．この値に対して，平等主義的性役割観を標準化した上で，平等主義的性役割観とプライムと女性タイプを参加者間要因として，特性語ジェンダーと特性語感情価を参加者内要因とした，全ての交互作用効果を含んだ回帰分析をおこなった．回帰分析の結果，女性タイプの主効果と特性語感情価の主効果が有意であった（F(1, 17)=10.38, p<.01; F(1, 17)=26.40, p<.001)．これらの効果に加え，特性語ジェンダー×女性タイプの交互作用効果と SESRA ×特性語ジェンダーの交互作用効果が有意であった（F(1, 42)=62.13, p<.001; F(1, 17)=6.03, p<.05)．前者の効果は，キャリア女性（M=5.09）は家庭女性（M=3.15）に比べより男性的性格であり，家庭女性（M=4.29）はキャリア女性（M=3.21）に比べて女性的性格であると評定されたことによるものである．後者の効果は平等主義的性役割観が強いと主張する女性ほどどちらの女性に対しても男性的特性を低く，女性的特性を高く評定したことによる効果である．本研究の目的に関連するプライムを含む交互作用効果で有意になった効果はなかった．

考　察

研究 2 では，女性を実験参加者として，女性に対するサブカテゴリー・ステレオタイプの適用と性役割的偏見が強まる傾向が女性参加者でも見られるかどうかについて検討をおこなった．

ステレオタイプの適用の指標である男性的性格および女性的性格に対する印象評定では効果は見られなかったが，偏見の指標の 1 つと考えられる上司としての望ましさでは，仮説から予測される 3 要因の交互作用効果が有意であった．伝統的性役割観が強いと主張する女性においては，異性愛に関する概念が活性化すると，家庭女性の上司としての望ましさが上昇しキャリア女性の上司としての望ましさが低下していた．この結果は，平等主義的性役割観の強い男性で見られた結果と同様のものであった．一方，平等主義的性役割観が強いと主張する女性においては，異性愛に関する概念が活性化すると，キャリア女性の上司としての望ましさが上昇していた．しかし，男性で見られた上司としての望ましさの変化とサブカテゴリー・ステレオタイプの適用の強化の連動は，女性参加者においては見

*2 この分析には性格特性語の評定に欠損値のない 25 名の実験参加者のみを用いた．

られず，また，一般的好意においてはこのような効果は得られなかった．

異性愛に関する概念が活性化していない場合には，伝統的性役割が強いと主張する女性と平等主義的性役割が強いと主張する女性では，上司としての望ましさに関して家庭志向女性とキャリア志向女性の相対的な評価にほとんど差が見られていない．しかし，異性愛プライムを受けると，伝統的性役割観が強いと主張する女性はキャリア女性に比べ家庭女性を高く評価し，平等主義的性役割観が強いと主張する女性は家庭女性に比べキャリア女性を高く評価するようになった．このパターンは，本報告書Ⅲの研究 2 で報告した，死すべき運命の顕現化という脅威状況でのパターンとパラレルな関係にあった．これは，通常の状況では，伝統的性役割観の強いと主張する女性も平等主義的性役割観が強いと主張する女性も，参加者自身の女性集団に基づいて，外集団であると考えられる特定の女性に対するサブカテゴリー・ステレオタイプや偏見に基づいた判断をしないが，ある状況においては（Ⅲでは死すべき運命の顕現化状況，本研究では異性愛に関わる概念が活性化した状況），男性参加者が示す慈愛的偏見と敵意的偏見とは異なった形ではあるが，女性参加者も女性をサブカテゴリー化して自分自身の規範から外集団/内集団を分化し，ジェンダー・ステレオタイプに基づいた偏見を示すことが示されたと言えよう．一般的好意では効果が見られなかった理由として，顕在的尺度で自分の回答が意識できる状況においては，一般的好意に比べ上司としての望ましさの方が特殊であるがために，偏見を示すことに対する罪の意識を感じずに済む可能性が考えられよう．しかし，この点に関しては，さらなる検討が必要であろう．また，本研究の実験参加者は相対的に少なく，この結果がどの程度まで一般化できるかについてはさらなる検討が必要であろう．

総 合 考 察

男女の相互依存関係である異性愛に関する知識が活性化することにより，伝統的性役割に一致した女性（専業主婦）と伝統的性役割に不一致な女性（キャリア・ウーマン）に対する偏見（慈愛的偏見と敵意的偏見の双方）とステレオタイプ化が強化されるかを，男性参加者（研究 1）と女性参加者（研究 2）を用いて検討した．

異性愛が顕現化すると，伝統的性役割観が強いと主張する男性ではサブカテゴリー・ステレオタイプを強化し，平等主義的性役割観が強いと主張する男性では伝統的性役割に一致した家庭女性に対して好意的偏見を不一致なキャリア女性に対しては敵意的偏見を向けるようになっていた．一方，伝統的性役割観が強いと主張する女性でも平等主義的性役割観が強いと主張する女性でも，上司としての望ましさにおいて，女性を 2 つのサブカテゴリーに分化して，自分の規範と一致する女性に対してポジティブな評価を一致しない女性に対してネガティブな評価を向けるようになっていた．

このような男性と女性の心理メカニズムは，勢力差を前提とした相補的な相互依存関係の再生産とどのように関わるであろうか．伝統的性役割が強いと主張する男性では，キャリア女性をサブタイプ化し女性というカテゴリーからはずすことにより，男女の相違という自分の強い信念を守ったと考えることができるであろう(e.g., Maurer, Park, & Rothbart, 1995; Weber & Crocker, 1983)．そして，キャリア女性を少数の例外と見なすことにより，依然として女性を保護の対象として見ることができ，男女の勢力差を前提とした相補的な相互依存関係を維持しようとしたと考えることができよう．一方，平等主義的性役割観が強いと主張する男性では，異性愛が顕現化すると，一般的好意や上司としての望ましさで見られるように，家庭女性に対して慈愛的偏見をキャリア女性に対しては敵意的偏見を向け，男女の勢力差にチャレンジを試みる女性をことさら排除し，勢力差を前提とした相補的な相互依存関係の維持に寄与する女性をことさら受容することにより，男女の勢力差を前提とした相補的な相互依存関係を維持しようとしたと考えることができよう．2 つの方略は異なったものであるが，どちらも，伝統的な意味での男女関係の維持に寄与する方略である．

一方，伝統的性役割観が強いと主張する女性では，異性愛が顕現化すると，家庭女性に対してポジティブな評価をキャリア女性に対してはネガティブな評価をするようになった．Rudman & Happen(2003)は，男性は女性を保護すべきであるという世界観を持っている女性では勢力志向性が低いことを見いだしているが，このような女性は，彼女の世界観を維持する女性を受容し破壊しかねない女性を排除することにより，自分の世界観を守ろうとしたと考えられよう．そして，このことが勢力差を前提とした相補的な相互依存関係の維持に結果的に寄与することとなろう．それに対して，平等主義的性役割観が強いと主張する女性では，異性愛が顕現化すると，自分の世界観に適合するキャリア女性に対してポジティブな評価をするようになった．これは，勢力差を前提とした相補的な相互依存関係を壊す契機になるように思われる．とはいえ，女性のサブグループ化を前提とし，女性を内集団成員と外集団成員といった 2 つのグループに分け異なった評価を振り分けることを意味し，それ自体がジェンダー秩序の維持に寄与する可能性も否定できない．しかし，女性においては，このような結果が見られたのが上司としての望ましさの評価だけであり，一般的好意ではこのような効果が見られなかった．この結果は，本報告書のⅢの死すべき運命の顕現化状況とは異なり，たとえ異性愛が顕現化しても，伝統的性役割観が強いと主張する女性も平等的性役割観が強いと主張する女性も，伝統的性役割に一致する女性と不一致な女性に対して，一般的好意では区別をしない可能性を示唆している．このような心理メカニズムは勢力差を前提とした相互依存関係の変えていくための契機となる希望を与えるものであろう．

今後の研究課題として，本研究では顕在的ステレオタイプ化と偏見を測定したが，異性愛が潜在的ステレオタイプ化や偏見に対しても同様の効果を持つかを検討していく必要が

あろう．つまり，本研究で見られた反応が自動的過程によって生じたものか，統制された過程によって生じたかを明確にしていく必要があろう．さらに，本報告書のＶで示した，自己表象の活性化との関係を明確にしていく研究も興味深いものとなろう．結婚を意識すると，少なくとも行動の面においては，伝統的性役割に一致した行動が男性においても女性においても取られやすくなることが示されている（赤澤, 1997, 1999）．行動の変化は必ずしも自己表象の変化が伴っているとは言えないが，異性愛関係が活性化することにより，自己ステレオタイプ化が生じ自己の表象が変化する可能性は十分に考えることができよう．自己ステレオタイプ化と他者へのステレオタイプの適用や偏見が密接に結びついていることは社会的アイデンティティ理論が示すところである（e.g., Turner, 1987）．異性愛が顕現化した状況では自己表象がどのようになっているのか，そして，自己表象の変化と他者へのステレオタイプの適用と偏見がどのように結びついているのかという問題は実証的に検討するに値する興味深い課題であろう．このような実証研究の中から，男女間の勢力差を前提とした相補的な相互依存関係を維持させてしまう心理メカニズムを明らかにすることができるであろう．そして，この心理メカニズムを明らかにすることにより，関係の再生産過程を断ち切るための要因を見いだすことが可能となるであろう．

引　用　文　献

赤澤淳子（1997）．恋愛は性別役割行動の再生産システムか？（Ｉ）　日本社会心理学会第38回大会発表論文集, 322-323.

赤澤淳子（1998）. 恋愛の進展に伴う行動および意識の変化－カップルの横断的比較を通して－　日本グループ・ダイナミックス学会第47回大会発表論文集, 104-105.

アリストパネス（1975）. 女の平和. 高津春繁（訳）岩波書店

Berscheid, E., & Reis, H.T.（1998）. Attraction and close relationships. In. D. T. Gilbert, S. T. Fiske, & G. Lindzey（Eds.）, *The handbook of social psychology, 4th edition, Vol. 2.* New York: Oxford Press. pp. 193-281.

Blair, I. V.（2002）. The malleability of automatic stereotypes and prejudice. *Personality and Social Psychology Review, 6*, 242-261.

Buss, D. M.（Ed.）（2005）. *The handbook of evolutionary psychology.* Hoboken, N.J.: Wiley.

Deaux, K., Winton, W., Crowley, M., & Lewis, L. L.（1985）. Level of categorization and content of gender stereotypes. *Social Cognition, 3,* 145-167.

Egaly, A. H.（1987）. *Sex differences in social behavior: A social-role interpretation.* Hillsdale, NJ: Erlbaum.

江原由美子（2001）. ジェンダー秩序　勁草書房

Esses, V. M., Jackson, L. M., Dovidio, J. F., & Hodson, G.,（2005）. Instrumental relations

among groups: Group competition, conflict, and prejudice. In J. F. Dovidio, P. Glick, & L. A. Rudman（Eds.）*On the nature of prejudice: Fifty years after Allport.* Malden, MA: Blackwell. pp. 227-243.

Fehr, B.（2001）. The status of theory and research on love and commitment. In G. J. O. Flecher, & M. S. Clark（Eds.）, *Blackwell handbook of social psychology: Interpersonal processes.* Malden, MA: Blackwell. pp. 331-356.

Fiske, S. T., Cuddy, A. J. C., Glick, P., & Xu, J.（2002）. A model of（often mixed）stereotype content: Competence and warmth respectively follow from perceived status and competition. *Journal of Personality and Social Psychology, 82*, 878-902.

Fisk, S. T., & Stevens, L. E.（1993）. What's so special sex? Gender stereotyping and discrimination In S. Okamp & M. Costanzo（Eds.）, *Gender issues in contemporary society: Claremont Symposium on Applied Social Psychology, Vol. 6.* Newbury Park, CA: Sage. pp. 173-196.

Glick, P., Diebold, J., Bailey-Werner, B., & Zhu, L.（1997）. The two faces of Adam: Ambivalent sexism and polarized attitudes toward women. *Personality and Social Psychology Bulletin, 23,* 1323-1324.

Glick, P., & Fiske, S. T.（1996）. The ambivalent Sexism Inventory: Differentiating hostile and benevolent sexism. *Journal of Personality and Social Psychology, 70,* 491-512.

Glick, P., & Fiske, S. T.（2001）. Ambivalent sexism. In M. P. Zanna（Ed.）, *Advances in Experimental Social Psychology,*（Vol. 33, pp. 115-112）. San Diego, CA: Academic Press.

Greenwald, A. G., McGhee, D. E., & Schwartz, J. L. K.（1998）. Measuring individual differences in implicit cognition: The Implicit Association Test. *Journal of Personality and Social Psychology, 74*, 1464-1480.

井上俊・上野千鶴子・大澤真幸・見田宗介・吉見俊哉（編）（1995）. 岩波講座 現代の社会学 11 ジェンダーの社会学 岩波書店

井上俊・上野千鶴子・大澤真幸・見田宗介・吉見俊哉（編）（1996）. 岩波講座 現代の社会学 10 セクシュアリティの社会学 岩波書店

Jost, J. T., & Kay, A. C.（2005）. Exposure to benevolent sexism and complementary gender stereotypes: Consequences for specific and diffuse forms of system justification. *Journal of Personality and Social Psychology, 88*, 498-509.

Jost, J. T., & Hamilton, D. L.（2005）. Stereotypes in our culture. In J. F. Dovidio, P. Glick, & L. A. Rudman（Eds.）*On the nature of prejudice: Fifty years after Allport.* Malden, MA: Blackwell. pp. 208-224.

国立社会保障・人口問題研究所（2002）. 結婚と出産に関する動向調査：独身者調査 http://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou12_s/doukou12_s.htmL.

Kunda, Z., & Spencer, S. J.（2003）. When do stereotypes come to mind and when do they color judgment? A goal-based theoretical framework for stereotype activation and application. *Psychological Review, 129*, 522-544.

松井豊（1993）. 恋ごころの科学　サイエンス社

Maurer K.L., Park B., Rothbart M.（1995）. Subtyping versus subgrouping processes in stereotype representation. *Journal of Personality and Social Psychology, 69*, 812-824.

沼崎誠・工藤恵理子（1995）. 女性との競争状況が男性の家庭志向型女性・キャリア志向型女性に対する好意に及ぼす効果　日本グループダイナミックス学会第 43 回大会発表論文集, 246-247.

Rudman, L. A., & Heppen, J. B.（2003）. Implicit romantic fantasies and women's interest in personal power: A glass slipper effect. *Personality and Social Psychology Bulletin, 29*, 1357-1370.

Sherif, M., Harvey, O. J., White, B. J., Hood, W. R., & Sherif, C. W.（1961）. *Intergroup conflict and cooperation: The Robbers Cave experiments.* Norman, OK: University of Oklahoma Book Exchange.

Six, B., & Eckes, T.（1991）. A closer look a the complex structure of gender stereotypes. *Sex Roles, 24,* 57-71.

Spencer, S. J., Fein, S., Zanna, M. P., & Olson, J. M.（2003）. *Motivated social perception: The Ontario Symposium, Vol. 9.* Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associations, Publishers.

Stephan, W. G., & Renfro, C. F.（2002）. The role of threat in intergroup relationships. In D. M. Mackie, & E. R. Smith（Eds.）, *From prejudice to intergroup emotions: Differential reactions to social groups.* New York: Psychology Press. pp. 191-207.

Suzuki, A.（1991）. Egalitarian sex role attitudes: Scale development and comparison of American and Japanese women. *Sex Roles, 24,* 245-259.

鈴木淳子（1991）. 平等主義的性役割態度：SESRA（英語版）の信頼性と妥当性の検討および日米女性比較　社会心理学研究, *6*, 80-87.

鈴木淳子（1994）. 平等主義的性役割態度スケール短縮版（SESRA-S）の作成　心理学研究, *65*, 34-41.

Turner, J. C.（1987）. Rediscovering the social group: A self-categorization theory. Cowley Road, Oxford, UK: Basil Blackwell.

Weber, R., & Crocker, J.（1983）. Cognitive processes in the revision of stereotypic beliefs. *Journal of Personality and Social Psychology, 45*, 961-977.

Appendix 1 異性愛プライミングに用いた対連語

○異性愛群の対連語	○統制群の対連語	○共通対連語
告白 ― ラブレター	授業 ― 休講	風景 ― 絵画
観覧車 ― デート	仲間 ― サークル	ハマグリ ― 砂浜
教会 ― 結婚	ランチ ― 学食	山脈 ― アルプス
子犬 ― 恋人	専門 ― 先端	堤防 ― 川岸
ケーキ ― ウエディング	アルバイト ― 夏休み	野球 ― 矢印
長距離 ― 恋愛	飲み会 ― 居酒屋	サッカー ― トロフィー
指輪 ― 婚約	友人 ― 旅行	漫画 ― アニメ

Appendix 2　評定対象人物

○家庭女性（専業主婦）

現在の職業	専業主婦（30才）
家族構成	夫（32才）　娘（2才）
最終学歴	4年制大学
趣味	お菓子作り ガーデニング
よくみるTV番組	ドラマ ワイドショー
好きな時間	近所の人たちと集まってお茶をする時間
好きな本	推理小説
日々気をつけていること	バランスのよい食事をとること
パートナーに求めるもの	経済力、リーダーシップ、誠実さ、包容力 家族を大切に思っていてほしい。
パートナーに対する態度	最優先で考えたい。 大切な存在であり、どんなときでも助け合っていきたい。
将来	平凡でもいいから、心が安らげる家庭を築いていきたい。 子育てがおわったら、夫と旅行などして楽しくやっていきたい。
他者からの評価	周囲への配慮ができ、他の人からも信頼されている。古典的な家庭女性の良さをもっていると言える。

○キャリア女性

現在の職業	雑誌編集記者（30才）
家族構成	父（55才）　母（53才）
最終学歴	4年制大学
趣味	アウトドア 水泳
よくみるTV番組	教養番組 ドキュメンタリー
好きな時間	満足できる仕事をしている時間
好きな本	推理小説
日々気をつけていること	バランスのよい食事をとること
パートナーに求めるもの	全てにおいて理解のある人がよい。 自立心のある人がよい。
パートナーに対する態度	対等な関係 精神的な支えであってほしい。
将来	仕事でどんどん実績をあげて、最終的には編集長として活躍したい。 仕事は何があってもずっと続けていきたい。
他者からの評価	仕事の面においても優秀で、他の人から信頼されている。今後の仕事内容について多くの人から期待されている。

Appendix 3　印象評定語一覧

男性的ポジティブ特性語

勇敢な
指導力のある
自信のある
決断力のある
有能な
周りに流されない
分析的な
冷静な
独立した
自立した

女性的ポジティブ特性語

献身的な
あたたかい
面倒見の良い
優しい
親しみやすい
繊細な
おしとやかな
可愛らしい
純真な
謙虚

男性的ネガティブ特性語

高圧的な
頑固な
強引な
傲慢な
威圧的な
冷たい
打ち解けない
とっつきにくい
そっけない
無愛想な

女性的ネガティブ特性語

うわさ好き
でしゃばりな
うるさい
口やかましい
おせっかい
頼りない
なよなよした
依存的な
虚弱な
臆病な